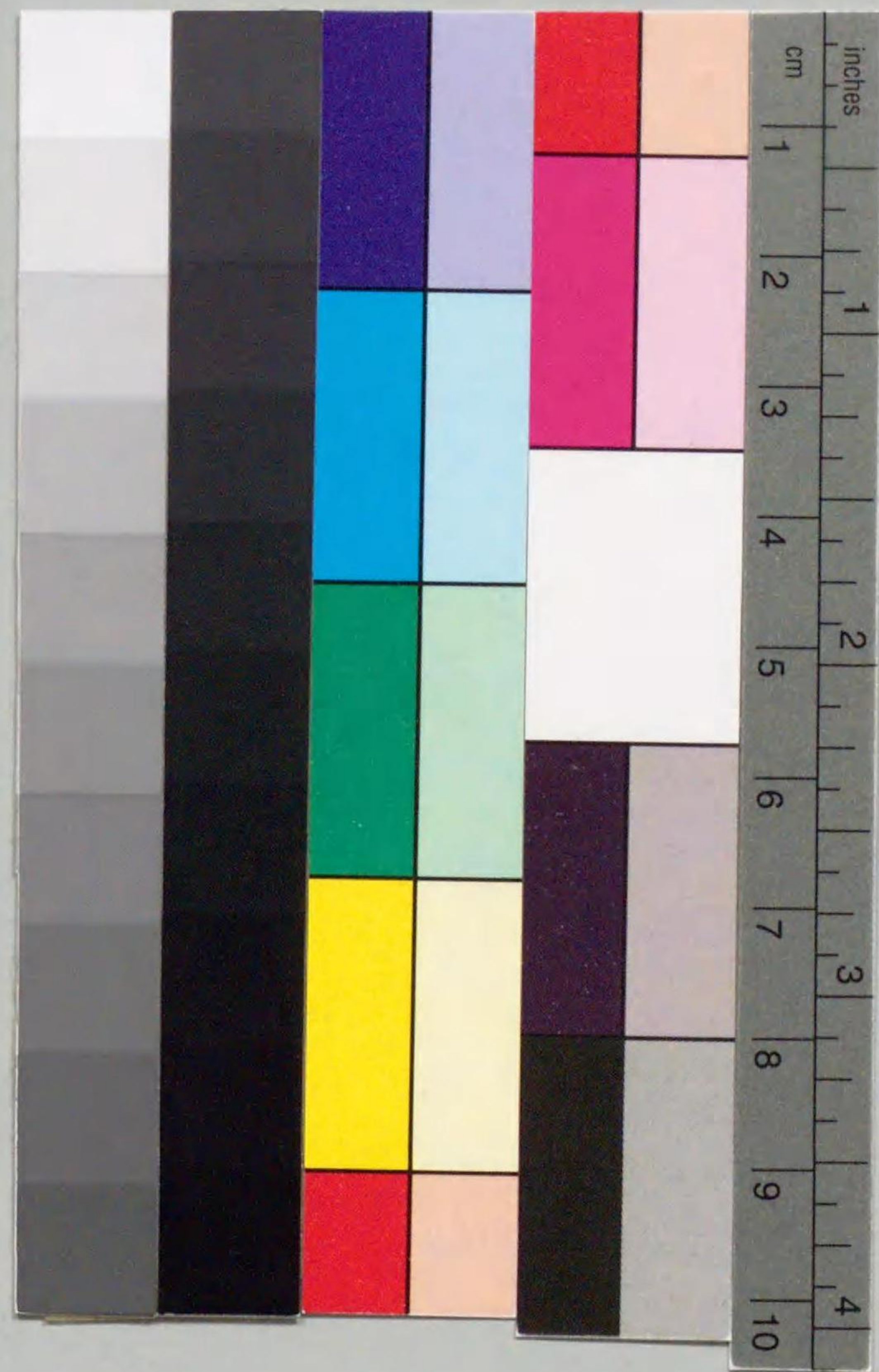
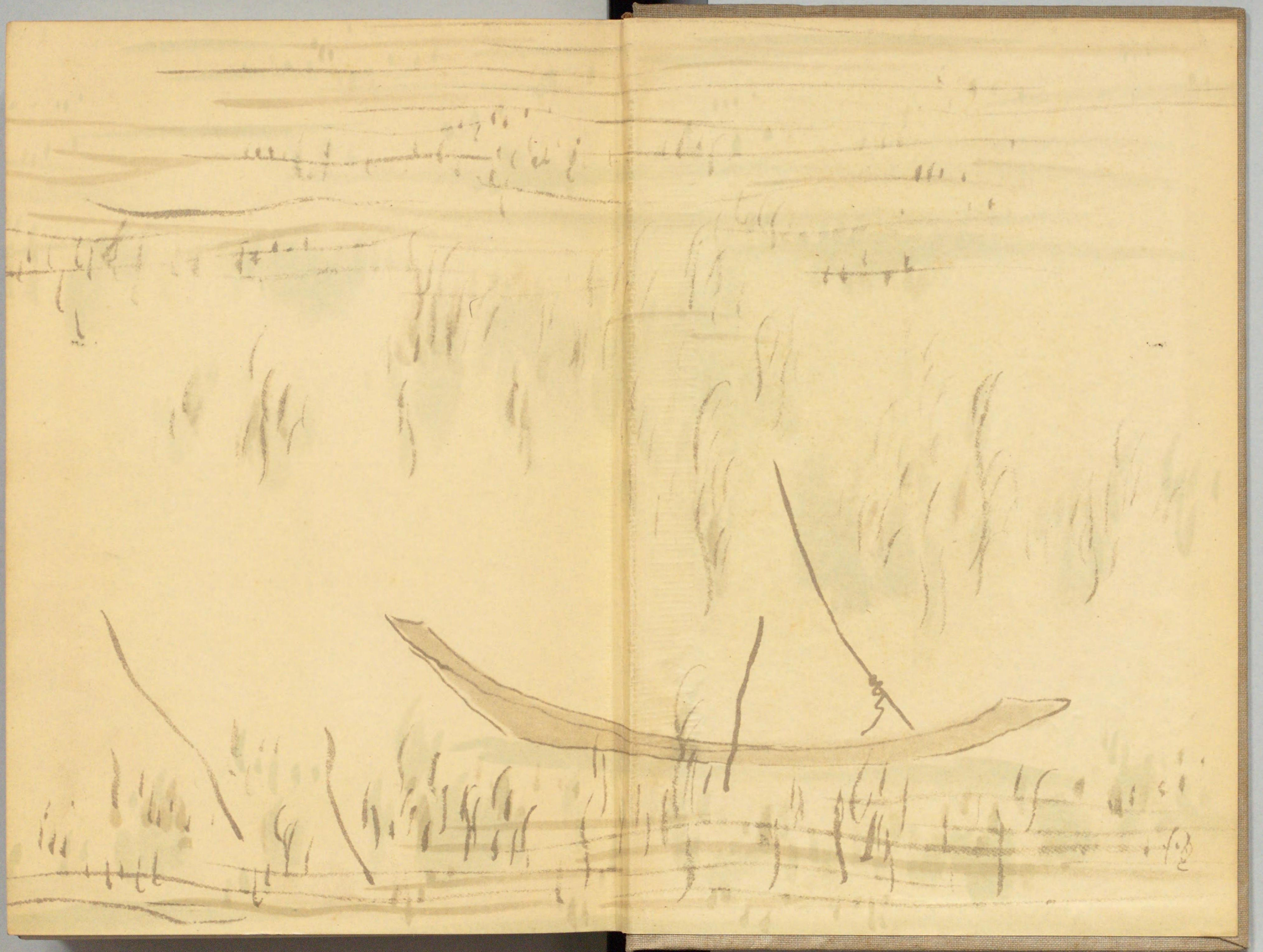


918.6
W38b

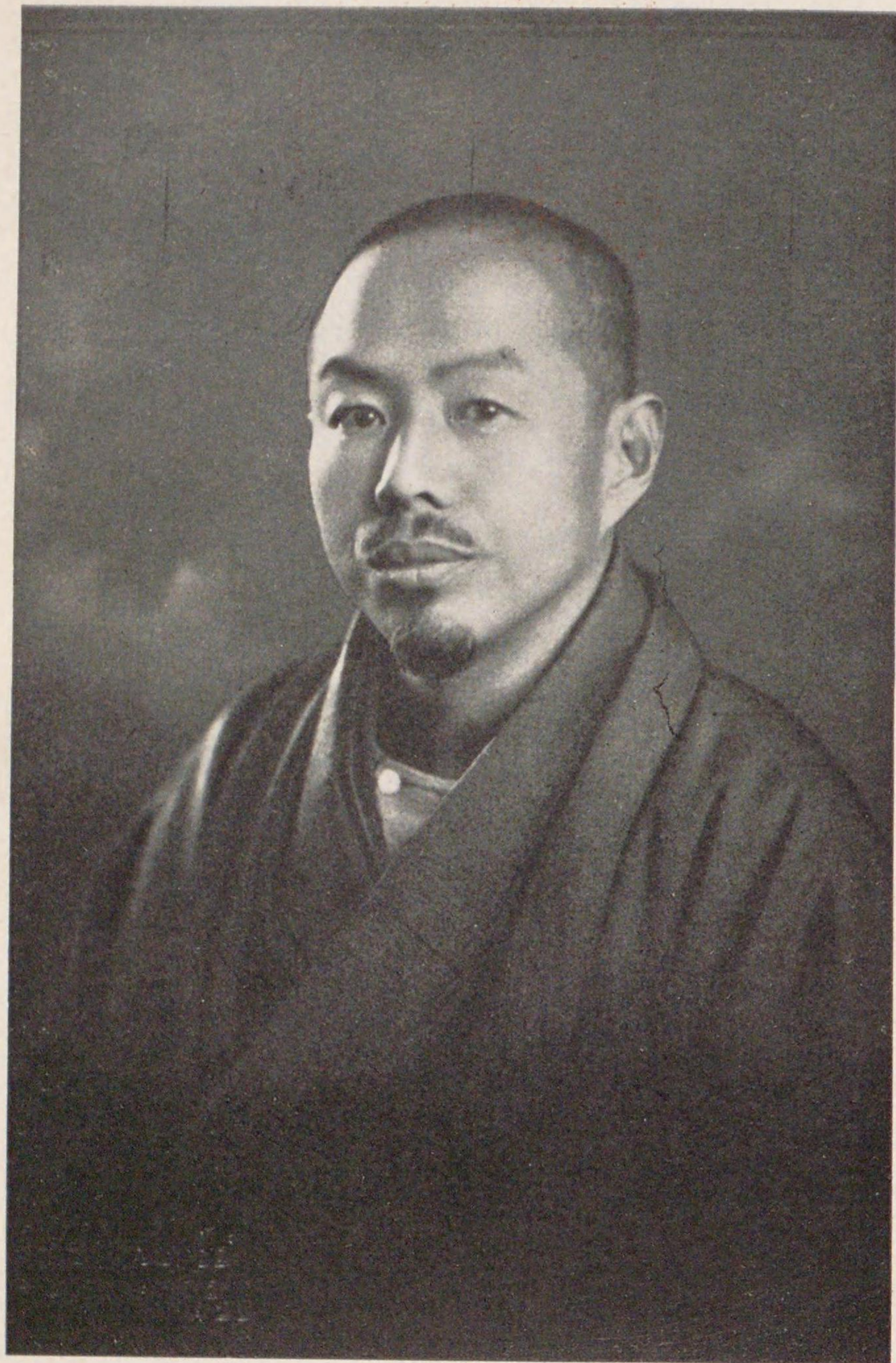


00265186

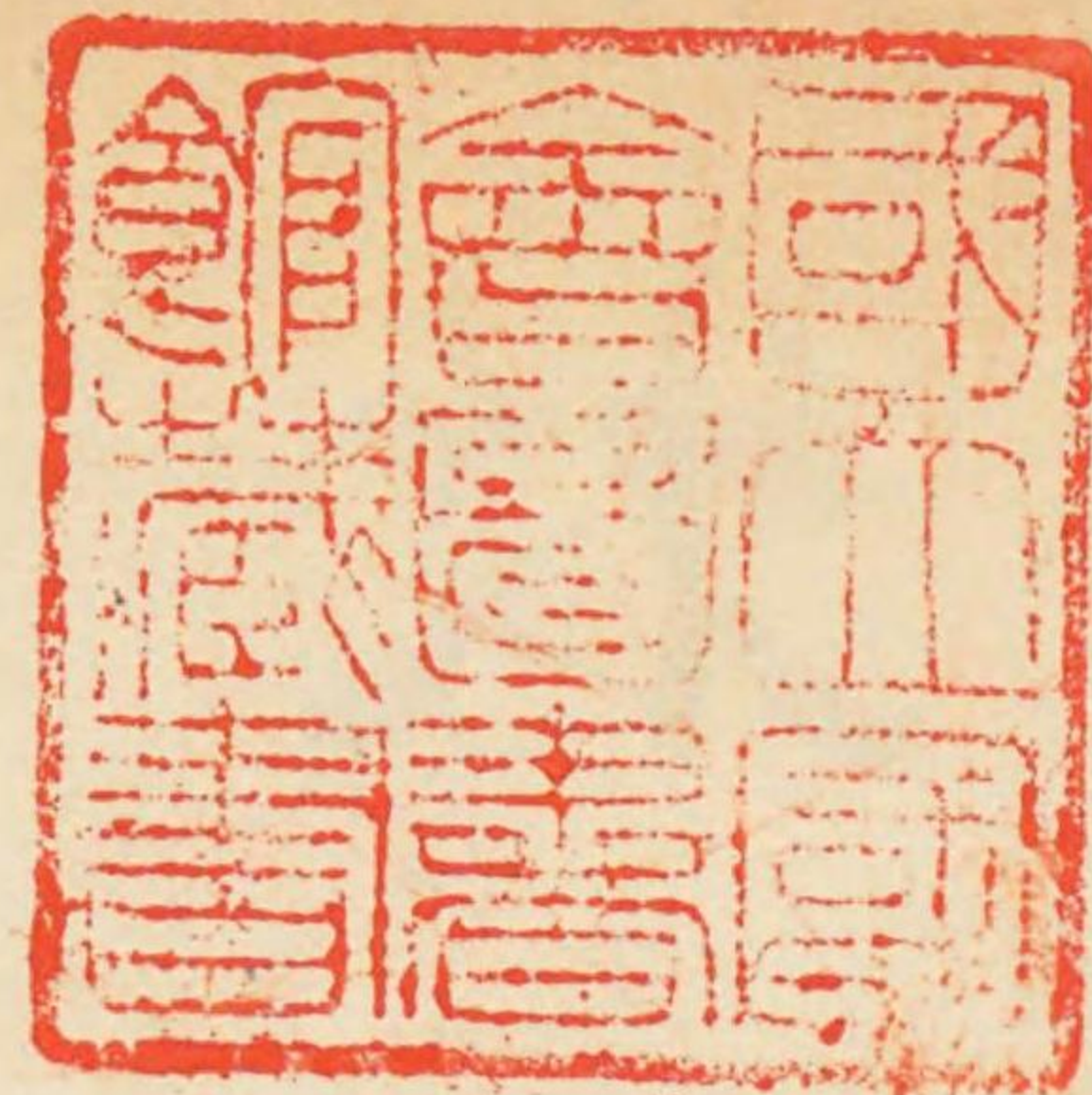




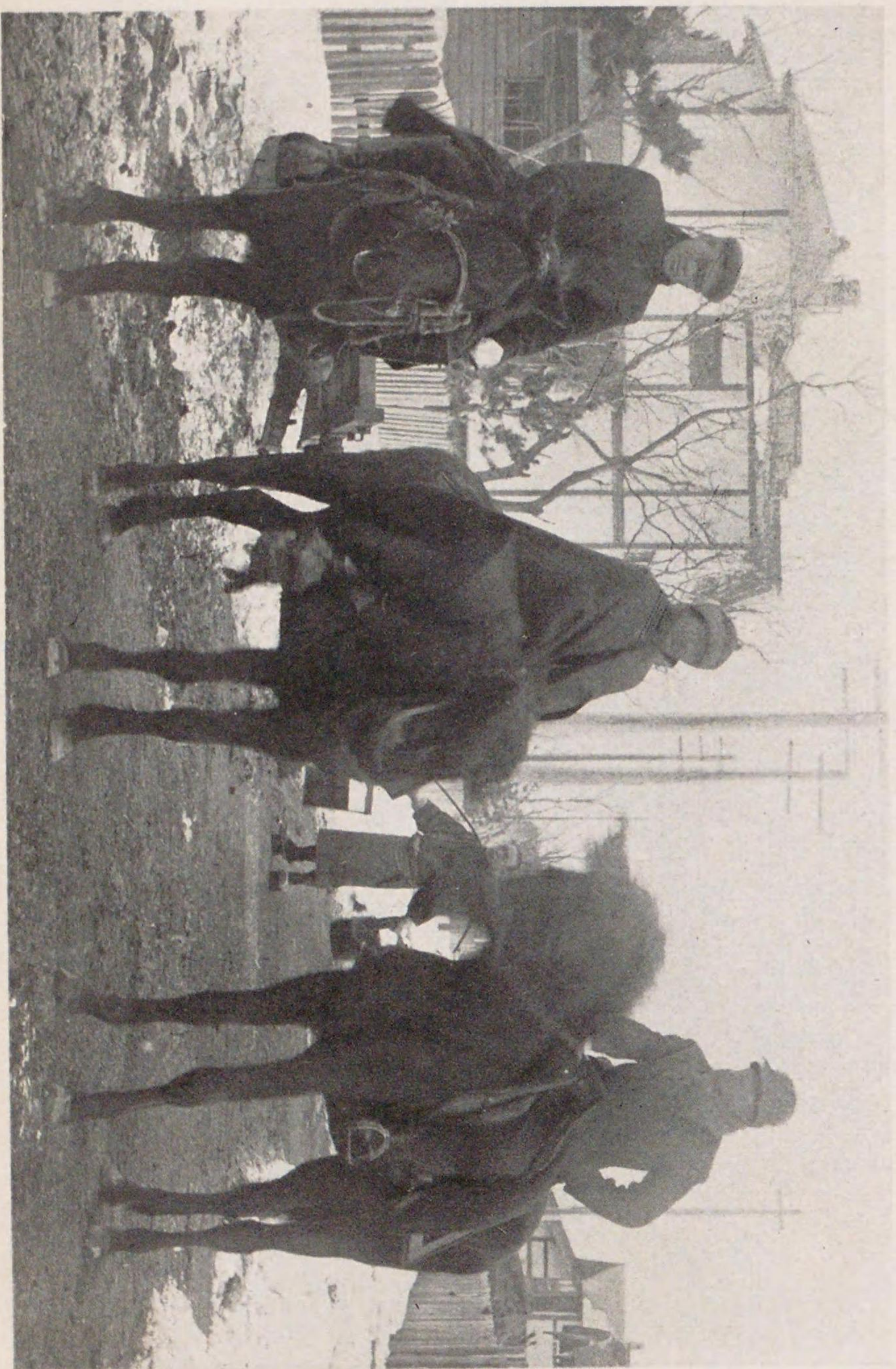
牧水全集 第四卷



(月一年三和昭)



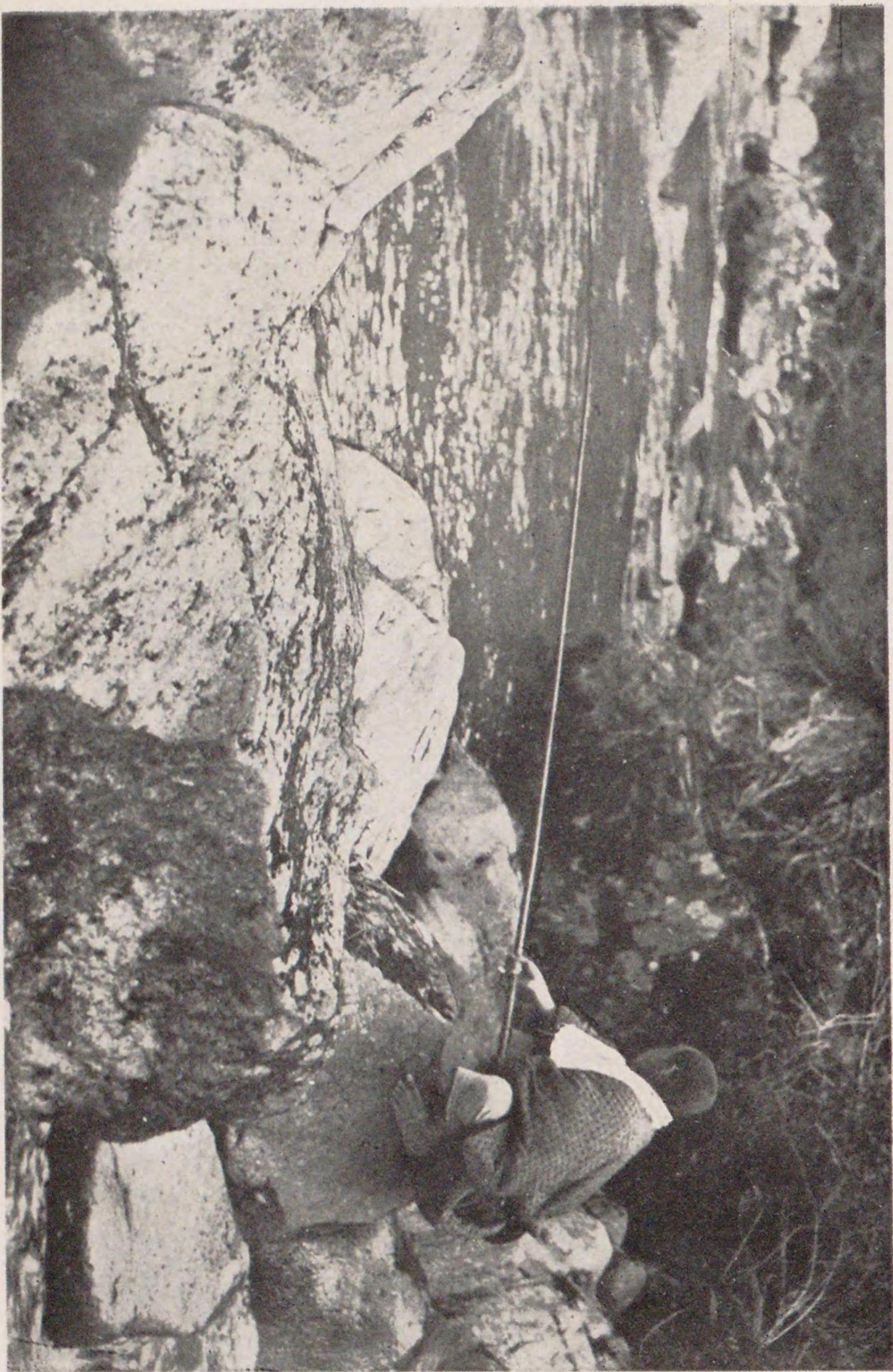
265186



青森縣五所川町(中大牧水、大正五年三月)



（月十年一十正大）にて畔湖寺禪中光日



伊豆湯ヶ島温泉にて(大正二十一年四月)

第四卷紀行文目次

火山の麓……………三

裾野より……………二

林中の温泉より……………三

山より妻へ……………元

野州行……………三

御牧が原……………三

山湯日記……………三

春日の湯……………四

鹽釜行……………五

津輕野……………六

松島村……………六
 板留より……………七
 板留温泉……………八
 その後……………九
 北國紀行……………十
 南信紀行……………十一
 浴泉記……………十二
 旅日記……………十三
 比叡山……………十四
 山寺……………十五
 旅の或る日……………十六
 熊野奈智山……………十七

利根の奥へ……………一九
 みなかみへ……………二五
 利根より吾妻へ……………三三
 吾妻川……………三六
 吾妻の溪より六里ヶ原へ……………四四
 山上湖へ……………七七
 水郷めぐり……………八四
 落葉松林の中の湯……………九二
 信濃の晩秋……………九九
 伊豆紀行……………一〇三
 雪の天城越……………一〇八
 溪より溪へ……………一四三

二晩どまり……………三六三

溪ばたの温泉……………三七〇

上州草津……………三八二

草津より澁へ……………三九三

山腹の友が家……………四〇五

木曾路……………四一五

富士裾野の三日……………四二九

箱根と富士……………四五六

湯ヶ島より……………四六五

或る島の半日……………四七三

野なかの瀧……………四八〇

白骨温泉……………四九二

通蔓草の實……………四九七

山路……………五〇六

或る旅と繪葉書……………五一八

杜鵑を聴きに……………五二三

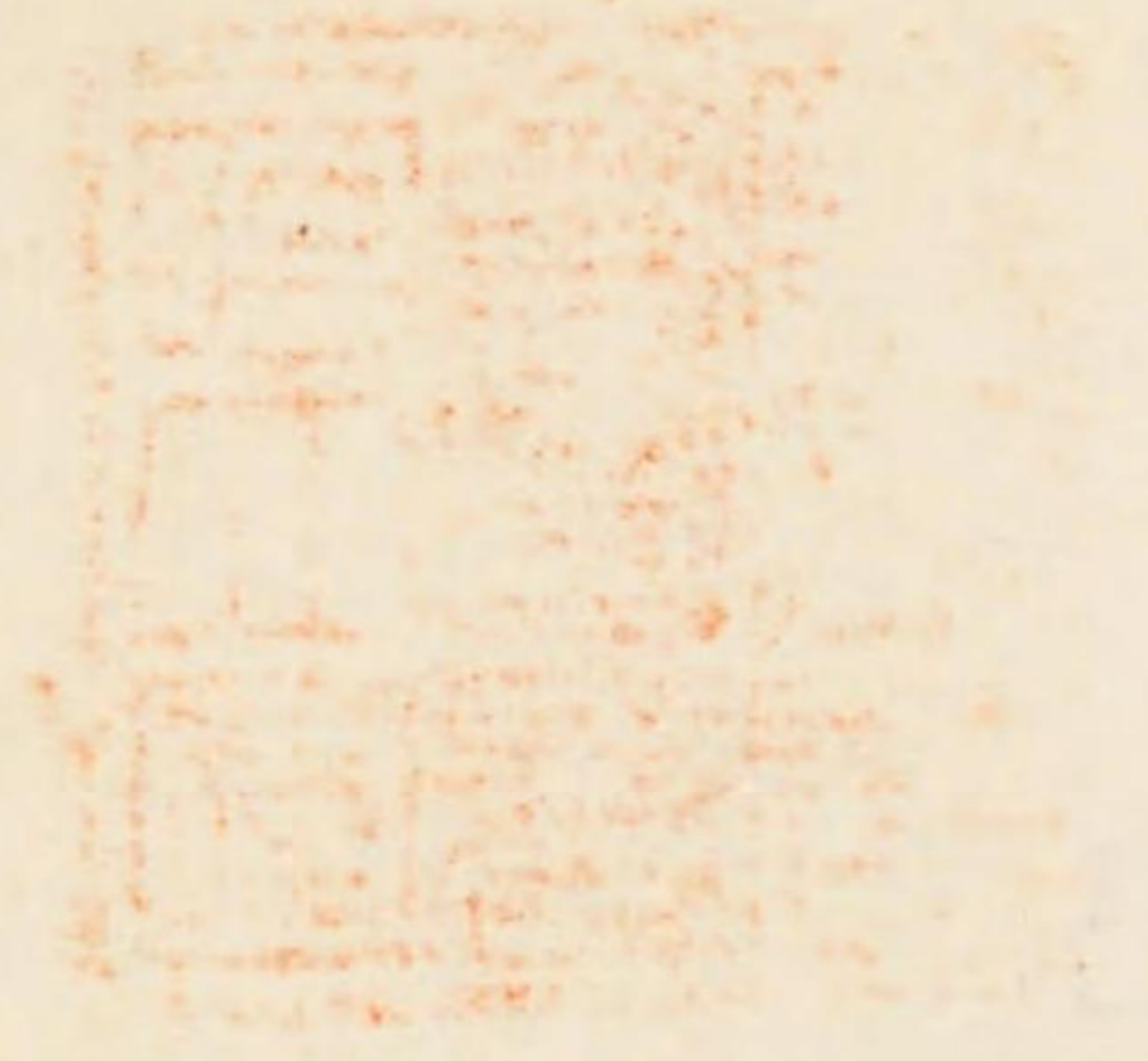
追憶と眼前の風景……………五四〇

大野原の夏草……………五五三

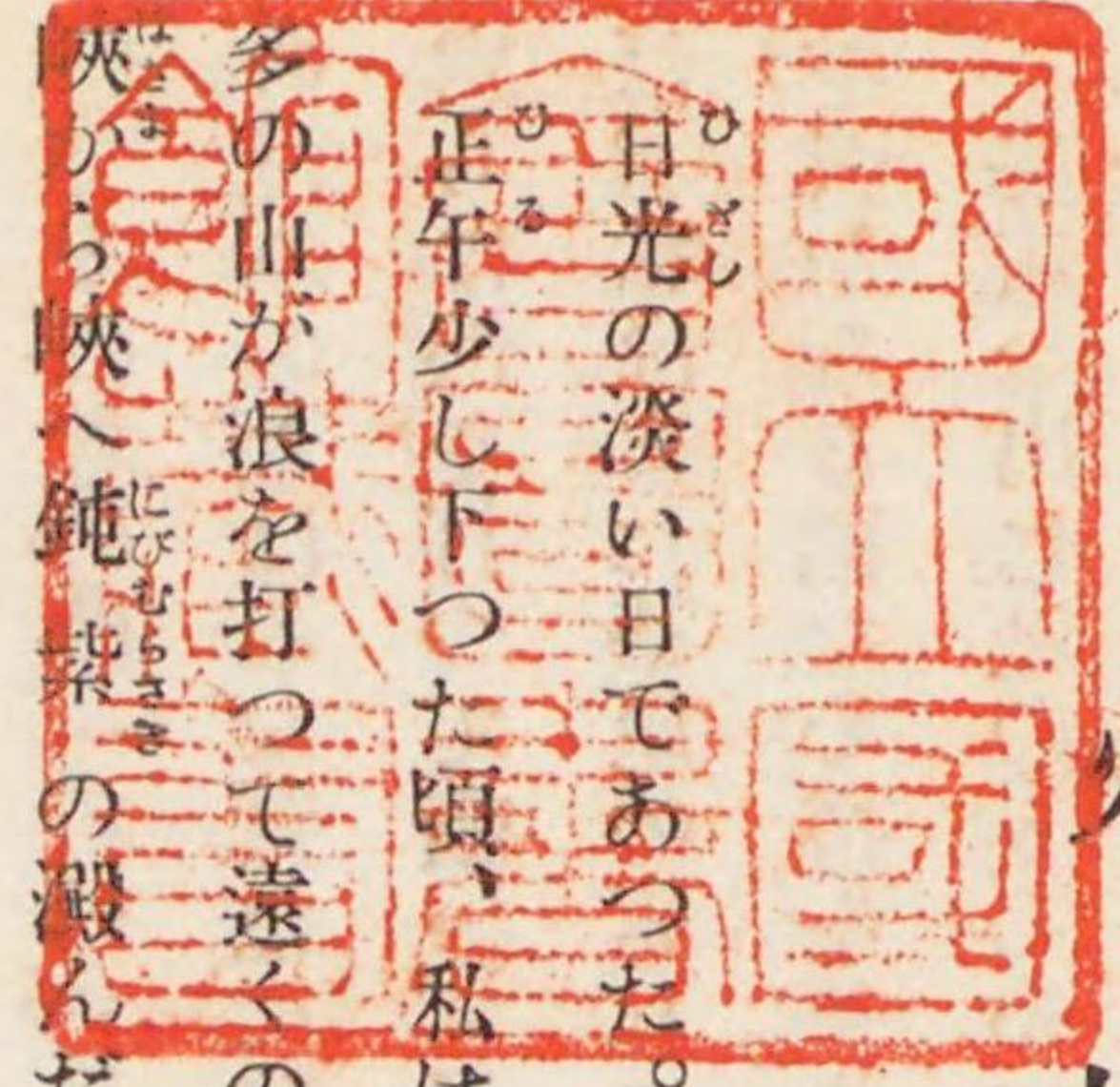
みなかみ紀行……………五七二

金精峠より野州地へ……………五八九

紀
行
文
一



火山の麓



日光の淡い日であつた。
正午少し下つた頃、私は獨り碓氷峠の絶頂の古茶屋の庭の床几に腰かけて居た。ツイ眼の前から幾多の山が浪を打つて遠くの方へ續いて居る。曇つたともつかぬ淡い雲の中の太陽は夫等の峯から峯、夾へ鈍紫の霞んだ光を投げて居る。中にも鋭い角度をなして幾つともなく空に突き出て居る妙義山の峯々の輪廓がしよんぼりとその光線の中に浮いてゐるのが取分けてうら寂しい。山の麓からは關東平原の一角が開け始めて白く光る河も見え、河に沿うた道路、または小石の集つた様な平原的の宿驛などが、何れも薄い日光の底に默然として沈んで居るのが見ゆる。遠いはては雲が暗く烟つてゐるて解らない。風も無ければ鳥も啼かぬ、私の瞳の動くさきへは或る寂寥が影を引いて流れてゐる様な日であつた。

3
私は繪葉書を二三枚書いた、其一枚は東京の友人T——君へ、一枚はT——君の細君へ。
二年前のことである。夏のころ、私はT君と一緒に暫くこの碓氷の麓の輕井澤に遊んでゐた。この

峠にも幾度か登つて來た。或時などは詩歌を解する米國人の某牧師をも誘つて來て此茶屋から少し奥に行つた林の蔭でT君と私とは和歌を詠み、温良なる牧師は短いソネット風の英詩を作つた。そして銀のかざりのある萬年筆を取出して、繪葉書に書きつけてT君と私とへ分けて呉れた。その原詩をばいま忘れたが、山を越え、山を越えて靜かに急げ、泉の様な幸福が卿等若人を待つて居るといふ様なものであつたと覺えて居る。私等の和歌は多く戀を歌つたものであつた。T君にしる私にしる、丁度その頃は夢の様に戀に酔つて居るさかりであつた。

葉書を書いてゐると、當時の記憶が、澱んだ胸の底から青暗い光を帯びて浮いて來る。私は筆を擱いてその林の蔭へ行つて見た。木立の少しく疎らになつた所で、白ぼけた薄がむら／＼と亂れて四邊の灌木の葉はみな黄色に染つて下葉から散りかけて居る。少し眼を遠くへ移せば例の寂しい山脈が其處らに浪を打つて續いて居る。妙義山などは宛然壞れ去つた古い殿堂の圓柱のみが立ち並んでゐる様だ。私はまた茶屋の床几に歸つた。靜かな心が妙に波立つて少しも落着かないので、何だかうしろ髪を引かるる様な心持を懐きながら山を降ることにした。

茶店を出た私のうしろには久しく犬が吠えてゐた。この峠は往時中仙道唯一の要所で關所のあつた所である。今は僅か十軒足らずの人家があるのみで、それも此峠にある熊野權現の神官か何からしい。道の右手の古い大きな家の庭には白い繭が一ぱい乾してあつた。その隣の家は近所での豪家らしく、

窓には郡内の蒲團と廣い熊の皮が乾してあつた。雨續きの後の天氣でこの山上の十軒も今日は何となく忙し相に見えた。山を下りて行くうちに日はよく晴れて來た。まだ紅葉には間のある頃で、誰一人行き逢ふものもない。ほか／＼と照らす日光に雨後の秋の草木から發する香が何だか酒精分でも含んで居る様で汗の浸む私の身體にしんみりと迫つて來る。路の直ぐ傍らに二本の大きな古木があつて風もないのに、ひらり／＼と細かい黄色な葉を高い梢から落してゐるのを見た。其姿が如何にも可憐しい。歌に詠まうとしたが出来なかつた。山を降り盡くさうとする所に深い森があつて、其奥から洋琴の音の漏れて來るのを聞いた。歸りおくれた避暑の洋人でも住んで居るのであらう。森の端れに谷がある。この夏の洪水で眞白な河原ばかりが徒らに廣くなつて居る。河原を渡れば舊輕井澤の宿である。

八九分通り避暑客の歸つたあとの此宿場は宛然空家ばかり並んで居る様だ。砂つばい道路をぼくぼく歩いて行くと、兩側の仰々しい金ぴかや色文字の英語などの看板ばかりが眼に立つて、人には極く稀にしか行き逢はない。一軒の料理屋に寄つて斷られ、蕎麥屋でも斷られ、辛うじてと或る宿屋に上つて漸く酒にありついた。數日中に此處を引拂つて歸るといふ下女の投げやりな酌を斷つて、雨戸の半分閉めてある薄暗い二階で私は獨りで一杯々と熱いのを徐ろに飲み下した。空き腹だからでもあつたらうが、直ぐ酔つた。酔ふにつれて心は穩かな物なつかしい哀感に満ちて來た。顔まで子供々々しくなつた様に思はれて、臉も頬も稀しく熱して來る、獨りで旅に出て居てよく出逢ふ心持である。

私は眼に見えぬ或るものに手を引かる、様な氣持で宿屋を出た。そして急いで本道を右に折れた。来て見れば目的にした例の家は矢張り舊の通りに立つてゐた。

例の家とは私等が二年前に借りて暮して居た家である。今年の借手も既に歸つたと見え二階も階下も雨戸がしめられて庭には草が延びて居る。二階からは正面に淺間が見えたがと振返つて空を見上ぐると、可懐しい火山は今日によく晴れて細い烟を僅かに東に流して居る。私等はT君と私の友人のM君(同じ學校の商科生であつた)と三人で、階下だけ借りて自炊して居た。縁側を下りるとすぐ小さな流れがあつて、毎日其處で食器などを洗つて居た。流れを距てた向うの家には東京の某女學校生徒の一團が來てゐて同じく自炊をしてゐた。そして私等の食事の用意などするのを見てはいつも指して笑ひ合つて居たものである。其小さな流れにも變化はない。葱の栽ゑてあつた壁横の畑には今年も同じ野菜が片隅に青く取り残されて居る。葱畑の隣の小さな風呂屋には以前と同じく細い煙突から煙が立つて居る。

僅か二年前! けれ共私には既に一世紀も距つてゐる昔の様な氣がしてならない。あの時分にはT君も私も水々しい少年清教徒であつた。私の戀といふもの、殆んど極度に達して居た頃で、輕井澤に來てゐながらも殆んど二十四時間の全部を捧げて私は戀人のことを思つてゐた。四邊の野は月見草の盛りで、秋草の花も深かつた。T君と二人で朝から夜まで、多くは夫等草花の咲き茂つて居る野を逍

遙ひながらお互に感情の赴くまゝ、に色々なことを打ち明けて話し合つた。T君は其の以前から小學校の時同窓であつた某嬢に切りにおもひを寄せて居た頃である。彼は人知れず摘み集めた草花の一定の量に達するのを待つては直ぐ小包にして某嬢の許に贈つてゐた。其頃私の戀人の兄は瀕死の病氣にかかつてゐた。不幸な家庭にある彼女が命を賭して兄の看病に従つてゐる有様は鉛筆の走り書きの彼女の消息で眼に見える様で絶えず私をはらくさせて居たものである。其うち彼女自身の上に容易ならぬ動搖の起りかけた事を知らして來た時、私は直ぐ其日に輕井澤を立つた。よしや歸つた所で私の力で如何することも出來ぬ事をば知り抜いてゐたが其儘ぢつとしてゐることは出來ず、騒ぐ心を暫らくも瞞着せむため、わざと汽車にも乗らずに雲の懸つてゐる碓氷峠を歩いて越えた。麓まで送つて來て呉れたT、M兩君に後で逢つた時、山に登つて行く君の姿が馬鹿に寂しかったと言はれたが、實際私のさうした感情は其時限りに破れて了つたものと云つてもいい。それから上野停車場に着いて以後今日になるまでの自身の生涯の動搖は次第に暗く、打續いて來てゐるのである。

7
甘い追憶に満ちた私の身體はいつかその家を離れて附近の野原をぶら／＼と歩いてゐた。曾てT君と一緒に多くは無言のまゝ、花を摘み歩いた原である。日はぼか／＼と照つて、酔つた五體に長い歩行を許さぬ。其處此處に倒れて下らないことばかり考へてゐた。この夏の洪水で此土地の荒された事も非常である。もと草の茂つてゐた野原が七分通り砂原となつて居る。家の倒れたもの、木の枯れたもの

のなど到る所で眼につく。平地や四邊の丘に在る粗造の洋館の多くは朱色に塗られたものが既に悉く戸を閉してゐるのなども荒涼の觀を添へて居る。美しかつた秋草の風情など露ほども認め難い。時計を出して見て驚いて私は輕井輕を離れた。

路を舊中仙道の方を取つて少し元氣よく歩き始めたが、酔はまださめぬので直ぐ疲れて來る。輕井澤を少し出て離山の眞下あたりに來ると、此處は洪水の影響もなく、依然とした深い秋草の天地である。何百町歩とも知れぬ廣い區域に薄の穂が波を打つて、其間には月見草、女郎花、吾木香、桔梗、野菊、其他名も知らぬ草花が一面に咲き亂れて居る。野のはてには草刈らしい人の姿が小さく見えて、其外には何もゐない。私は非常に自由な天地へ出て來た様な氣がして、帽子を遠くへ投げやり下駄をも脱ぎ棄て、就中柔か相に茂つて居る草の中へ倒れ臥した。出來るなら裸體にでもなつて見たい程だ。

先刻碓氷峠でT君夫妻へ宛て、何だかひどく述懐めかしい事を書いた葉書を出して來たのを悔しく思ひ始めた。T君の細君は彼が當時秋草の花を小包で送つた其人であつた。子供も二三月前出來てゐる。彼は斯くして極めて幸福な家庭を作つて、事もなく毎日某社へ出勤して居るのである。それに自分が斯ういふ風になつて、斯ういふ所からあんな葉書を出したら、あの人の悪いT君があれに對して果してどんな冷笑を浴びせることであらうと想ふと、思はず五體がぞつとした。そして斯うして

草の上に横つて居る自分の姿の寂しさ淺間しさが痛いまで明かに眼に映る。T君を初め、某君、某君などの落着いて生活を營んで居る様が次から次へと眼の前に並んで表はれる。尙ほ引續いて此頃までの自身の荒んだ自暴的の生活も浮んで來る。強からぬ者は、その自暴的の生活にさへどん底までは落ち着くことが出來ないで、旅へ、旅へ、とさながら母を慕ふ小兒の様に斯うして旅に逃れ出て來たではないか。それほど慕つて來た旅が汝に與へたものは果して何であらう！

『では一體如何すればいい、僕にはあゝいふ生活に辛抱して居る事はとても出來んのだ』

思はず聲に出して、身體を起した。恐らくその顔は死人の様に蒼ざめてゐたに相違ない。女郎花と もう一つ名の知れぬ黄色い草花が起き上つた私の頬や額にうるさく觸れて居る。それを拂ふのも五月蠅いので、眼を瞑ぢて石の様に凝然として居ると、頭はくら／＼と痛んで今にも眩暈が起り相だ。思はず背後の方を振り返ると、今まで私の背に敷かれてゐた草や花がぼつり／＼と身を起しつゝある、私はまたその上へ倒れ伏した。眼を瞑れば色々な妄想が浮んで來る。見開いてゐると額の上に枝垂れかゝつた草花が點々と見えて居る。私はたうとう友だちにでも話す様に此等の花に他愛もなく物を言ひかけて見た。心が落着いて來るに従つて、今度はまた沈んだ寂しさが身を浸す。軽く臉を合せて呼吸をもあるか無いかに續けて居ると、其處ら此處らに細々と蟲の鳴いて居るのが聞えて來る。背には地の冷たさが傳つて來た。

起き上つた時には身體がまだよろ／＼してゐた。けれ共もう歩調をも確かにして、今まで二三時間内の自分を思ひ切り冷笑しながら暮れか、つた路を大股に急いだ。輕井澤から追分の宿^{しゆく}まで淺間の麓に沿うて三里半、よほど急がねば夜が深くなる。馬鹿なことをして居る間に大分時間を空費した。

裾野より

— 綠葉兄へ —

その一

みやこをば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關……これよりは少々無風流な話だけれど、とにかく浴衣一枚で東京を逃げ出して來た男が、淺間嵐の秋風に吹きまくられてゐる有様をよろしく想像して呉れたまへ。甲州は非常に暑かつた。飯田蛇笏君の宅では葡萄のなかに身を埋めてゐた。彼處は富士の裾野の一端になつてゐるので丘が多い。ぶら／＼丘から丘を歩いてゐると、流石に秋で、草花の匂ひ、山のすがた、いかにも自分の姿の輪廓が明かになつたのを感じた。それでもその歸りには木立の中の青い淵にとび込んで子供の様な騒ぎをやつたものだ。甲府から汽車に乗つて甲信國境の山野を走る時は實に好かつた。天が晴れて、僕の好きな大きな山脈の峯が汽車の窓に斷えず姿を見せてゐる。葦崎の停車場で初めて落葉松^{からまつ}の木立を見た。それから二三時間は全然山の間を走つて行くのだ。線路に沿うて秋草の深いのにも驚いた。市街の花屋で見れば何となく桔梗は嫌味らしく見えるけ

れど、青い草むらで風に吹かれてゐるのを見れば哀れがふかい。吾木香も寂しい花だ。君も知つてゐるだらう、六七年前多摩川の岸に居て、戀ともつかぬもの、あはれに心を浸しながらこの花を摘んで歩きたいとけない自分の姿が忘れられぬ。すつき、女郎花は云はずもがな、萩などはまるで稲田の稲の様に茂つてゐた。山の峠にかつた頃白雨がやつて来た。山を越して峠を振り返ると雨の過ぎた中ぞらに大きなく虹が懸つてゐた。嫉捨あたりから筑摩の平原を見下した時も誠に好かつた。丁度日の落つる頃で、何河か平原の中に白く輝いてゐた。

小諸驛に着いたのは夜の十時すぎ、岩崎君等に迎へられて今日までこの大きな古風の病院の二階の一隅に起臥して居る。小諸は浅間の裾野の中に散在する古驛の一つで煤けた町が傾斜を帯びて野末の方に小さく引着いてゐるのだ。島崎さんに「小諸なる古城のほとり……」と歌はれた古城趾がツイ一二町の所にある。恐しい松の木立の深いところで、その裾を限つて千曲川が流れて居る。黄色な松の落葉を籍いて、崖下の流れを眺めてゐるといつか知ら眼は瞑つて全てをかけ離れた寂しい旅客の愁ひに心は沈んでゆく。こちらに來た當座は毎日の雨と曇で見ることの出来なかつた浅間の煙は昨今明かに空になびいてゐる。此家の二階の手術室からは正面に當る。僕の隣室の窓からは軟かな線を引いて海のような裾野の傾斜の輪廓が見渡される。野の中に飛びく村落が介在してゐて、夜に入れば薄赤い灯が點る。傾斜を限つた直線の向うには遠く無限に山脈がうねつてゐる。僕のきき覺えた山の名

だけでも十に近い。例の日本アルプスの一帯であるのだ。中にも乗鞍、白馬の諸山には白い線を引いてもう雪が降りた。左様だらう、小諸にゐてさへ袷に羽織に冬のシャツで暑くない。病院の室の中には既に爐を開いた所さへある。やがて炬燵が懸るのだらう。藥室の前の庭には二三十本の林檎が實をつけて大分もう紅く熟れて來た。林檎の木に實のなつてゐるのを初めて見た南國生れの旅客には、朝夕の野分がいやに身に沁みる。初めて見たと云へば白樺の樹をも初めて見た。胡桃の樹も初めての様な氣がする。落葉松は一昨年輕井澤で見たのであつた。白樺の幹の尊い姿は、樹木を切愛する身にとつて殆んど一種の神祕を覺えしむる。町から二里ちかく裾野を登つて浅間の麓に行くと林の中によく見受くる。風の吹いてゐる林の中であの純白な大きな幹に身を倚せて居ると、嬉しい悲しいを離れた涙が零れて來る。そして大きな胡桃の樹にち登つてまだうす青い實を落して、石を拾つてその實を叩いて喰べてゐる君の友を想見して呉れ給へ。

ドクトル岩崎のおかけで、身體は大方よくなつた。けれども今までの何や彼やの心の疲勞が一時に出たものかして、すつかりぼんやりして了つた。だからまだ歌を詠む氣にならぬ。強ひて考へれば出來ぬこともあるまいが、それは東京にゐる時にする仕事で、こんな所ではどうしてもやりたくない。そのうちにはうんと出來るだらう、手帳から拾ひあつめたら一頁分くらゐはあるだらうからそれをお送りする。それで間に合せておいて呉れ給へ。一切の記憶と未來に對する觀念の全てとから脱却して、

本當に遊離した旅の心になり度いと朝夕に希望してゐるのだけれど、なか／＼左様はゆかぬ。却つて心が靜かになるだけ色々なことが思ひ出されて、苦しくて仕様がなない。いつそのこと此ま、東京へ歸つてまたどさくさの中へまぎれ込まうかともよく思ふ。

山のあなたのそら遠く、

「さいはひ」住むと人のいふ。

噫、われひととめゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く、

「さいはひ」住むと人のいふ。

矢つ張り我等はお墓に入るまでこの歌の愛誦家であらねばならぬのかも知れない。

時々昂奮して酒精分の要求を痛感して困る。甲州に居る時、少々飲みすぎして來たものだから、友のお醫者さんから、うんと叱られて目下は謹慎中にある。然し幾度かこつそりをやつて口を拭つて居る。或る時などは少し度を過して、石ころばかりの坂路を轉け／＼して歸つて來たものと見えて、翌朝床の中で眼がさめて見たら手も足も傷だらけサ。これでもお醫者さんの目をごまかしたつもりであるのだから驚く。

折がわるくてまだ淺間にもよう登らぬ。近日中には屹度登れるだらう。追分から松井田あたりの古驛の秋草が素敵だ相だ。そこらをぶら／＼して輕井澤に行つて、二三年前のたのしかつた夢のあとでも探して見よう。そして風邪でも引いて來れば世話なしだ。

以上の有様で、まだ君にすら手紙一本よう書かなかつた。これを原稿半分、私信半分のつもりで君へおくる、赦して呉れ給へ。今暫くは此處に居ることになるだらう。信州はいつまでも飽き相もない國だ。木曾川をも下りたし、越後へも出て黒いときく日本海も眺めたし、前途甚だ茫漠、まア登はあしたの風次第ときめておきませう。今日もよく晴れた。これからまた獨りで上の落葉松の林にも行つて來よう。方何里かに渡つたその林がそろ／＼黄色くなりかけた靜けさといつたら無いよ。では、愈々左様なら。(九月十八日)

その二

例の通りの男は、例の通りの風をしてまだ千曲川の近所にうろ／＼して居る。身體などは幾らか肥えて來たかと思はる、が、頭の方は相變らずぼんやりして居る。氣がついて見ると、近頃僕はよく瞼を瞑ぢてゐる様だが、心の眼も同様に瞑ぢてゐるのかも知れない。時たま非常に心が明るくなりかけたナと思はる、事があるが、直ぐさま又暗くなる。

東京も左様か知れないが、今年は此地方は近年にない雨の多い秋だ相だ。はつきり晴れた日と云つたらほんの一割か二割かの氣がする。どしどし降るのならまだしもだが、ぼんやり曇つて居らるゝには誠に以て閉口する。健康の人はこの曇日を愛する相だが、僕には眞平だ。

で、稀らしく晴れでもすると子供の様にころ／＼して家を出かくる。ふところ手のまゝ、當もなく歩いてると誠にいゝ氣持だ。高原の雲は眞實好い。雨の晴れぎは日没の際などほんとに何とも云へない。空氣はいゝし、いゝ頃加減の冷たさが肌に沁んで、思はず腹の底から呼吸をして、秋だ、秋だ、と言ひ度くなる。

島崎さんの小説でこの信州を舞臺にとつたものに、よく旅人々々といふ言葉が出て來てゐるだらう、『旅人の群は幾つとなく丑松の傍を通りすぎた……』といふ様な調子で。初めこの旅人といふのが何となく仰山らしく、わざとらしく聞えていやな氣持がしたものだ、實地信州に來て見ると、まつたく行き交ふ人々がいかにも遠國から遠國へ急ぐ旅人らしく見受けられる。これは一つは此土地の人の風俗が一寸近所へ行くにしても草鞋脚絆で背に蓑座を負つて出掛くるといふ風だからであらうし、一つは四方が空潤で空氣が澄んでゐるためでもあらうし、また高原の端から端に連つてゐる道路が餘り屈曲もせず白けたまゝ、續いてゐるせもあらう。また信州は御存じの蠶の國で、繭や生絲の小さ

な行商人が、あちこちの村から村へ渡り歩いてゐるのが多いので、それ等の姿も、一種他所に見られぬ寂しい觀を帯びてゐる。夕方など裾野や田畑の中の霧などの薄々降つてゐる道路を獨りでぶらぶら歩いてゐると、よく此等の群に出逢ふ。彼等は知る知らずに係らず、必ずのやうに挨拶をかけて行く。その挨拶がまた氣に入つた。曰く、『お勞れ！』と此の短い一言だ。この頃では先づこちらからこの懐かしみのある挨拶を懸くるまでになつた。

晴れた日に、路傍の草むらの中に横になつて、勞れた身體を安めてゐると、時々この小旅客の群が叢中の僕には氣のつかぬまゝに色々なことを話して通りすぎる。一人で急ぐのもある、馬の上で唄をうたつて通るのもある。

田はもう大方黄色くなつたが、まだ收穫は始まらぬ。蝗の飛んで居る田の畦から、線路を越え、人家の裏庭を通りすぎて、丘や林に入り込むのもいゝ。茸狩にも行つたが、茸を探すより、日光の漏れて來る枝の下に足を投げ出してぢつとしてゐる方が面白い。土の香とも松やその他の落葉の香ともつかぬ匂ひがしつとりとしてゐて、時々松かさが靜かな音を立て、落ちる。山雀が枝から枝へ移つて行く。若しも少し深い松林に行かうなら折々これらの松の木を伐つてゐる所に出逢ふ。その斧の音も誠に身に沁みる。一方では斧で伐り倒し、一方では鋸で引いてゐる。木屑の香の高い中に、多くは半

裸體の柚人が唄をうたひながら、この仕事に従事してゐるのを見ると、妙な世界にでも來た様な思ひがある。彼等の森林生活に於て唄つてゐる唄の一つを紹介しようか。

元締、金貸せ、また女郎買ひに——、金を貸さねば、嬢を貸せ——。

いま一つ、

木挽さんかや、そりアなつかしや——、わしが殿御も、また木挽——。

松の梢の青いなかを渡つて居る秋風と調子を合せたこれらの唄が聞えて來る時、僕は言ひ知れず我等人類のなつかしさを感ぜずには居られない。

落葉松はすつかり黄色くなつた。この木の落葉を以て冬ごもりの巢を營む蟻が居る。僕は最初落葉松の林には必ずその落葉が圓く堆くなつてゐるので、風か水のために自然に斯うなるのだらうと思つてゐた。そして或時何氣なくその圓いの、一つを兩手で掬つたら、さあ大變、驚くべき蟻の大群が其中からむく／＼と現れた。聞いて見るとこの蟻のために命を落す人もある相だ。いかにも森林らしい話ではないか。

秋草は大方枯れた。林を出て黄色い野の草むらに日向ぼこの様に寝ころんで居ると、白い蝶々などが顔の上を低くまつて通る。林の中でも出逢ふことがある。寂しい哀れなものだ。或時は野鼠が僕の寝てゐる顔の直ぐ近くにやつて來て、さもけん相に僕を眺めてゐた。斯んな時は何だか彼等と同類

か友人かになつた様な穩かな情味が起つて來て、話でも出來たら面白からうとむきになつて思ふことがある。

信州では、丘と丘、山と山との間の窪地を澤と呼ぶ。澤に降りて通蔓草の實を取つて食つたりなどするもの面白い。澤には多く水が流れて居る。ちよろ／＼と流れてゐる傍によく白い鶴鴿の雌雄が遊んで居る。日本人の先祖の男女二柱の神さまがこの鶴鴿のおこなひを見て、初めてみとのまぐはひを學ばせ給ふたといふ話なども興味深く思ひ起される。この白い小さい鳥は原始時代の素朴な生活を語るに甚だ適當してゐる様に私には見ゆるのだ。

淺間の烟は愈々親しみを増す。晴れ渡つた月の夜など特に好い。淺間といふ山は元來甚だ無細工な形をした山で、眞晝間などは見るのが氣の毒な位だ。それが月の夜と、夕陽の時とだけは姿に甚だ優美と權威とを帯びる。夕日が日本アルプスの方に沈まうとすると、其のはなやかな光線は正面に淺間に注ぐ。すると(大方淺間には雲が居る)頂上の方の雲も一種の彩を帯びるし、雲から出て裾野の森林帯に及ぶまでの焼土原の山腹が嚴かな代赭色に輝くのだ。其頃、小さな雲の斷片が山のそここに數多彷徨して居るのを見る。

19 今日のことだ。晝すぎ錢湯に行つてゐると、半禿の老人があとから入つて來て、「只今は大した騒ぎ

でしたな』といふから、何ですと訊くと、淺間が噴火しましたよといふ。驚いて、見えますかといふと、いえ雲で見えはしませんが無しろ大した音響で、まるで地震の様でしたと語つて居るうちに、湯屋の前の狭い露地を子供や大人が大騒ぎで急いでゐるのが見えた。僕も周章^{あわ}てて上つて見たが、生憎^{あいにく}く雨の後で山は六七分通り厚い雲に包まれてゐて何が何やら一向様子が解らない。一緒に湯に来てゐた某新聞小諸支局員のM——君は、本當に噴火したのなら直ぐにも登らねばならぬが………と言つてゐるので、では僕も一緒に登らうかと言ふと、行きませうといふ。だから都合では僕も一二日のうちに登山することになるかも知れぬ。然し今のところでは極く平穩だ。火山の麓の古驛は常にこの響のために騒がされてゐる様だ。

この裾野一帯から千曲川の沿岸、和田峠鹽尻峠に及ぶ舊道に沿うて散在してゐる宿驛は殆んど悉く古驛式情調を帯びて居る。一つは寒國のせるものだらう、家が煤けて古い奇妙な建築で、道路が石ころばかりの凹凸道でいかにも敗殘の姿だ。その癖どんな小さな宿驛にでも數多の料理屋がある。そして必ず藝妓と名のつく者を置いて居る。酌婦に至つては愈々多からう。これも例の蠶業地のためだとか聞いた。その田舎藝者の生活が僕には誠に興味深く眼に映する。彼等の多くは何處其處からの流れ者で、大方はもう身を棄鉢^{すて}にしてゐるのが多い。前言つたM——君に惚れてゐる女はツイ近頃富士見町から落ちて來たのだ相だ。それから曾て前田夕暮君の居たことのある某下宿屋に奉公してゐた

といふ女の成れの果に出逢つた。

或時、幾ら飲んでも酔はないで、氣が沈んで仕様がないので、諸君の馬鹿騒ぎを眺めながら、自分の古い歌を低聲^{こゝろ}で吟じてゐると、一人の女が側にやつて來て、東京ではそんな唄がいま流行るのでかと訊いた。

東京が戀しい。

八月の暑い盛りに、何日だつたか銀座通りを歩きながら、切りに旅に出たくなつて、旅に出たら一切の苦悶が解決される様に考へ込まれて、汗を拭きく、色々なことに思ひ耽つたことがあつたが、もうあの邊の街路の並木は黄葉して、早や散つてゐるかも知れない。しみんと秋の浸みてゆく市街の各所の、色々な情調が實際身ぶるひのする程可懐^{たづ}しい。都會の女、都會の食物、都會の音樂——一切の都會の生活が、斯うして離れてゐると改めて明かに眼に映る。

今夜この原稿を書いてゐる僕の側に來て居るI——君(山岳寫生のため、久しく此國に來てゐる洋畫家)は上野の繪畫展覽會を見るために明朝の汽車で立つ相だ。僕も愈々歸り度いが、歸るまい。矢張り最初の思ひ立ち通り、このまゝの旅を續けて行かう。數日のうち、越後路へ入るつもりだ。豫^{かね}てあこがれてゐた日本海の暗碧色の浪に面する日も遠くはない。今年の初雪をば恐らくあちらで見ること

になるだらうと思ふ。さう思ふと急に何だか寂しさの襲うて來るのを感じるが、僕は行く。愈々飽きるまで行つて見る。左様なら、御機嫌よう。(十月廿二日夜信州小諸にて)

林中の温泉より

またか、と言ひ給ふな。今一度だけ辛抱してこの火山の麓に日にまし滅びゆく秋の姿と、その秋に對して居る小旅客との曲もない消息を讀んで呉れたまへ。

報知もしなかつたが、僕はいま淺間の森林帯のなかに湧く小さな温泉場に來て泊つてゐる。

昨夜と一昨夜と、繪卷物のやうに引續いて不快な悪夢に襲はれた、め、今日は朝から非常に疲れてゐた。で、出たり入つたり湯にばかり親しんでゐたが、晝飯を済ますと暫く微睡まどろんだ。そして午後三時ごろから唯だ獨りであらうと宿を出かけてみた。薄い二すぢ三すぢの雲は浮んでゐたが麗かに晴れて、さまで寒いとも感ぜぬほどの日和で、宿の前の徑が直ぐ近くの赤松の林に入り込む邊まで歩いてゐるうちに、もう疲れた心の底には一味の新鮮と溫和とを感じてゐた。赤松林の丘の背を越すと、木立は盡きて明るく日光を受けて居る狭い澤に出た。澤には坂なりに小さい畑が幾枚か開墾せられてある。畑には大豆が作られてゐたものらしいが、既に抜き取られたあとで、掘りかへされた土が黒く濕つて居る。山番と畑番とを兼ねたらしい小屋が一軒見えた。人かけは見當らなかつた。

僕は畑の中の徑を拾つて澤の奥の方へ歩いた。澤の彼方側は一帶に打續いた落葉松の林である。『落葉松はすつかり黄色くなつた』と僕は前號の通信に書いたが、今は黄色を通り越して既に赤味が、つてゐる。風の吹く日でもあつて見たまへ、その細かい葉がまるで時雨の様に散つて居るのだ。木立の下を透かして見ると、古ぼけた赤毛布でも敷いた様にびつたりと散り布いてゐる。其上を歩くとぼくぼくと軟い。試みに指で掘つて見たら薄赤い新しい落葉の下には、幾年の間にか散り積つて朽ち去つたものが二三寸の深さに達してゐた。朽ちた葉は其の木のための肥料となるものだと思つた。

細小な澤は程なく盡きて、丘と丘、林と林とが狭々と相迫つた所へ僕は歩いて來た。四邊に懸け構ひの無い自由な音を立て、眼の前に溪が流れて居る。枯草のなかに表れて居る大きな岩の根がたに腰を下した。四邊には芒が多い。それに混つて一尺ほどに延びた落葉松の子が親木にならつて葉を落してゐる。根がたにこぼれた細い薄赤いその葉に微笑を與へながら僕は袂から煙草を取出した。そして土地の冷たさが身體に浸み上つて來るのにも氣のつかぬ位る茫然と身を横へてゐた。

溪を距て、對ひ合つて居る山腹の落葉松林の上には赤々と夕日の光が流れて居る。溪間には白樺がひっそりと立ち並んでその眞直な、雪のやうな幹と軟い黄葉とには既に微かに闇が匂ひそめて居る。溪の聲の高いことよ、僕の心の鼓動はいつともなく溪の聲と調子を合せて、ゆたかにも波打つてゐるのである。瞑目してこの自身の心に耳を傾けてゐたが、やがて起き上つて僕は溪の水際まで降りて行

つた。水際には僅かばかりの蘆が生へてゐた。蘆のなかに立つてゐると、いかにも日の暮れたのに氣のつくほどの薄暮と冷たさが身に迫つて來る。狭い溪の石の間を飛び越えて向うの山に移つた。其處は白樺の木立である。疎らになつた黄色い葉の間の幹の白さ、僕はそれらの木の間を傳つて山を登り始めた。徑らしいものもないのであるが、兎に角その山に登つて見たかつたからである。

丁度其處は森と森との繼目になつてゐる所で、雜木が密かに枝を交へてゐた。這ひ登るにも非常の困難だ。手足などには幾個所も小さな傷をつけた。枝や葉の透いたところを選んで、上へ上へと進んで居るうちに、夜になつたら如何しやうといふ不安が胸に湧いて來た。が、また夕月のあることにも心づき、よし月が無いにしろこのまゝ、山を越えて麓の方まで十町あまりも這ひ下れば、屹度何處かへ通ふ路があるに相違ないことを知つてゐるので、そのまゝ、引返すことを止めて進んだ。

その山の頂上近くまで進んだ時には、溪間と違つて未だ落日後の光線が明るく木の間に残つてゐた。そして漸く暗き時についたばかりの小鳥(多分頬白か何かだつたらう)の群が其處等の枝からばらばらと惶しく飛び立つた。頂上らしい所へ出ると暫く森が途切れて黄色い熊笹の原があつた。日はもうとつぷりと暮れてゐるので、明るい西から南にかけての半空を限つて聳え渡つた日本アルプスの山脈には例の穩かな黄昏のいろがまつはり着いて、一體の大氣がいかにもしつとりと潤つて居る。僕は歩くのがいやになつて深い熊笹の中に仰臥した。眼の上いつばいに垂れかゝつた空の蒼さ、重さ。見給へ、

月が淡く空に浮んで居る。日光のなごりと夕月の光線と、靜かに融け合つて空一杯に醗酵してゐるのである。僕は呼吸を止めては、やがてまた深く吸ひ込んだ。二羽の蝙蝠が僕のすぐ上をまつてゐる。其處へ、遠雷の様な音響が幽かに大地を揺つて起つた。まだ荒れてゐるな、と僕は寢ながら思つた。君、淺間が一昨夜から切り^{しま}に荒れてゐるのだ。昨日などは五分と間をおかずに鳴り轟いてゐた。噴煙は晴れた空に雲のやうに東に流れて、其末は武藏の秩父山までに届いてゐた。今日は餘程風いでゐるのだが、また始めたのだらう。僕は半身を起して淺間の方に振向いた。驚くべき烟は薄黒く聳えた山頂から今日も同じく東へ流れて居る。そして油の様な濃密な烟の根がたには薄赤く火光を宿して居るのである。

綠葉君、僕が火山を愛する所以は、その一抹の烟が常に原始時代を戀ひ慕ふ僕の心に、更に一絃のしらべを傳ふるが故である。まだ少年のころ、日向肥後の國境から遠く阿蘇の烟を望んで謂ひやうなき敬虔の念に撲たれたのも、恐らくこの心に由つてであつたらう。同じく幼年のころ、山と山との峽間の僕の故郷の空が、一種の音響と曇りとに掩はるゝことがあつた。母は僕を抱いて霧島さまのお荒れの日だと教へた。その日のつゝ、ましやかな幼い心をも僕は忘るゝことが出来ぬ。海に浮んで不斷の烟を上げて居る伊豆大島の火山については、安房から相模から屢々君に書き送つたことがある。今秋、端なくこの淺間の麓からこれらの消息を傳へ得る僕自身を甚だ幸に思ふ。火山の烟に對^{むか}ふ時、僕の心

つねに『永遠』に對つて波立つを覺ゆる。僕は眉を擧げて、また頭を垂れて、深いく熊笹の中で斷えでは續く噴烟と音響とのために全身を熱せられてゐた。

氣がつくと月の光が湖の様に僕を取巻いてゐた。何といふことなく非常の恐怖を感じて矢庭に飛び起きさま、熊笹原を走り下り始めた。そして程なく茂つた赤松林の中に走り入つた。月の漏るる林のなかの靜かなこと、僕は茫然と立止つて四邊^{あた}を窺ふ様に心をすませてるたが、やがてまた両手を懷中に預けて、徐ろに木の間を拾つて歩いた。

最初の想像は外れなかつた。十二三町も歩いたかと思はるゝころ、林は盡きて黒い烟に出た。烟の畦を廻つて行くうちに小さな路を發見した。それに沿うて暫く歩いてゐると、また可なり深い林に入つた。これは困る。一體どの方角に出ればいゝのだらうと當惑したが、兎に角歩いてる方角へ歩くより外に適當な考へつきはなかつた。所が愈々困つたことにはその路が林の中で十字形の辻^たを作してゐる所へ出た。心あての温泉宿の方角へ行く路は餘りにも心細いほど哀れな小さなものである。これについて行つて中途で見失ひでもしては愈々困ると思つたので、今少し麓の方へ降りて行かうと曲らずに暫く歩いてゐる所へ、突然人の唄聲を聞いた。先づ驚いたが、僕はすぐ袂から煙草を取出して火をつけた。そして向うの近づくのを待つた。

村の若者が馬を引いて來たのである。腹一杯に唄つてゐる彼の聲を聞きながら、僕は今一本煙草を

つけた。闇から突然彼を驚かすことを避けるためである。けれ共、彼は驚いた。僕が温泉宿への道を訊いても容易には返事もしなかつたが、漸く合點が行つたと見えて、それでは〇〇館の客人かと反問するので、左様だと答へると、それはまア飛んでもない所へ来たものだと言つて道を持替へて道を教へ始めた。が、何分にも夜ではあり林の中ではあり方角の要領が飲込めないのでまごまごしてゐると、彼は手綱を其處の松の枝につないで、それでは俺が途中まで連れて行つてやらうと言ひ出した。それには及ばないと一度は斷つたが、もう先に立つて歩いてゐるので數多度^た禮を言ひながら後についた。松を漏れた月の光が彼の逞しい肩や背に斑々として落ちて来る。僕は獨歩の『忘れ得ぬ人々』を思ひ出さずには居られなかつた。

一寸した丘の背まで来て彼は立止つた。もう向うに〇〇館の灯が見えるといふのでよく見ると成程谷間みたになつた所へ赤いのが見えて居る。それではといふので、僕は袂を探つたが何も持つて出なかつたので、すひさしの敷島の袋を取出して彼に與へて別れを告げた。彼は尙ほ暫く立停つてゐたが僕のうしろから、今夜は俺も湯を貰ひに行かうと呶鳴つた。是非來るがい、と呼び返ししながら僕は小さな赤い灯を目あてに小走りに急いだ。其處には熱い酒と、男女混浴の温泉とが僕を待つてゐた。

(十一月九日夜、酔後、菱野より)

山より妻へ

日向和^{ひなたわ}田から多摩川に沿うて、だら／＼坂を二里登つた。川と云つてもすつかり溪で、到るところがまつしろな急瀬^{きふら}ばかり、それを挟^{はさ}んで杉のとしごろの青いのがみつしりと茂つてゐる。

いよ／＼山にとりついてから急に峻しくなつて、とう／＼^{もろはた}双肌^{むすはた}ぬぎで登つた。山の下までは、照るともなしの日が照つてゐるが、山の半ばほど登つて來ると、風もないのに、生きもの、やうな露の斷片^{たぎれ}が非常な速力で、その溪^{たに}の、峽間^{はざま}からまひ昇つて來て、なんだか獨りでゆつくりなどとても歩いてゐられなかつた。この間、四十二町。いま僕の居る家は社のすぐとりつきで、この二階の窓から三方がすつかり見晴らされて、むやみに佳い。前面(机をすゑた)がすぐ恐いやうな社の森で、樹木は檜、樅及び杉、みな何百年か斯うしてゐた連中だらう。左手は、何か名の知れぬ巨きな老樹を透かして、遙かに南畫にあるやうな山岳が連つてゐるのを見下し得る。や、身體^{からだ}をねぢむけて、うしろを見ると、二三十町を距てた下の溪がこれも老樹の間に見える。

そして、着いてすぐは、暫く霧が晴れて、この家の附近にはさ、ぬが、左手の遠い山岳にはうす赤

い夕日が當つてゐた。すると、一瞬ののちには、また、霧が精靈のやうに、そこ此處をまひ歩いてゐる。遠くのく方には、晴れた雲が日光を宿してゐる。この景色を、くはしくまぢがひなく書かうなら數人して、手わけして書かなくてはとても駄目だ。正しい時計を前において、三分、五分の間には、もうたいした變化の生じたことを知らねばならぬ。

鳥がむやみに多い。

と、以上を書きかけておいて風呂に入つて來たら、どうだらう、濃密を極めた霧が、身邊——宇宙を包み終つて、あの近くの社の森ももう見えない。窓さへあけられぬ。ちいつと見ると、ソラ、この間の雨のやうに、白い柱を作つて、迅速に追つかけく走つて居るのだ。

あまり、新しい經驗なので、すつかり面食ひのていだ。い、のだから、わるいのかすらもよう言へぬ。この斷定をつけるには少くともいま一二日を經過せねばなるまい。

寒いよ。山の人でいま綿入羽織を着てゐない人はない。けふは割に暖かなのださうだが、火鉢をそばからよう離さぬ。はあつと息をふくと、白うくなつて出る。

イマ、階下^{した}に、新しい旅人が飛込んで來た。霧で大騒ぎをした話をして騒いでゐる。さつき僕の通つて來たあの溪合の徑を、この霧では、なるほど驚いたらう。どうだ、三間さきは見えない深さだ。

僕の眉根が痛いほど固くなつて來てゐる。風が、障子を動かし始めた。暗い、暗い。(以上、二十日、夕方)

右まで書きかけてゐたところへ女中が膳を持つて來た。たいした馳走^{はしご}だつた。椎茸^{しじふ}に乾白魚、茗荷の吸物、泥鰌の柳川鍋、山芋のすつたの、山芋(巨きいんだぜ)の煮たの、それに乾海老のつくだ煮、と、も一つ、二合瓶、これはもつとも主觀的産物だが、——ちびくやるうちに、暗かつたあたりが急に明るくなつたので、振向いてみると、どうだ、霧がすつかり晴れて、西の(前面)溪間から、大きな煙突から煙が出るやうに、真白い雲がちぎれく、むくりむくりと湧き上つて來るではないか。その雲はあまり高くへは昇らず、丁度真すぐに眺めらる、眼の程度のところあたりに來て、幾つにか切れてところどころに空中に浮んでゐる。しばらくこのあやしき景を眺めて、また、ちびくを始めると、思ひもよらぬ雨の音だ。オヤと振向くと、驚いた、まつたく雨がばらばらと落ちてゐる。雲はどこぞへ行つてしまつてゐる。而かも明るい。ふとうしろの方(東)の溪を見下すと、二三十町下の世界の狭い平野には、きれいな夕日が當つてゐる。そして、さつき僕の近くに居た奴だらう、雲が二つか三つその下の方へ下りてゆきつ、ある。その雲には虹のやうな日光が宿つてゐるのだ。大きな雨が、しきりに落ちて來る。

——少し逆上^{あが}つて、素晴らしい勢ひで瓶をとり上げると、からさ、忽ち追加追加と叫んで、宿の人を驚かした。そして、とうとう例の如くめでたくなつて、今朝まで、正體無し。

もつとも、夜中に眼がさめた時、恐しい雨の音だつたが、今朝起きてみると矢つ張り降つてゐた。どうか雨ばかりは欲しくないと思つてゐたので、少々がつかりの態だが、止むを得ぬ。鳥がネ、そこから中で啼いてゐる。向うの山の頭が明るいから、若しかすると、雨もあがるかも知れぬ。そして、いまでも、前とうしろとでは、たいした景色の違ひかただ。うしろの方では、山と山との間に雲が澱んで、消えたり表れたり、ソラ、橋本雅邦のかいた日本畫によく出てくる山と雲との景色で、信州生れのお前は、まだこの種の景色の記憶が鮮かであると思ふ。太鼓が、そこ、で鳴つてゐる。朝のおつとめだらう。

歌を作らうと思ふのさへ、おつくうだ。このまゝ、ぼんやり、この不思議な空氣のなかに浸つてゐて見よう。どてらを借りて、ぬくぬくと着込んで、火鉢に當つてゐる。東京では變事無しかネ。誰も來ない？ お前の動作をきかして呉れ給へ。左様なら。(二十一日、朝七時半)

野 州 行

停 車 場

停車場までE——君が送つて来てくれた。停車場で大きな柱時計を仰ぐ氣持は、惶しいなかにも言ひ難い静けさの籠つてゐるものである。時間がや、早かつた。やらうかと驛前のビヤホールに寄る。氷のやうに冷たいのが静かに咽喉を通つてゆく。彼も無言、我も無言、まだ朝のうちの亭内にはきれいに水が打つてあつた。發車のベルをば聞き流しながら、一汽車乗り後れた。左様なら、左様なら、誰々によろしく、左様なら。

33
白い帽子に白い洋服のうしろ姿は眞直ぐに歩廊を歩き去る。窓から離れて腰を下すと私は全く獨りになつてしまつた。汽車の足は次第に速くなつてゆく。淺草あたりの空は青黒く燻^{いぶ}つて、其處等いつばいにきら／＼と日の影が散らばり、この汽車自身も光つて居る様に思はれた。

喜連川

下野國喜連川といふまぼろしは永年私の頭に浸み込んでゐた。上州野州といふ様な聯想から上州同様な山深い國としてのみ描かれてゐた。その奥州街道の喜連川は霧深い峽間に在るうねうねした坂路の一筋街、と斯う考へてゐた。

ところが、大宮から小山宇都宮と、行けどもく山らしい影も出て來ぬ。全くの平野である。汽車の兩側には黄色い瓜の花のみ眼について、汗は斷間なく流れ出る。汽車自身も汗みどろの形だ。

宇都宮より三つ目、氏家驛下車、直ぐに馬車に移り、また田圃の中を走る。一里ほども行つた所で、小高い丘を越えた。峠を過ぎると下に大きな河が見えその向うに白々とした町が見えた。此處だと思ふと、もう私の胸は躍り始めた。初めて見る喜連川の町は山ではないが、眞白な河原を前に、背後に青やかな丘を負うてゐた。

石の鳥居を入つて石段に突き當つて左に折れて、と馬車屋の教へた高鹽君の宅はすぐ知れた。冠木門をくゞり、藪や河骨のある小さな池の間を通り、玄關に立つた時、私はまた新たな動悸を感じた。家内には三十歳前後の、靜かな婦人がたゞ獨り居られた。上つて座についた時、その阿母さんに呼ば

れて九歳に六歳ぐらゐのよく似た可愛い嬢さんが表れた。そして何か云ひつけられて兩人競争して戸外へ驅け出した。兎も角もと勧められて風呂に浸つてゐると、ツイ傍の勝手口で早口の男の聲を聞いた。二年目に聞くその聲、私は直ぐ立ち上つて風呂の中から呼び懸けやうとした。

その夜は泉水に面した座敷で嬉々として酌み交した。酒を飲むといふより寧ろ何彼と話すのが主であつた。友人の阿父さんも——高鹽家は土地の郷社の神官をして居らるゝ——我等の無作法な席に永いこと相伴をして下された。仲間には齋藤春光君、大村松之助君、やゝ遅れて春光君の兄さんも來り加はられた。

短夜の殆んど曉近くに漸く席を離れて私だけは、本宅を離れた靜かな座敷に誘はれた。うとくとすると既う枕もとの窓は明るくなつてゐる。蚊帳を出て窓を開くと、すぐ前は淺い竹の林でその上はしんくとした杉や檜の森となつてゐる。雫の散る音も聞ゆる。昨日からのことなど思ひ出してゐると、何となく自分の故郷にでも歸つてゐるやうな思ひがして、そゞろに涙ぐまれて來た。久しく忘れてゐる人情といふものゝしみくと身に沁み起るをすら感じた。

御牧が原

岸の柳は低くして
 羊の群の繪にまがひ
 野薔薇の幹は埋もれて
 流るゝ砂に跡もなし
 蓼科山の山なみの
 麓をめぐる河水や
 魚住む淵に沈みては
 鳴の頭の深緑
 花咲く岩にせかれては
 天の鼓の樂の音
 さても水瀬はくちなはの
 かうべをあげて奔るごと

白波高くわだつみに
 流れて下る千曲川

あした炎をたゝかはし
 りふべ煙をきそひてし
 駿河にたてる富士の根も
 今はさびしき日の影に
 白く輝く墓のごと
 はるかに沈む雲の外
 これは信濃の空高く
 今も烈しき火の柱
 雨なす石を降らしては
 みそらを焦す灰けぶり
 神夢さめし天地の
 ひらけそめにし昔より
 常世につもる白雪は

今も無間の谷の底
湧きてあふるゝ紅の
血潮の池を目にみては
布引に住むはやぶさも
翼をかへず浅間山

あゝ北佐久の岡の裾
御牧が原の森の影
夢かけめぐる旅に寝て
安き一日もあらねばや
高根の上にあかゝと
燃ゆる炎をあふぐとき
み谷の底の青巖に
逆まく浪をのぞむとき
かしこにこゝに寂寥の
その味ひはにがかりき

——島崎藤村作「寂寥」中の一節——

七月二十四日、午前九時、小諸を立つ、春日の湯に向ふためである。順路を行けば何處より何處を
經て百澤町に向ふべき旨小諸の友人たちは丁寧に教へて呉れたけれど、私は一種の好奇心から名のみ
は永く聞いてゐた御牧が原を横斷し、同じく百澤に出づべく思ひ立つた。

小諸を出る時、昨夜の宿酔で身體がふらくしてゐた。一本提けて行きますかと握らせやうとする
酒の瓶を斷つて、(あとで大いに後悔したが)裾を端折つててくゝと歩き出した。晴れ切つた日光は
かつゝと上から照りつける。通りが、りの懐古園の松林が今日に限つてイヤに黒染みて見えてゐた。
うつゝと何かに思ひ耽りつゝ、夢うつゝに六七町の坂路を降りて小さな落葉松の林を抜けると、ツ
イ目の前に千曲川の流が表れた。廣い眞白な河原の一方に偏つて悠々と、あをゝと流れてゐる。そ
の上に古い危い吊橋が懸つてゐる。橋の中ほどの鐵線に握まつて私は暫く水の流に見入つてゐた。七
八年も前になる。一二年間の長旅を思ひ立つた或る秋、殆んど毎日私は斯うしてこの橋の上からこの
水を眺めて泣いたり笑つたりしてゐた事があつた。七八年間の「時」のながれ、それがいまありゝと
私の前後に顯れて來たやうにも思はれた。

川を渡るとすぐ坂になつた。御牧が原への路に折れ込んでから坂は一層險しくなつた。日はぢりぢ
りと照りつける、そよとの風も無い。五歩に一度十歩に一度立ち止つて振返ると、浅間山にはいつば

いに雲が懸つて、薄青黝く光つてゐる。

喘ぎ／＼辛くもその九十九折の急坂を登りつめると、忽ち眼前に驚くべく廣大な平原が展開した。波浪のやうにうねり續いた低い丘陵には、松林や麥畑や豆畑が果もなくうち續いて、その間にぼつりぼつりと人間の影が見える。しいんとして空の光の烟り渡つてゐるなかを、何處からか幽かな聲の流れて來るのは山鳩が啼いてゐるのである。遠くの野末を僅かに動いて行くのは荷を負うた馬である。私は汗を拭くのも忘れて、暫くはこの目新しい光景に茫然として眺め入つた。眞實私にとつては初めての景色である。武藏野の平野も、肥筑の平原も、廣いには廣いがそれらとは全然趣きが違つて居る。荒れ乾いた、いかにもこれは高原の姿である。

會て輕井澤にゐた時、或る西洋人の宣教師が輕井澤の自然は何となくエルサレムの高原に似てゐると言つたことがあつたが、この原なども何處かアラビアあたりの片隅にでもありさうに想像される。

いま登つて來た方を振返ると、千曲川の岸から殆んど直角に近い角度で削り立つた木深い斷崖である。眞下に青い流が隠見してゐる。その坂の長さ約十幾町、これでは勞れたも無理はないと今更がつかりしてゐると、不圖何やら物音がする。見廻せば坂の登り口からツイ横手の松の蔭に一人の老婆が麥を扱いてゐる。折からとていかにも可憐しく草を分けて歩み寄つた。が、こちらの挨拶には目も呉れず、せつせと黄色い穂さきを抜き落してゐる。私はその側の松蔭に腰を下して所在なく煙草を取り

出した。私等のいま住んでゐる海岸ではもう二ヶ月も前に刈り取つたものを、など、いかにも出來の悪さうな短い麥藁を眺めながら立て續けに二三本を喫ひ捨てた。山鳩は間斷なく遠くの林で啼いてゐる。大きな山蟻が熱つた足に這ひ上り這ひ下りしてゐる。

我に歸つて歩き出すと、前にはたゞ草いきれのむんむとする中にあやしい小徑があるかないかに續いてゐるのだ。出立當初からそののみを氣にして來た路迷ひは愈々それから始まつた。何しろ同じやうな徑が深い草の蔭に其處にも此處にも通じてゐる。途方に暮れてゐると幸ひ遙かの麥畑に人がゐるので其處までやつて行つて訊ねると、その麥畑の中を南の方へメタ、行くと松林に入る、松林を今度は東の方へメタ、下ると何とやらで何とやらと、現在聞いているうちに頭が變になるやうなあやしい教へかたなので、心細いことこの上ないながらも、とにかくメタ歩いて行くと廣い溜池の側でその徑は無くなつてしまふ。また今度は別な男を發見しては其處へ行つて訊ね直すと、また例の何とやらで何とやらへのつにメタ、行くことをのみ教へて呉れるのだが、その通りに行つてみると結果は矢張り同じことになつてしまふ。兩脚とも泥だらけで、芒や茨のために血さへ其處此處浸んで來る、咽喉は痛いやうに渴き出す。松林の中などで何處ぞ水の音でもせぬことかと立ち止り／＼耳を澄すが一向そのこともない。どうかして遠い所でそれらしいものを聴き出して、千辛萬苦たづね當て、見るとこれはまた赤濁りの湯のやうな水だ、例の其處此處に作つてある溜池から出て來る奴らしい。同じやうなことを

繰返すこと十回か二十回、ほとく精も根も盡き果て、小さな木蔭に辛うじて日を避けながら寝轉ぶと、冷たい汗がうつすらと全身に流れてゐる。何といふ怪しな所だらう、と終にそんなことを考へ始めた。信州は山國としては一般によく開けてゐる國である。それに比べて此處ばかりは全く別天地の觀があるではないか。路らしい路のないのが第一、路を訊いても教ふる法を知らぬのが第二、それよりも先づあの住所の不潔なのは何だ。五町か十町おきに雨夜の星の如くに散在してゐる住家をば、初め私は單に肥料小屋かと思つた。一度水を貰ひに立ち入つて、そしてそのまゝ、爪先立て、引き返したこともある。あの中に住んでゐる仲間に親子もあるだらうし夫婦もあるだらう、また惚れ合つた若者同志もあるだらう。一體それ等が如何して如何いふ暮しを立て、ゐるのかと考へてゆくと、何だか苦しい滑稽を覺えずにはゐられなかつた。

そして不圖斯ういふ事を憶ひ起した。數年前、矢張り小諸に来てゐた頃のことである、小諸からこの御牧が原に来て開墾に従つてゐる四十近い或一人の男が歌が好きで、私の小諸に居る間、よく其處に出て來て種々の話をした。彼はもと小諸の或る立派な商家の息子である相だが、何か感ずる事があつてわざと自家を出てこの原に籠つた。初めは全く一人で木の根を掘り荒土を鋤いてゐたが、何時となく彼の許に人が集つて來た。中には浮浪人が多かつた、夫等に對して彼は全然來者不拒去者不追の方針をとつてゐるが、數日にして去るもあり、其儘其處に留るもあつた。彼の最も困難したのは

の荒原の中に貯水池を設けることで、失敗に失敗を重ねながら一つのそれを造るに二年とか三年とかの日數を費し、絶望して手を引いたの、多い中に、辛くも獨力で漸く水の漏らぬやうになし得たことをも語つた。いま私が通つて來る途中に出會つた幾つかの溜池は、畢竟それと同じものであつたのだらう。或時また斯ういふ事もあつた、原にも可なりの人家が出來たから是非神社を一字建立したいと種々手を盡したが、丁度其頃一般の社寺合併さへ行はれてゐた際で、獨立したそれは許可せられず、漸く何とか遙拜所といふのを設けることになつた、そしてその第一回の祭禮を今度行ふことになつたから、是非その日原まで來て頂き度いといふ招待を受けたことがあつた。何かの都合でそれにはよう行かなかつたが、行けばよかつたといふ氣はいまだに消えずに居る。

そんな事を思ひ浮べて居ると、今まで唯だ苦しくのみ思はれてゐたこの高原の小さな殖民地が、何となく興味深く感ぜられて來た。それならばいつそこれから百澤へ出る事を思ひ止つてその人を尋ね、其後の彼の事業の經過またはこの原の現状、産物とか生活状態とかいふものを聞いて見やうかと思ひ立たれた。そして、ぎし／＼といふ足腰を起して今度は彼の家を訊ね始めたが、私の覺えてゐるのは彼の姓だけなので、矢張り急には解りさうにもなかつた。腹は空く、をり／＼氣は遠くなる、折角振ひ起した勇氣も興味も瞬くうちに消滅して、また草の上につき坐つた。遠くで鶏の啼く聲が聞えた。見ればいま自分の坐つてゐる畑の向うの丘の中腹に一軒の小屋がある、聲はどうも其處から起つてゐる

るらしい。それを頼りにまた立ち上つた。

下の方からその小屋の附近に人聲のするのを聞き鶏の歩いてゐるのを見附けた時はまた烈しい昂奮を覺えた。小屋には三十前後の主人夫婦と汚い子供が三人ゐた。皆うち驚いて私の周圍に集つたが、私の請ふまゝに鶏卵と(唯だ二つきりなかつた)水とを出して呉れた。水は井戸(と呼ぶ所)から汲んで來たのだが例により赤く澱んで居る。私は卵の代を三倍にしてその水を沸して貰ふことを頼んだ。特にその主人はそれから十町ばかりも私を送つて來てくれた。そしてもう大丈夫といふ見當のつくまで丁寧なそれから先の路を教へて引き返した。心細くも私はまた一人して坂路を降つたが、なるほど主人の言つた程度の所まで歩いて來ると、左右の丘が一帶に開けて、その一端を横切つて走つてゐる電信柱の數本を發見した。そして、私は眞實一種の暗涙を覺えつ、その電信柱に向つて小走りに走つた。いよ／＼最後の坂を降り盡すと其處に坦々(?)たる大道が通じて、無數(?)の人馬が往來してゐた。それは舊中仙道百澤の宿であつた。(七月二十六日、春日の湯にて)

山湯日記

秋近し

大抵五時に起きる。今朝もさうだ。障子をあけると丁度眞向うの、峽間の開けてゐる空に二筋ほど金色の雲が棚引いて、眞赤な日輪が昇る所であつた。そして仰ぐといふよりも寧ろ眺め下すといつた風の地位にその日輪は在るのであつた。

厠にゆき、顔を洗ひ、身も軽いやうな氣持になつて毎朝の散歩に出た。煙草が誠にうまい。宿からとろ／＼と下るとや、開けた所に出る。東北に淺間が見え、西南に蓼科たふしなが聳えてゐる。今朝はいつになく雲深く、しかもいつもの光り輝いた雲でなくして重々と垂れてゐる。淺間は僅かに裾野のみ表はれ、蓼科からはいま切りに白い雲の離れてゆくところで、次第々々に青い圓やかな山の肌が露れて來る。そしてその址に射して來る朝日の影の何といふ爽やかな色であらう。

徑のめぐりには犬蓼や女郎花がさものび／＼と咲いてゐる。今朝はいつもほど露が深くない。露は

よく晴れた日に深いやうだ。

吹くともなく風が見えて、いかにも秋の近づいたのを思はせられ、そいろにうら寒い心が起る。部屋に歸ると長火鉢に鐵瓶が湯氣を吹いて居る。それが如何にも可懐しく、近々と寄り添うて火箸を取つた。(八月二日、春日の湯にて)

秋の鳥夏の鳥

露の深い朝のこの峽間は何となく重々しい燻銀の色に輝いて見ゆる。葛の葉や朴の葉は目立つて白と寒い色を帯びて居る。谷の方から起つた霧は次第に峰へたなびいて、やがては空に昇つて消えてゆく。峰に竝んだ赤松の肌にはあかあかと朝日がさして居る。そんな朝に限つて鳥の聲が多い。

杜鵑は切りに啼く。これも曇つた日には少いが晴れ渡つた空から空へ峰から峰へ翔ひ交しては啼いて居る。時としては宿のうしろの松の梢に来てすら啼く。驚いたことには百舌鳥がいまないて居る。私共は幼い時からこの鳥がなきさへすれば秋が来たと思つたもので、秋とこの鳥とはいつも深い因縁を結びつけて考へてゐたものだ。その鳥がこの青やかな夏の山でないて居る。椋鳥もなく、鶉もなく。此等も矢張り秋の鳥冬の鳥といふ考へが遠くから身に浸みてゐた。名を知らぬの、多いなかに、駒鳥

に似た聲の鳥がある。誠によく澄んだ聲で、この鳥のなく時は木々の雫も散り落ちさうに思はる、山鳩もうれしい音いろである。聽いて居れば自づと頭が垂れてゆき、瞳さへ瞑ぢられて来る。

なかにも私のうれしかつたのは、思ひがけなくこの峽で郭公の聲を聞いたことであつた。或朝、宿から澤の方へ入り込んでゆくと、右云つた種々の鳥のなき交して居るなかに、不圖、かつくわう、かつくわうと啼く聲を聞いた。われ知らず立ち停ると、啼く、切りに啼く。同じ程の間を置いてはかつくわう、かつくわうとないて居る。その聲のする方へ耳を澄まして居ると、やがて今度は遙か離れた落葉松林の霧の中でないて居る。會て讀んだウオゾオスの詩の中にこの鳥のことを歌つて、私がまだ少年であつた時、どうかしてお前の姿を見たいと思ひ、岡から岡、谷から谷へとその聲する方へ、實に幾度び探ね歩いたことであらう、而も終に見ることが出来なかつた、今はお前は私にとつて鳥でない、聲そのもの、彷徨へる聲そのものである、と云つてゐたのを覚えて居る。彷徨へる聲、彷徨へる聲、いま親しくこの鳥を聴きながらこの言葉の適切なのが一層身に沁みる。

今朝はそれもなかねば杜鵑もなかね。たゞ窓の下の小さな流におり立つて鶉鴒が二羽、ち、ろくとないて居る。しきりに肌寒い。羽織あらば着なまく思ふ。けふは眞實曇るのであらうか。(八月二日春日の湯にて)

春日の湯

自分の近くに春日の湯といふのがある、蓼科山の麓で、極く静かで、頭によく利く、是非一度来ては如何かと、北信濃のS——君からいろいろ親切に勧められたのは昨年の秋からであつた。病人を伴れて相模の方へ移る時も、そんな方へ行くより一家内してこちらに来るがよいではないかと云つて呉れた。暑くなり始めにもさう云つて勧められたのであつたが、病人はまだ其處までの道中に耐ふべくもないし、それを残して獨りで出懸ける勇氣もなし、それかと云つてそんな山の中の温泉にぼんやり浸つてゐる味ひは數年この方知らないことなので行き度さは山ほどだし、どうしたらよいかと獨りでさま／＼悩んでゐた。細君もいつかそれに氣がついたと見えて、あとはもう大概心配ないからゆつくり行つていらつしやい、S——さんにもわるいから、と言つて呉れるやうになつた。それならば、と喜び勇んで飛び出したのが今度の信濃行となつたのである。

S——君と二人、春日の湯に着いたのは七月二十四日の薄暮であつた。私はその日小諸から御牧が

原を歩いて來たので、ほと／＼疲れ果て、ゐた。夕立のあとに暫く續いてゐた夕焼もいつか光ををさめて、次第に暗くなる狭い坂路を辛うじて一步二歩と拾つてゐると、遠くの山の頂は追々と黒染みまさり、傍の溪の茂みからは鳴に似た鳥など折々とび出して、瀬の響も骨に喰ひ込むやうで心細い思ひがしてならなかつた。兎角して坂の右手に折れ込んだ谷合に所不似合な家の屋根が並び立ち、煙が茂く立ち上つて居るのを不圖見出した。

『此處だな！』

と思はず口走ると、

『左様です！』

と友は微笑む。

一軒の湯宿の縁に泣くやうな思ひで腰を下すと、その側を通つて女中どもが切りと膳を客室に運んでゐる。さう多くもないのだらうが、何とやら人のどよめきがそこに漂ひ、伽藍堂な臺所には何やら湯氣が立ちこめて薄赤く洋燈の灯が浸んでゐる。軒近く山の樹木が立ち茂つて、身體の汗が急に冷たい。

とりあへず湯にとび込んで、サテ廣々した三階の間で先づ一杯を傾くることになつた。先刻から耳についてゐた杜鵑がしきりに啼いて、折も折、まんまるな月が眞向うの峯に浮び出た。はてはその

湯とは云つても鑛泉で、普通の温泉の熱さは無い。體温よりや、低い位になるので最初入つた時は冷たいが、暫く浸つてゐればその冷たさは感じなくなる。無色、無臭、脳胃腸及び切傷にい、といふので、あまりきたない病人は來てゐない。高い樋から豊かに落ちてゐるのに頭や肩を打たせてゐると、眞實身體の軽くなる心地がする。その冷たいの、ほかに、冷えた身體を温めるために沸かしてあるものもある。これは湯槽ゆがは小さいし古くはあるし、特に遊び半分に入つてゐる連中が多いので騒々しさ此上ない。中學生らしい連中と土地の若い衆連との間に、寧ろ競争的に行はれる故らこゝろだつた無作法には實際弱じやくらされた。

信越線の小諸驛からも田中驛からも五六里づゝある。それが一帶に爪先上りの山路なので随分不便である。だから入浴者も附近の百姓たちか、廉れんいをい、ことの學生連に限られてゐるやうだ。従つて二十日間の滞在中、一人の話相手も出來なければ、眼を歡あそばせるやうな美しい人にも出會はなかつた。東京の本郷の人とかいふ四十ちかくの婦人が來てゐた。上品な人であつたが永い脳病で、もあることか、蒼い顔をして髪も極めて薄うすかつた。屋根には石の置いてある板廂の薄暗い二階の窓際に、毎朝この人がいろ／＼の草花を取つて來ては、何かの空瓶に挿しかへてゐる様が憐れであつた。折を求めて

は遊びに來い／＼と言つてゐたが、何だか痛ましいやうな、氣味の悪いやうな思ひがして近寄り得なかつた。屋根から落ちて腰を打つたといふ氣さくな話ずきの大工の爺さんも來てゐた。東京の深川に若い頃行つてゐたといふので、あとでは前の年増さんといへん仲が好くなつてゐた。或日の夕方やつて來た、頭の曲つたやうに長い、眼つきのよくない四十男は、翌日から部屋々々を廻つて歩いて髪を刈ることを強請した。そして涙を流しながら刈られてゐる人も多かつた。後には愈々圖々しくなつて湯槽にまで剃刀を持ち込んで其處で鬚を剃らせると口説くはいてゐた。此男はバリカン修繕屋で、附近から古い傷んだバリカンを集めて來ては三四日入湯する、其間に刈つたり剃つたりして入湯費位は作り更にその古バリカンを磨ぎ上げては山を下つてゆく、毎年一回位るやつて來るのださうだ。なるほど湯に入らない間にはせつせと磨いでゐたが、二三日するとその造り笑ひのきんきら聲は聞えなくなつた。

51 涼しいには全く涼しい。晝寢するにはすつかり窓を締め切つて、夜はまた冬の蒲團を被てからでなくては安心して睡れなかつた。私の部屋の眞下を小さな溪が流れてゐた。近所を散歩して歸つて來て、その溪で足を洗ふのに、あまり丁寧には洗つてゐられなかつた。あまりに冷たくて、直ぐ手や足が痛くなるからである。その溪に麥酒をつけておいて散歩に出て、歸つて湯にとび込んで、それから栓を抜くことは先づ第一の楽しみであつた。

そんな土地だけに、たべ物に贅澤は言へない。三度のおかずは先づ鐘詰もので、その他には鯉の料理である。夕暮ごとに庭さきの池に入つて鯉を追い廻す脊の高い宿の主人の姿が目についてゐる。洗ひにしても鯉こくにしても二三度重なれば鯉には倦きるが、鐘詰には却つて倦きない。信州に行くごとに私は次第に鐘詰美を噛み出すやうである。數年前、淺間の裏山の鹿澤温泉に行つてた時も、全く斯の通りであつた。其處はもつと山の深いだけに兎がよく取れた。湯のせるか、空氣のせるか、幸ひにお腹がよく空いた。三度々待ち受けて箸を取る幸福を味つたのはまことに久しぶりであつた。

それに酒が廉い。一合六錢となれば最上等の部で、四錢からある。味は無いが、直ぐ頭に來るといふでもない。杯は先づ大抵飯茶碗の大きさである。

涼しいのと、枕の下を溪水の流れてゐるのを取柄にして、眺望といふものは私の部屋には無かつた。宿を出て一二町下ると、東北に淺間山、西南に蓼科山が眺められた。淺間は——山は一帶にさうだが——どうしても近くで見える山でない、この位離れて見るといかにも莊嚴に仰がれる。夏のことでもいつも雲が深く、明方か夕方に極く稀にその頂上の煙が眞直ぐに立ち昇るのが見られた。通り雨のあるごとに、圓やかな輪廓の、山肌の青い蓼科によく大きな虹が懸つた。

四邊には秋草がすつかり咲いてゐた。葛、吾亦紅などを見たのは久しぶりであつた。そして、實に鳥が多い。彼等の啼くは朝に多く、落葉松林を離れた霧がうす雲となつて中空に棚引く頃、澤は全く此等の鳥の聲に埋れてゐる。

この山の湯から二里あまり山路を降つた所に望月といふ町がある。中仙道での著名な舊い宿場だ。四方を山に圍まれた、深い底見たいな所だが、町の過半は絃歌紅燈の巷である。山深く行ひ澄してゐるものを、時々悪友が現れて私をこのあやしき底の町へ連れて行つた、温泉宿の酒の終るのが大抵夜の九時か十時、提灯を吊して二里の山路、それから二時か三時まで飲んで騒いで、夜が明ければまたとぼくと坂道を這ひ登るのである。

その山の湯から下つてこの海濱に歸つて來ると、暑さが忽ち身を襲うた。この三四日、半病人となつて寝てゐる。(八月二十日、北下浦にて)

鹽 釜 行

三月十五日、宿屋を出るとツイ眼の前の停車場すら、何となくほんのりと見える様に朝靄が罩めて居る。これは素晴らしい天気だと思つた。

發車にはまだ四十分も間があつた。構内や驛前の廣場をぶら／＼歩き廻る。廣場の隅々には屋臺店の果物屋がせつせと店を開いて居る。果物といつても多くは林檎で、つや／＼した眞紅なのが其處にも此處にも山の様に積まれて、朝日がしつとりと流れて居る。

朝づく日停車場前の露店ほしなせにうららにさせば林

檜買ふなり

汽車の室内にストーブが焚いてあつた。いま燃え立つたといふ風に眞赤に燃えて居る。その癖車體は古汚い小さなものであつた。いかにも仙臺鹽釜間の小さな支線を走る汽車だと思はれた。

乗合も至つて少く、ストーブの直ぐ前に獨り席を占めて、手をかざし顔をさし寄せてゐると、そろに朝の疲れが身内の何處からか浸み出して來る様に感ぜられる。四邊あたでは汽笛が斷えず響いて、機

關車だけの黒い小さいのなどが頻りにあちこち動いて居る。煤煙がをり／＼車窓から入つて來る。麥酒でも一本提げて來ればよかつたと思つてゐると、ごん／＼と汽車は動き出した。構内を出ると朝日が窓を染めて來た。

田圃に出ると、平野を限る遠近の山々に悉く雪のあるのが眺められた。昨日をり／＼汽車の窓に降つて來たのなどまで思ひ出されて可懐しさ云ふばかりない。遠い山はや、灰色に、近いところは純白に輝いて居る。或る山の頂上には朝日を受けた一團の黒い雲が居て、一層雪を鮮かに見せて居る。

三十分も走つたかと思ふ頃、早や鹽釜に著いた。

鹽釜驛は小さな山と山との間に在つた。停車場を出ると十數人の宿引が私共を取り卷いた。黙つてそれを抜け出ると、溝のやうな入江の側に出た。小蒸汽や帆前船や漁船などがぎつしりとそれに詰つて居る。日はます／＼麗かに輝いて、船から船の話聲など、いかにも長閑である。入江に沿うて、此處にも澤山の果物店や大福餅おでんなどの屋臺店が並んで居る。何だか不思議なところに來た様な心地で、私はぶら／＼それらの臭氣と物音と光線との間を通つて行つた。そして鹽釜明神への路を訊いてその方へ歩調を速めた。

鹽釜明神にも私は意外な思ひで參詣した。鹽釜といふところは直ぐ海の岸に在つて、明神様の大き

な鳥居の下には眞白な濤が打ち寄せて居る、とそんな風にかねて想像してゐたのであつた。海は海だが溝のやうな入江で、明神はそれより更に引き込んで赤茶けた杉の森の丘の上に在つた。

境内には泉三郎の寄進したといふ金燈籠、林子平の獻じた日時計などあつた。よく聞く鹽釜櫻には無論まだ早かつたが、四季櫻といふのが社前に一本咲いてゐた。極く細かな花で、薄紅である。私の國で寒櫻といふの、種類であらうと思つた。

茶店に休んで繪葉書數枚を書く。茶店の娘が誠に可愛い、愛嬌者であつた。すき者の某々君と同伴であつたらば、など、その友の顔を思ひ浮べて微笑まれた。

もとの入江に丘を降つて、松島遊覽汽船といふの、出るのを訊ねた。ところが生憎にも先刻汽車が著くと同時に出帆したとかで、次のはあと二時間近くも待たねばならなかつた。別に行つて見る所もなく當惑して佇んで居ると、では汽船の中でお待ちなさい、此處に居るより暖かですと待合所の人が言つて呉れたので、案内せられてその小さな汽船に乗つた。なるほど三方ガラス窓の明るい船室には日光が豊かに流れてゐて、いかにもい、氣持だ。座布團二三枚を押し並べて横になつて居ると、船は微かに揺れて、ガラス窓がをり／＼はたはたと音を立てる。

實は昨夜仙臺の宿屋で少し飲み過ぎて、今日は朝から頭が重かつた。斯うして日に照らされてちつとして居ると一層それが明らかに感ぜらるゝ。小さな出入口をくゞつて私は舷側へ出た。それから陸地に飛び移つた。

入江の近所をうろ／＼と歩いてみたが、一寸入つて一杯飲む様な恰好な所がない。私は酒屋に寄つて一本を買ひ求め、盃を一つ譲つて貰ひ、林檎をも袂に入れて再び船に戻つて來た。船室には一人の大きな男がいつの間にかやつて來て長々と寝てゐた。私はその枕もとにうしろ向きに座を取つてガラス越しに入江を眺めながら徐ろに一杯々と重ね始めた。ツイ隣の漁船では鰻に似た魚をせつせと割いて居る。その男のうしろには若い女房が丸々した乳房を出して子供に飲まして居る。そとには随分荒寒い風が吹いて居るが、此處にはそよともせぬ。微かに／＼揺れて居る船の心持が一層酒の酔を速める様だ。私は瞬くうちに靜かな、沈んだ、いゝ氣持になつて行つた。

『エ、旦那、恐れ入りますが、燐寸をお持ちアございますまいか。』

斯う呼びかけられて私は喫驚した。寢てゐた男が起き上つて鉈豆煙管を指にして居る。

私は黙つて袂から燐寸を出してやつた。

『難有う御座い、今日は御見物で。』

四十過ぎの、荒んだ顔をした男である。髪も薄くなつて、眼も濃んで居るが、何處か人の好き相な光を宿して居る。

『え、松島見物です。』

『結構で、……、今日は何れから、……ハ、ア、仙臺から、……、當地はお初めていらいつしやいます?』

よく喋舌る。初め甚だ興覺めたのであつたが、そのうちに彼は松島の名所説明を始めた。何しろこれから行かうとして居る所の事なのでツイ私も耳を傾けた。そして思はず一杯を彼にさした。

『へ、え、どうも、これは恐れ入ります、飛んでもないことで……』

煙管を捨て、嬉しさうに彼はにじり寄つた。

『一口に八百八島と申しますが、それは彼の江戸八百八町の類で御座りまして、え、第一當灣内を分ちまして内海に外海……』

棒讀みに暗記して居る様な、いやしい口調が今日は如何したものかたいへんなつかしく身に沁みる。やりとりして居るうちに、松島の沖に出るまで取つておくつもりで四合瓶一本は忽ちに盡きた。くだらぬこと、は思ひながら、如何しても私はまた貧弱な財布を引き出さざるを得なかつた。

『濟まないがもう一本買つて来てくれませんか。』

『もうお止しなさいまし、もう澤山で、……左様で、では一寸行つて参ります。』

私は急にがっかりした様なさびしい氣持になつて窓にもたれた。すると、ぱりく、ぱりくとい

ふ音が聞えた。驚いて振り返ると舟の舟との間に張りつめた廣い薄氷の間に、いま一艘新しい舟が入つて來るところであつた。その舟には行火や飲食の器など散らばつて、これも松島見物を終へたらしい人が二三人乗つて居る。俺も汽船を止して和船でぼつ／＼廻りたいものだなア、一體幾ら懸るだらうなど、考へてゐると先刻の男がやつて來た。内には入らずに窓越しに酒の瓶をさし出しながら、更に三つの茹卵石をも其處から投げ込んだ。

『入り給へ、入り給へ。』

と私は大いに狼狽へながら舷まで出て呼び止めたが、振り返り／＼幾度もお辭儀をしい／＼停車場の方へ行つて了つた。印絆纏の裾に〇〇ホテルと横文字で染め抜いてあつたのを見れば、彼はその客引の一人であつたのだ。

舷に立つて居ると脚も頭もふらく／＼する。もう松島巡りなんか止さうか知らと私は思つた。(三月十七日、盛岡菊池方にて)

津 輕 野

青森驛を出ると直ぐに四邊あたりにの光景は一變した。右も左も茫々漠々たる積雪の原を走つて行くのである。汽車の中にはストーブが眞赤に燃えてゐた。

窓のガラスが急に眞白に輝くのに驚くと、汽車は小山の間に走り入つて居るので、其處の傾斜に積つた雪が窓全體に映り輝いてゐるのである。所によると五六尺からの厚みを見せて雪の層の迂り落ちたあとなどもあつた。山間を出外れると、今度は紫紺しこんの美しい空が映る。今朝は近來にない晴天で、空には我等が、夏にのみ見るものと思つて居た雲の峰がその外輪だけを白銀色に光らせて浮んで居る。この雲もこの北國に来てから初めて見たものである。私の國などでは見られない。

大釋だいしゃかえき迦驛いかえきに著くと、二人の青年が惶しく私の窓に走り寄つた。五所川原町から出迎へてゐてくれたのである。驛前の茶屋に休息して晝飯を喰ふ。食前一杯を酌み交はして居ると、いつのまにやら空は暗くなつてぱら／＼と白いものが障子に打ちつけて來た。

櫓を出して迎へるわけだつたのだが、それには途の雪が少し淺くなつた、馬車は櫓よりもつとひと

く揺れてとても乗られますまいから馬を用意して來ました、貴下のお乗りになるのはあれで、加藤東籬さんの所の馬ですといふ。なるほど三疋の馬が怪しい西洋馬具を著けて軒下に繋がれてゐる。

足駄あしぐたを雪沓ゆきぐたに履き代へた後、二三人が、りて漸く馬背に押し上げられた。臍の緒切つて以來、馬と云ふのに初めて乗るのである。初めは誰か馬の口を取る人がつくのだとばかり思つてゐた。いざ出立となつて毛内君が先頭、次が私、あとから林君が走るこゝとなつたのだが、豈計らんや、どの馬も手放しである。兩君は、特に毛内君は深く騎乗の心得があると見え、いゝ心持でとつ／＼と走らせる。大いに驚いたが、此場に及んで既う弱音も吹けなかつた。それに騎馬で行くといふ事に子供らしい面白味をも感じ、いま飲んだ酒の酔も手傳つて、まよ落ちるなら落ちた時の事、と度胸をきめて手綱を取つた。と云ふより鞍を擱んだ。加藤東籬君、永い間の交際で今日初めて逢ふ筈の未見の友、その家に飼はれたこの馬よ、希くばその主人が爲に遠來の客を跳ね飛ばす事勿れ、と只管に請ひ禱られながら……。馬は走る。わが尻は鞍上せましと右往左往に上下する。

路は程なく山に懸つた。雪の深くなつたのが眼立つてわかる。どの山もたゞ白々と唯だ丸々と相續いてゐるのみで、これといふ森林も、寸分の地肌をも見る事は出來ない。山に續く大空も何となく低く／＼垂れ下つて來てゐる様で、思はず眉が引き締めらるゝ。

或る峠では途上の氷を切つてゐた、雪が凍て、厚い氷となつてゐるのである。三尺も四尺も切り抜

いてゐる所などあつた。數人の人夫はこの異形の三人を斧に杖つきながら見送つてゐた。馬はよく走つた。ふとしては切りさしのまだ軟い雪の中に脚を踏み込んで前脚悉く埋れ去ることなどあつた。

私も初めの間は皆と口調を合せて大聲に喋舌り合つて來たのであつたが、いつしか口を噤んでしまつた。二人の青年は、もう欣ばしくて耐らぬといふ風にあとになりさきになり馬に轡を嚙ませて、唄ひつ叫びつして駈け廻つた。私が獨り遅れてとぼくと山の峽間を歩ませると、思ひもよらぬその向うの峠路から、急に晴れやかな笑ひ聲の落ちて來ることなどあつた。

上り坂幾町、澤から澤の九十九折幾町(その間は最も雪が深かつた)、漸く四邊の空氣の明るくなりそめたのを感じた時、私は思はず馬を引き停めた。疎らに雪を抜いて並んで居る落葉樹の梢を透かして、直ぐこの山の麓から右にも左にも眞向うにも、殆んど眼の及ぶ限りに連り互つた大平原が眼にいつたからである。他の二人も私と同じく馬を停めてゐた。そして兩人一緒に指してこれが有名な津輕平原ですと教へてくれた。

いま我等の馬を立て、ゐる小さな山脈は丁度この平原を兩分する位置にある様に思はれた。この麓からずうつと扇の様に擴つた雪の原は全く何方にも際限がない。そしてその四方はひとしく深い煙の様なものに閉ぢられて居る。雪でも降つてゐるのかも知れない。唯だ遠く左手に當つて高い嶺が、ひとつ古鏡のやうに輝いてゐた。岩木山ださうな。

下り坂が暫く續いて馬は平地を走るやうになつた。いま眺めた津輕平野である。そして我等の前の一本の路のみ泥を帯びて細く續き、四望悉く眞白に光つた平である。諸所に雜木林と村落とがあつた。五所川原町に程近くなつた頃、路傍の林の蔭から二人の人が現れて帽を振るのに出會つた。ア、加藤さんだ、加藤さんだ、といち早く馬上の一人はそれを認めて叫んだ。私の胸は踊つた。手紙の上だけではあつたが互に勵まし勵まされて來た永い間の尊い友人、その人といま初めて相見るのである。なるほど、寫眞で見覺えた加藤君であつた。私は唯だ帽子を取つて頭を深く下げたのみ、何にも言ふ事が出來なかつた。彼もまたさうであつた。いま一人は、これも創作社の舊い社友である原むつを君であることを知つた。

馬を下りようとしたのであつたが、兎に角そのまゝ宿まで行つた方がよからうといふので、其儘また我等だけ馬を驅つた。五所川原に入つたのは漸く薄暮、四里半の難道を二時間餘りで驅けたわけである。宿のツイ手前で馬を下りて、私だけ引返して加藤君等を迎へに行かうとしたのであつたが、脚がまるで棒の様になつてゐるとも歩けなかつた。宿は林旅館、林君の自宅である。其處にはまた數多の人が迎へてゐてくれた。和田山蘭君の弟靈光君もその中に居た。三階の大きな座敷にはッかりして坐つて居ると其處の窓ガラスを通して例の眞白な津輕平野の一部が見渡される。雪がまた盛んに降つて來た。夜に入ると凄じい風となつた。

風呂から上ると十人あまりの人がめい／＼銚子を控へて私を待つてゐた。何といふ晴々しいその顔色ぞ、私は直ちに雨のやうな盃を引受け／＼飲み干さざるを得なかつた。程なく、唄が出た。いづれも津輕特有の唄であるさうだ。いかにも、單調を極めて、而も何とも云へぬ哀愁を帯びた調子である。甲唄ひ、乙應じ、満座手を拍つてこれに合すのである。所へ、俄に調子外れの拍手が起つた。私の隣に坐つて、今まで唯だ手のみ拍つてゐた加藤君が突如として聲をあけたのである。彼生れて四十年の間、たいの一度も唄つた事のない人であつた相だ。加藤さんが唄つた、加藤さんが唄つたと満座の若い人達は一齊に立上つて手を拍ち足を踏みならした。

ドダバ、エコノテデー、アメフリナカニ、カサコカブラネデ、ケラコモキネーデ。

彼は瘦軀をゆすりながら眼を瞑ちて繰返し／＼この唄を唄つて居る。その横顔を打眺めつ、私は心ひそかに彼が竹馬の友、いま東京に在る和田山蘭を憶ひ起さざるを得なかつた。

泣く如く加藤東籬が唄うたふその顔をひと目
見せましものを

翌日、凍つた雪を踏んで加藤和田林の三君と松島村に向つた。松島村は同じく津輕平野の中の一部落、五所川原から約半道、何處から何處までも區限くぎりのつかぬやうな、タモといふ榛はんのきに似た落葉樹と

藁家とが點々と散在してゐる寂しい村である。この村に加藤君も和田山蘭君も生れたのであつた。

加藤君の家も舊い藁葺家の一つであつた。通された座敷の暗い廣い中に立つて居ると加藤君が雨戸をあけた。軒から殆んど直ちに雪が續いて、縁より二三尺も高く積つて居る。軒とその積んだ雪との隙間に僅かに空や庭樹が見える。今日はよく晴れてゐた。

同君の家は農家だが、同君自身は身體の弱いため、餘り田畑などには出ないらしい。初めての挨拶をしに來て立つてゆくその細君のうしろ姿を見送りつ、彼女がよく働いて呉れますので……といつもの低い調子で彼は私に言ひ足した。何もないが此等の御馳走もみな自分の家で作つたものばかりである、夏ならばもつと種々の野菜などがあるのだが……今度千五百坪ばかりの地面に梨と林檎を植ゑることになつた、それが實るやうになつたらその中に小屋を作つて私だけはそちらに行つてしまふつもりです、とも彼は語つた。今年十五歳になつた長男をも、小學校を出ると農學校に入れて矢張り百姓にするつもりです、とも附け加へた。

煤けた床の間には同じく煤けた澤山の書物が積んであつた。この部屋で、彼のあの靜かな／＼歌が今迄作られてゐたかと思ふと、何とも云へぬ可憐さ難有さを覺えしめられた。晝頃から始まつた酒はずつと夜まで續いたのであつたが別に酔ふといふでもなく、それからそれと濕やかな話のみが續いて行つた。

翌日、四月一日の朝もまたそんな風で晝になつた。そしていつともなく細かな雨が降り出した。
『ホ、——、珍しいものが鳴く。』

私は縁側に出た、藁ひきが近くで鳴いてゐたのである。斯んな深い雪の中で何處に忍んで鳴くのだらうと不思議であつた。見渡す限り平らかな雪の中をあちこちと多くの人が橇を引いて歩いてゐる。それは各自それぐの田の雪の上に肥料を運んで置くのださうだ。

白雪のいづくにひそみほろくとなきいづる

藁か津軽野の春

午かけて雨とかはれるしら雪の原のをちこち

肥料こえ運ぶ見ゆ

午後打連れて小字吹畑なる和田家を訪うた。山蘭君の両親並びに一人だけ残して置いてある彼の長男を見舞はむためである。七八町も行くと其家だ。何やらの落葉樹、松などが家を圍んでゐた。彼が家は代々の神官職で、父君で十四代、山蘭君が歸れば十五代目になるのだといふ。

オ、と叫びながら阿父さんは飛んで出ていきなり私の手を取られた。そしてそのまゝ、座敷へ連れて、いや寧ろ引きずられて行つた。阿母さんは、唯だ疊に手をつかれたきり、涙でもものが言へなかつ

た。今年七歳になる夏男君は、東京の小父さんが來ると云ふので綺麗な著物に著かへてゐた。靈光君も、同君の兄で山蘭君の弟に當り今は出で、他姓を繼いで居る老一君もわざく來つて、此席に加はつて居らるゝ、全く水入らずの一座である。酒出で、情緒愈々濃こまやか、嚴父初め我等一同、打揃つて筆を執つて遙かに山蘭の健康を祝する意味の長い手紙を書いた。

阿父さん先づつぶれ、次いで次ぎぐに倒れて床に入つた。眼がさめて考へると、私は三度も五度も阿父さんの荒鬚のその口で接吻せられたやうだ。今夜も風が屋根を揺つて荒んでゐる。

汝がが父はさきくぞおはす汝が母はさきくぞお

はす汝がふるさとに

松島村

今まで雪の原を歩いて来たせるもあつたらうが、加藤東籬君に導かれて始めてその奥座敷に通つた時、私にはまるで眞暗であつた。恐らく冬中締め切りになつてゐるらしい縁側の雨戸を加藤君は急いであけた。雨戸に添うて庭には雪が五六尺も積つてゐた。縁側に出て立つて見ると、その高さは私の乳か肩あたりまでである。

直ぐに始まつた酒は、其日は飲むことより話すのが常に先立つたので、靜かなままに晝から夜まで續いた。其間、私がをり／＼便所に立つので、加藤君は、

『小便なら其上になさい。』
と縁先の雪を指さした。

實際便所は遠かつた。中の間、其處にも爐があつて誰かゝるた。それから勝手、其處にはより大きな焚火の爐があつて大勢の人達がゐた。それらを通り抜けて今度は土間、土間の次が厩で、それから何か今一所あつて漸く便所である。人のゐない所を通らうとすれば玄關に出て庭を廻るのだが、それに

すれば凍つて凹凸した雪の上を歩かねばならなかつた。

翌朝、勝手(と云つても十疊か十二疊の廣さはあると見た)の流しもとで顔を洗ひながら丁度其處に來合せた加藤君に訊くともなしに私は訊いた。

『此地方の農家の間どりはみな斯うなのですか。』

『大概同じです、大小の差はありますが……。』

言ひながら何か持つてゐたものを下に置いて彼はツイ其處の板戸をあけた。

『これが昨夜話した糶を造へる所です。』

随いて行つて見ると可なり廣い板の間がびか／＼する様に綺麗になつてゐる。昨夜何かのついでから信州の話が出た。其時加藤君は藤村の「破戒」を見ると信州では稻を刈つたまゝ、田の中で糶にして俵に詰めるといふことだが眞實かと私に問うた。私はその問を不思議がりつゝ、眞實ですとも、私等の郷里でも無論さうしますよと答へた。羨しいことだ、こちらではとてもそんな事は出来ない、稻を刈るとすぐ家に運んで、家の中で漸く俵にするのだと言ひながら、田には水が多いし、收穫と殆んど同時に雪が來るといふことなども話したのであつた。

『今の、雪の時節いつぱいは種々の用は大概此處でやるのです。』

其處に繋いであつた大きな犬の頭を撫でながら彼は附け加へた。

今度は勝手の他の上り口から土間に降りた。其處には田畑に使ふ器具など隅の方に置いてあつた。新しいのや舊いのや數多の雪沓ゆきぐつの吊してあるのをも見た。

その次の厩には二頭の馬が居た、その一頭は昨日私を大釋迦から五所川原町まで乗せて來た馬であつた。

『斯う屋根續きに厩のあるなども私等の方には無いことです。』

『斯うしないと第一馬が寒くて……それに飼ふのにも不便ですから。』

大雪が積つてツイ庭先の井戸までが埋れてしまひ、雪を煮て凌いだといふ話を數日前盛岡の菊池君から聞いてゐたので、成程さういふ事もあるであらうと思ひながら聞いてゐた。

加藤君は今度は庭に出た。そして一軒の小屋の入口に立ちながら、

『これがいつぞや手紙に書いてあけた堆肥たいひを作る所です、昨年中に造こしらへておいたのをばツイ先日すつかり田に運んでしまつて今は空虚からになつてゐます。』

先年、この地方一帯に大凶作であつた時、その荒れ果てた土地を恢復さすべく自分はいま何も思はず、たゞ専念に肥料を作つてゐるといふこの友の手紙は少なからず私の心を動かしたものであつたが、それが此處であつたのかと、私は思はず眼をそばだてた。

堆肥たいひの製法、更に燻炭くんとんの事など語り合つて、私共は漸く座敷に歸つた。

お茶の時であつた。加藤君は急に耳を澄まして何かを聴いてゐる様であつたが、立つて障子を細目にあけながら、

『違つてゐた。』

と笑つてゐる。

『何………?』

『啄木鳥つげかと思つたのです。』

この人が好んで啄木鳥を歌ふのを私は夙もとうから知つてゐた。居ないと知りつゝ、私も立つて障子をあげた。

『あの梨の木によく來るのですが……。』

大きな老木である。その隣にはトト松とかいふ常磐樹が立つてゐる。それらの庭も、遙かに見渡す平野もしいんとして唯だ白く光つてゐる。

71 やがて私共はそこから六七町を隔てたといふ和田山蘭君の留守宅にその父母君たちを訪ふべくうち連れて家を出た。またしても眼にうつる津輕平野、唯だ一枚のガラス板を置いた様な、味もそつけない津輕平野、諸所疎らに落葉樹が立つて居る。その落葉樹の蔭々にこれも極めて疎からに茅家かやが立つて居る。そしてそれが何處までもく際限なく續いて居る津輕平野、今はそれらが悉く眞白に埋れて

ゐる津輕平野、而していま我等の歩いてゐる松島村は實にその曠原の一部分を占めて居る寒村であるのである。

私は加藤君のあとからこつくと足を運ばせながらも四邊あたりを見渡して、斯んな寂しい村落にしかもずつと以前から東籬山蘭の兩君が打ち揃うて歌など作つてゐたといふことが、何だか不思議なことの様に思はれてならなかつた。

程なく此附近では珍しいもの、常磐木の四五本竝んでゐる家が見えた。不意に東籬君は、
「彼處です、山蘭の宅は。」

板留より

其の一

東京にて、越前君。

黒石は大吹雪、其處で松井君高田君に別れて唯だ獨り馬車に乗つた。幌で嚴重に包んである馬車の中へ、雪は煙の様に降り込んで来ていつか膝も袖も白くなる。程なく吹雪は止んだが、随分淋しい途だつた。山が次第に迫つて來るのを幌の隙間から覗いて、もうかくと心を躍らせてゐるのだがなかなか馬が走らない。漸う著いたかと吐息つくと、其處は温湯といふ處であつた。そのうちにまたちらちらと降つて來る、四邊あたりは暗くなる。

かなり長い橋が二つ續いた。双方とも眞白に積つてゐる上を幾度びか迂りさうにして辛くも渡り終ると正しくそれよと思はる、灯影と屋並とが坂の上に見えた。程なく馬車は停る。黙つて降り立つと激しい瀬の音が急に耳を襲つて來た。馬車屋について大きなくゞり戸を開けると中は眞暗だ。此方に

来いといふのに續いて長い土間らしい處を足さぐりに従つて行くと、また一ヶ所か二ヶ所かの戸をあけた。すると中には明るく灯が點つて焚火らしいものも見えた。折から夕飯らしい團欒の中から一人の男が立ち上つて來た。それが永い間話に聞いてゐた丹羽洋岳君であつた。

改めて二階の座敷に案内せられ、眞赤な山の様な爐の火に兩手をかざしてゐると、再び豪雨に似た瀬の音がひし／＼と耳に響いて來た。その夜の酒、その夜の談話、それは君の想像に一任した方がより多くしんみりしたものであらうと思ふ。

越前君。

然し、流石に勞れた。君に送られて上野驛を立つて以來二十有幾日、いま斯うして振返つてみると随分遙かな思ひがする。その間、夜となく晝となく僕を取巻いてゐるものに先づ酒があつた、煙草があつた、烈しい談話があり宴樂があつた。い、や、それよりも更に僕の身にこたへたものは人々のなさけである。僕は今度の旅に出てほど、斯うした愛、人情といふか人間味と云ふか、を感じたことはない。考へてみれば何だか空恐しいやうである。而して、いかにそれに酬ゆべきか、これも僕にとつては可なりな努力であらぬばならなかつた。

君も御存じの、丹羽君の下の荒瀬に臨んだ浴場、人氣ひとばの少いま、にいつまでもく其處の温泉に浸つてゐると、何とも云へぬ疲勞が出て、ほと／＼瞼さへよう開かぬ。そしてその疲勞は直ちにまた何

とも云へぬあまい悲哀に移つてゆく。四肢五體も解け失せて哀しい涙のみが獨り頬を流れてゐるのを感ずるやうな場合もある。

此處に著いたのが四月の五日、けふで三日になる。辭退してはあるのだが、毎朝丹羽君の細君が御飯の前にお酒を持つて來て呉れる。飲むまいと決心はしてゐても、ゆた／＼に爛燻に満ちてゐるのを眼に見ては如何しても抑へきれぬ。飲む、酔ふ。うと／＼としてゐるうちにいつのまにやら頭の上には電氣が來て點つてゐる。

實は丹羽君に頼んで暫く獨りで置いて貰つて其間に今度の旅の歌も纏めたし、紀行見たいなものを書いてみたいと思つてゐるのだが、此分では甚だ心もとない。また斯うも思ふよ、なまなか拙い歌など竝べずに靜かにぢいつと斯うしてゐるのが却つて俺の眞實の仕事ぢアないか知らと。(四月七日)

其の二

何彼と思ひ惑つてゐるうちに昨日もまた型のごとく暮れて了うた。夜は丹羽君と共に大いに酔ひ彼からヨサレ節とジョンカラ節との傳授を受けた。無器用極るお弟子を相手に、唯だ黙々と同じ唄を繰返し／＼唄つて聞かせるお師匠様を遙かに想像して呉給へ。瀬の音は相變らず高い。もう少し雪が消

えれば鱗が取れるのださうだが、惜しいことだ。昨日よく晴れて向ひの山の枯草が斑らに露れてゐたが今朝見ればまた眞白だ。僕等の唄つてゐる間にまたどさく降つたと見える。

今朝、例により一本聞き召して好い氣持になつてゐる所へ丹羽君の細君が来て何か言ふ。青森以來随分苦勞してみたが奥州女人の言葉は終に聞き取り難いものと斷念めた。兎に角階下まで一寸降りて呉れといふ意味に聞えたので、丹羽君でも呼んでる事と何氣なく階子段を降りると、其處には若い娘さんが顔を染めて立つてゐた。身なりも言葉も土地の人でないらしい。兄が東京で大變お世話になつたさうだから、折角こちらにおいでになつたのに此儘お歸しするの残念故お伺ひした、お邪魔では無からうかといふことである。僕も一寸狼狽へたが取り敢へず座敷へ案内した。

僕の『海の聲』の出た頃ださうだから舊い話には舊い話だが、いまその兄さんの名を告げられても急には思ひ出せない。念のためと思つたのだらう、妹さんはその人の寫眞を二枚持つて来て居られた。それを見て漸くその面影をば思ひ出したもの、まだ前後が判然しない。却つて自身の健忘性だの、酒精中毒だの斯うした言葉が獨りでに酔つた頭の中に繰返される。寫眞は東京と京城とで撮られたものである。

『で、兄さんは只今どちらです、朝鮮ですか。』

『い、え、朝鮮から臺灣の方へ參つて居りましたが、大正二年に病氣で別府へ来て其處で亡くなりました。』

た。』

是はまた意外であつた。そしてわざ／＼妹さんが僕を訪ねて來られた理由も漸く解つたと思つた。

それから種々と亡き人の事を訊いたのだが、妹さんにも餘り詳しくは解らなかつた。

『齡が十歳も違つてゐましたものですから……』

と羞まれる横顔が寫眞の人と似通つてゐるのも哀れであつた。これが多分兄の最後の作で御座いませうと、何商店かの野紙の裏に走り書きしてある一篇の短い詩をも示された。それには山鳩のことが歌つてあつた。

父も母も頻りに待つてゐるから、是非宅の方へ来て呉れといふことを言ひ置いて娘さんは歸つて行つた。その阿父さんは何をしてゐるんだかもまだ知らないが、近頃何處からか轉任して來たといふことである。山林官か何かと思ふ。その兄さんは外國語學校を、いまの娘さんは此春〇〇女學校を出たのだといふ。

斯んな家の十軒か二十軒かしかない雪に埋れた山奥に來て、斯ういふ話を聞かうとは全く思ひがけなかつた。いま娘さんを送り出して、斯うして机に向つて昨日の續きを君へ書かうと頭を纏めてゐるのだが、なんだかそんな事ばかり思ひ廻されて何ひとつ纏まらない。で、これも旅の挿話の一つよと

其の三

荒目な板壁の隙間から直ぐ眼下に真白な荒瀬の波が見ゆる。この原始的な浴場に多くは唯だ獨り、いつまでもく浸つて居る。額から汗が落ちる様になれば槽から上つてその板壁に身を倚する。時には裸體のまま、川原の石に手拭敷いてぼんやり波に見入る事もある。何彼と云つてるうちにもう奥州もすつかり春になつた。見給へ、麗かな日光のもとに光り沈んでる雪の嶺々の天に連つたその末が、いかばかり深々と霞んで居ることか。眼を落して石の蔭を見れば、小さな草がうす緑に芽ぐみ立つて居る。流れ去り流れ行く河瀬の行方にも、何やら哀しげな陽炎が燃えて居る。卵を生みに上つて來るといふ美しい鱒の姿も眼に見えさうだ。

今朝、青森五所川原から揃つて便りがあつた。みんな淋しいと云つて居る。僕も淋しい。別れて來た人たちの顔がそれくくと心の中から浮び出て來る。

越前君。

また筆が逸れつゝある。僕は今日青森の追懷を書かうと思ひ立つて居たのだ。

青森に著いた時は漸く來べき所に來著いたと云つた様な安心と慰藉とを感じた。が、市街には失望

した。如何いふ譯だか僕の頭には門司や馬關の聯想が以前からこの市街と結ばれてゐた、そして青森を歩きながらこれは市街といふより寧ろ大きな市場そのものだと思つたりした。いかにも東北線の終點驛で北海道への渡り口だとも思つた。が、港には驚いた。斯んな雄大な自然な港を僕は今まで見た事がない。いかに青森灣といふものを控へて居るにもせよ、港の天然、港の氣分、全く他と類を異にして居る。一々の叙景叙事をば止すが如何にも大口を開いて大海に——といふより大自然に向つてると云つた様な快さを覺えざるを得なかつた。青森の家屋はみな直角的若しくは直線的であると思つた。そのくせ、地上に尻が据つてゐない様な氣がした。風の吹く日が恐かつた。この地方の人々の風俗は總て僕にとつて珍しいものであつた。藤野君の二階から寒いのも忘れて一時間も二時間も僕は此等を眺めることを喜んだ。犬の皮をふかくと著てゐる人も通つた。蝸牛に短い脚を著けた様なものも通つた。これは婆さんが何かを背負つて賣り歩いてゐるのださうだ。女の老若は僅かに漏るる蹴出しの色で判断した。もつとも是は雪の日の眺望と知り給へ。女の顔は一帶に輪廓が明瞭してゐて、僕の好みにちかゝつた。女のもさうだらうが男の肌の白いのには驚いた。可哀相にお湯屋に行つて僕は明るみへよう出なかつた。(四月八日)

其の四

だんく／＼長くなる。

實は青森の印象は斯うした外界の風物より、其處で會つた個人々々の印象が僕には餘程深いのだ。今までの僕の旅は多く行く先々の山川風土に親しむ事であつたが、今度は全く異つてゐる。なるほど雪も山も海も、すべて僕にとつては最初の眺め、最初の驚きでないものは無かつた。が、それよりは更に人に親しまれた。お互ひ同士の人間といふものが、それ／＼の生活が、どれだけ興味深く僕の眼に映つたことだらう。これは全く偶然であつたかも知れない。四邊あたの寂しい自然がさうさせたのかも知れない。乃至は僕の年齢がさうさせたのかも知れない。

それは、種々な人に會つた。海の底の巖かけに動いてる貝の様な人、日あたりに咲いた雪白な桃の花のやうな人、平家蟹の甲良の裡に鶯ひばのやうな心を宿してゐる人、海鼠なまこのやうな人、二十日鼠のやうな人、自身の運命の、自身の生命の次第に自分から逃れて行きつゝ、あるのをちつと眺めてゐるやうな人、活動寫眞の悲劇から抜け出して來て雪の中に酔ひ倒れてゐる様な人、鼻の下の短くないらしい人、何にも知らない人、總てを知り悉くしてゐる様な人、漸く自分の生活の味を噛み出して來たらしい人、その他、あれこれ。

すべてが僕にはなつかしかつた。此等の人たちはいづれも極めて自然に僕に接して呉れた。僕は今

まで會つてこれほど自然な人々の仲間入をした事がない。僕は今度人間といふもの、難有さをしみじみと痛感した。

イヤ、斯ういふ風に言ふと、僕の眞實の心持とは何だか少し離れてものを言つてゐる様だ。要するに僕は唯だ嬉しかつた。

越前君。

二三日にして僕はこの可懐しい宿にも別れねばならぬ。一晚青森へ引返して、そして眞直ぐに東京に歸る。親しく君の舊知の消息を傳へるのもいま數日だ。和田君にも君からよろしく言つておいて呉れたまへ。左様なら。(四月九日)

板留温泉

入口に一枚の蓆が垂らしてある。夫をか、けて入ると直ぐそこに三疊敷程の湯槽ゆばねがあり一杯に無臭の温泉が湛へてゐる。荒目な板壁の隙間から直ぐ眼下に眞白な荒瀬の波が見える。

時には二三人も一緒に落ち合ふことがあるが殆んどいつも空いてゐる。たゞ獨りぼんやりと頭を湯槽の縁にもたせてゐると、川瀬と反対の方の窓の上には今にも落ちて來さうな絶壁たふはのしかり、それを傳ふ苔清水に日が光つてゐる。汗が額から落ちるやうになれば槽ふねから出て其板壁に身を倚せる。時には湯氣のたつ裸體のまゝ、川原に出て、手頃の石に手拭を敷き、温い日に照らされながら足もとの波に見入ることもある。

何彼と云つてゐるうちにもう奥州もすつかり春になつた。麗らかな日和が続いて、近所の山は次第に雪が解けそめた。遠い所はまだ眞白だが、それでもすつかり霞に閉ざされた。眼を落して石の陰を見れば小さな草がうす緑に芽ぐみ初めてゐる。流れ去り流れ出る川瀬の行方にも何やら薄い陽炎が燃えて居る。

川は岩木川のすつと水上みなかみ、一つの支流に當る淺瀬石川あせいしがはといふのである。その岸から殆んど直角に斷崖が聳ち、斷崖の直ぐ上が道路になつて川に向つた片側に二十軒ほどの温泉宿や其他の家が並んで居る。温泉は斷崖の中腹に二個所、直ぐ川原に沿うた斷崖の根に一個所、都合三個所に湧く。私の好んで入るのはその川原の湯である。宿の前の道路をいま五里ほど山の方に進めば十和田湖に出るといふ。夜はをり／＼やつて來るやうだが、もう十日ほど以前から流石季遅れの今年の雪も降りやんだ。遠くの山はみな眞白でも、手近の山々は日に／＼斑らになつてゆく。

四五日前、とりわけてよく晴れた暖い日があつた。宿の二階から見下す淺瀬石川の瀬が見る／＼うちに濁つて來た。同時に水量も増して來る。附近の山の雪がその日一時に解け始めたのである。日は麗らかに霞み渡つて、解け始めたとは云ふもの、川向ひの山肌はまだ眞白、その麓をこの濁水が變々まじまじとして流れ下る異観は、雪解の川といふものを初めて見た身にとつて非常になつかしいものであつた。斯んな時に鱒ますが盛んに遡のぼつて來るのだ相だ。

その日の午前はまだ無事であつた。午後二時頃、いつもの崖下の湯に行つて見ると、川瀬の飛沫が盛んに板壁に打ちつけて居る。裸體になつて湯槽に手を浸してみると、いつもより餘程ぬるい、そして濁つてゐる。よく見れば入口の反対の側から既に増水した瀬の水が浸入して來てゐる所だ。面白半分に入つてゐると、非常な勢ひで増してゐる川水は終に入口の方からも注ぎ入つて來た。覗いてみる

と壁越しの川原はもう立派な瀬となつて流れてゐる。私がまだ幼かつた頃、母と共に郷里からは隣國に當る豊後の別府に入湯に行つてゐたことがあつた。何といふ湯であつたか、子供の事で湯槽の中を泳いだりなどして夢中になつてゐると、上げ汐のためいつのまにかその湯槽が背後の大海と續き合ひになつたので大いに驚いた事があつた。そんな舊い記憶など思ひ起しながら、次第にぬるく濁つてゆく湯から這ひ上つて急いで著物を著た。蓆戸から出て見るともう二三の人が網を手にして岸邊の雑木の間などをあちこちしてゐる。鱒を取るのである。

それは四五日前のこと、四月の十六日と云ふ今日は、其川向ひの草山も半分近く黄色い枯草の肌を露はして來た。今朝もよく晴れた。起きて湯から上つて二階の縁から向うのまるくしい高山を仰いでゐると、その雪の消えた所だけに五六人の子供が居て、しきりに何やら探してゐる。訊いてみるとそれは片栗草の芽を摘んでゐるのだ相だ。昨夜さしあげた刺身のつまがそれで今年の初物でしたと宿の人は笑ひながらつけ加へた。葱でもなく、野蒜のびるでもなく、ほうれん草でもない、何であらうと非常にうまく喰べたのであつたが、あれが片栗といふものかと、私には生れて初めての深みどりの若草を心の中に思ひ起しながら、この風情ふうせいの變つた摘草の群が飽かずくうち仰がれた。

珍しい燕が川の上をまつて居る。明日か明後日、私はこの板留温泉を出て一應青森へ引き返し、それから福島の方に向ふ。(五、四、一六、板留温泉丹羽君方にて)

その後

其の一

青森市にて、木村さん、暫くおしやべりの對手になつて下さい。誰に宛て、もお禮やらお詫やら、無闇に言ひ廻らなければならぬ氣がして……その中でも何だか貴下あなたが一番言ひ易い氣がしますから。

こちらに歸り著きましたのが五月の朔日ついたち。明けて二日には妻子や義妹達いもつちを悉く遠國のその實家さとの方へ旅立たせて、たつた獨り居残りしました。ひとつは彼等に對して餘り永い間留守番をさせたお詫お禮のこゝろもち、ひとつには唯んだ獨り居残るといふことが非常に望ましかつたからです。實際、その時私は彼等と物語ることに苦しいほど疲れてゐました。

そして、獨りになつて、やれ嬉しやと思ふと同時に私は床についてしまひました。季候の急變から風邪を引いたのがもとで、ひどい發熱から延ひいて身體中の總ての機關からくりに狂ひの出た形です。斯ういふ

場合、曾つても遭遇したことがある顔面神経痛といふのが最も辛く、平常大自慢の胃腸すらすつかり駄目になつてゐたことを知りました。

それにそら、ホンの二三週間の豫定で出かけた旅行が、悠々として正に七十幾日を越したものですから、その間には實に種々雑多な用事が私を待つてゐました。おどくしながら待ち構へてゐた細君からこれは如何する。これをどうしますと、一々突きつけられた時には、流石に私もけつそりしました。薬嚢、水を湛へた洗面器、乃至は食器などの竝んでゐる間に混つて、此等蓄積せられた無情な辛辣なる而して皮肉な仕事どもは、晝夜間斷なく私の枕頭を壓迫してゐたのです。イヤ現にしてゐます。ただ枕頭が机邊と變つただけです。

でも、初め七八日間は何もかも夢中で唯だ空しく仰臥してゐました。幸ひ偶然にも東京から友人夫婦が私の方に移つて來ましたので、それに介抱して貰ひました。それから後です。寢床、便所、長火鉢、机、縁側などの間の室内旅行が行はれ始めましたのは。

自分ながら可哀相でもあり滑稽でもあり、時には獨りで泣き笑ひも致しました。御笑察下さい。

強ひて机に向つてはみましても、何しろ頭が頭なのですから何ひとつ出来はしません。通信教授の歌の詠草、及びその返送を促す催促狀、出版物の校正刷その催促狀、原稿の催促、乃至は返事を書かねばならぬ幾多の私信、それらをぼんやり眺め廻しながら頭の中では實に飛んでもない事を考へて居

るのです。あの時は面白かつた。あれはあゝするより斯うする方がよきはなかつたか知ら、あの人はいま如何してゐたらう、あの人の顔には面白い特長があつた。あの邊も既う雪が消えたに相違ない、どうも彼處に廻らなかつたのは残念だ、この次ぎ行くとすれば……などと全く埒のない空想やら追懷やらが、ぐたくゝになつた頭の中を駆け廻つてゐるのです。

ですが、斯う並べ立てるといかにも目下の私が大病人のやうに聞えはしませんか。さうではないのです。謂はゞ長途の疲れなのでせう、而かも御存じの通り可なり複雑した長途でしたから……語を換へていへば、猪食じしつた酬しいです。病氣といふは敢て當りません。

懲りずまにまたも食はなむみちのくのその猪
の味わすれかねつも

その二

秋田は梅、滞在一夜。福島は櫻、滞在四日。漸う明けそむる頃赤羽あたりを走つて來た福島からの夜汽車が愈々上野驛に著いて先づ眺め上げた上野山は全く青葉となつてゐました。

滞京三日、五月一日朝七時靈岸島から汽船に乗りました。小さな汽船が次第に東京灣の眞中あたり

に浮び出た頃、私は理由のない哀愁に囚はれて、殆んど靜座にも耐へられないのを感じました。永い旅を終へて家に歸る時、常に覚えがちのこの哀愁、これは或は貴下にもお覚えのある事のやうな心地もせられます。

その朝、初め曇つてゐましたが、やがて青空となりました。海は油のやうに重く、雲は動かす遠く水平線に群れてゐます。房總半島の低い山脈には、春でもない秋でもない、まつたく初夏特有の淡い霞がたなびいて、遠く岬の端の方にはをり／＼白浪が上ります。甲板の隅の物かけに人目を避けながら私は携へた酒の壺を抱へ込んで、また改めて遠い邊土の旅にでも出る様なさびしい心持で、この雲を仰ぎこの海を眺めました。眞實、このまゝ、この汽船が何處にも寄ることなしに、すん／＼沖遠く出て行つて呉れたらどんなにいゝだらうと思ひました。

汽笛が鳴り出しました。どうでも降りねばならぬ場所まで來たのです。正午近かつたでせう。黙々として解船に乗り、黙々としてそれから降りました。降り立つて砂の中に下駄を踏み込みますと、

『やア、旦那、暫くでしたネ。』

突然大きな聲で呼びかけられました。今朝來、初めて此處で口をきかねばならぬ破目になつたのです。

荷物を汽船場に預けて、道路を行くのを避けて私は濱邊を辿りました。子供たちが海を泳いでゐるま

す。私は改めて垢じみ切つた自分の縮入姿を顧みずには居られませんでした。

濱から一二丁折れ込んで畑の中から通らねばなりません。麥が私の乳のあたりまで伸びて、さらぬだに狭い徑を一層狭くしてゐます。私は白く閉つてしんとしてゐる障子の前に立ちました。そして先づ子供の名を呼びました。

障子は直ぐ開いて丸々した顔が表れました。そして直ぐ眞赤になつて引つ込みました。お話したかとも思ひますが、今年四歳の男の子です。

妹が飛んで來ました。洗濯でもしてゐましたか襦がけでした。そしてこれも直ぐ引き込んで衣服を著かへ始めました。妻は髪を結つてゐました。

兎にかく、がっかりして私は座に坐りました。いつの間に羞むことを覺えましたか、襖の蔭から覗いてゐて容易に子供は私の膝に來ませんでした。漸く馴れたのと種々戯れながらも、私の心の底には先刻の汽船以來の寂しい氣持がどうしても脱れませんでした。

その三

少し夏めいて來ると私は酒を冷して飲むのを愛します。その癖を知つてゐますので、程なく冷え切

つた一瓶とコップとが私の前に並べられました。久しくさういふ事から遠ざかつてゐた、めでせう、彼等姉妹自身さうすることを寧ろ歡ぶらしく見えました。

ちびく／＼やつてゐますと、開け放たれた障子の向う、やゝ色づきかけた麥畑の中を一人の女が重さうに一つの荷を擔いで來ました。先刻汽船場に預けて來たものなのです。それから部屋中が俄かに活氣だちました。

青森發の時、實に種々様々な土産物を頂きました。實を云ひますと、無事にこれだけの荷物を自宅まで持ち著け得る自信は私にはありませんでした。でも人々の厚意と、それ／＼珍しいものらしい品物とを見てゐますと、流石に途中で開いたりなどする元氣もなく、停車場ごとで大騒ぎをしながらも終にそつくりそのまゝを相州北下浦まで擔ぎ著けたわけなのです。これは誰から、これは斯ういふ人からと贈られた人の事をも言ひ添へて次ぎ／＼と並べますと、子供は無論のこと大人もまるで子供同様になつて喜び騒ぐのです。中に妻に宛てた津輕塗の硯箱や絲まき楊枝入れなど出て來ました時は、これは一つ私に下さい、いゝえ上げられませんが、折角の厚意を無にすることになるぢやありませんか、と姉と妹との爭論まで持ち上りました。飛行機も持ち度し、飴の饅にも手を著け度し、お菓子箱にも突貫したといふわけで、子供などは寧ろ途方に暮れてゐる形です。冷たいのを重ねながら眼前の光景を打眺めて、いかにも旅から歸つて來たといふ氣持を漸く覺えそめました。

その四

すつかり夏になりました。

昨日今日、空は磨き立てた鋼鐵のやうによく光り輝いて、永い間の降りや曇りにいゝ氣持に葉を伸してゐる樹木どもは、今日憐れにも萎れ返つてゐます。

大きくは呼吸もつけないやうなこの靜かな強い夏の日を私は愛します。身内の汗や膏が自然に排出せられていつ知らず清らかに瘦せて行くやうな、この夏の日を愛します。

ぢいつとこの輝いた空や日光や、萎れた木の葉や、またはをり／＼木の葉を渡つてゆく微風などに對してゐますと、次第々に腫が落ちて行つて、このまま永い眠りににでも沈みさうな快さを覺えます。蜂の群の唸り聲が遠くなり近くなりしてゐます。園の蜜柑の木からでせう。その花は大方もう散りましたが、まだ澤山の蜂がその葉かけに集つてゐます。

蜜柑のことを云ひますと林檎の花を思ひ起します。二三日前に來た板留の丹羽君からの葉書にその花の満開のこと、咽喉も裂けさうに啼くといふ閑古鳥のことなど書いて來ましたので、急に耐へ難い寂しさと昂奮とを覺えました。

延いては其處の友、青森の友、津輕の友だちのことをも事新しく思ひ起しました。旅から歸つた、とは云ひますもの、心はまだ落著くさきを知らずに、其處此處と彷徨ひ歩いてゐるのであります。

その五

私は黄金の波の打ち渡つてゐる稻田の原を見渡すよりも、其處の畑彼處の片岡に靜かに穂を垂れてゐる麥の秋を眺むることを好みます。何といふことなく親しみと柔みとを覺えます。

その麥も、もう刈られました。煙草を唇にしたま、ぶらりと戶外に出てみますと、其處此處にさくといふ鎌の音を聞いた二三日も過ぎて、附近の畑は哀れな姿となり、その肌の砂地を残りなく露あらはしました。

その砂畑の徑に足をよごしながら、私は殆んど毎日釣りに通ひます。いえ、海へ出るものではありません。岡や藪の蔭の小さな小川に行くのです。

たんだ獨り、糸を垂れてゐますと、四邊あたの木や竹には遍く日が射し風が流れて、をり／＼何やら鳥の啼く音、初夏の花の強い匂ひに出會ふほかは何ひとつ心を動かさるゝこともなく、全く無念無想の

幾時間かを費し得るのです。

私は一面跳ねたり踊つたりして騒ぎ廻るのを好むところもあり、また斯うして獨り靜かに一切のものから離れて心耳を澄ましてゐることを愛する心も有ります。そして、後者の方が確かに私の本質らしく思はれます。そしてその癖多くの場合、いろ／＼の習慣から前者の方面のみが表面に現はれて居る様です。たま／＼斯うして自然の本質に返つて自分の心を自由にして置き得る間はこの上もなく楽しいありがたい時なのです。

青森の海、岩木の峯、津輕平野の雪、相見た多くの人々、想ひ起しますと、彼等の前に私は餘りに燥然たる旅客でありました。いまにして實に云ふ様なき悔と羞恥とを感じます。

木村さん、私はいま一度、是非そちらへ参ります。もう今度は人にも土地にも馴染んでゐますから十分おちついて、思ふまゝに自分の心を働かせることが出来ると信じます。

斯う書いてゐますと、すぐ今にも飛び出し度い氣持になるから可笑しいぢアありませんか。もうそちらもすつかり夏めて來たことせう。輕快な青森五所川原の若人たちの時季となつたわけです。いよ／＼明るい彼等の顔が眼の前に浮びます。松島村の梨の花も程なく咲くことせう。板留の温泉宿の前をば、十和田へ越ゆる旅客がぼつ／＼通ることせう。

そして貴下は明るい瞳、暗い額ひたいであの宿直室に宵々麥酒の冷たいのを愛しておるでせう。をり

をりは柯芳和尚の圓い頭も其處に點出せらるゝこと、思ひます。

要するに夏は好い。光り輝いて、而かも何處か寂しい冷たさを包んだ夏、私は限りなく夏を愛します。いつも斯う情けてはるません。ぼつくと元氣にかへります。そして久しぶりに力いっぱいにつてみたい。

木村さん。今のところ他へは何處へも便りをせずにおきます。恐れ入りますが、あなたからよろしくお傳へおき下さいまし。では左様なら。(五、五、二〇)

北國紀行

秋田市にデッサン社といふ短歌の會がある。わが創作社の阿部たつを、帶屋久太郎、中村長二及び川越守固君等の主宰する所である。そのデッサン社が發企になつて、今度同市に同縣下の歌人大會を開く事になつたから出席して呉れないかといふ手紙を阿部君から貰つてゐた。かなりには仕事は溜つてゐるし、どうしようかと考へてゐるが、いざとなると矢張り諦めかねてとうとう出かけることになつた。八月二日の夜、折から來合せてゐた數日來上京中の平賀春郊君や、家族の者と共に山手線の電車で上野驛に行くと、やがて越前翠村君もやつて來、それらの人に見送られて、程なく發車した。午後九時の事である。晝すぎから平賀君と飲んでゐた酒の酔がそれと共に全身に廻つて、うとくしながら幾つかの停車場を越えた。折々窓から覗いて見ると、果しない平野には極めて薄い月光が流れてゐて、榛の木立か松の林か遠く近く見渡された。開き棄てた窓からは、時々細かい雨の降り込んで來るのを覺えた。車中は身動きも出來ぬこみやうである。

白河驛あたりで私の頭も漸く冴えて來た。午前三時の頃で、幾らか雲も薄らいだ見え、月光がは

つきり地に印してゐた。と共に風が出て、泉崎矢吹驛のあたり、汽車の響と共に線路に沿うた松林からは断えず烈しい音が聞えて来た。福島驛午前五時半、全く夜が明け放れた。酒辨當などを買ひ込んで板谷峠にかかるを待つ。程なく汽車はその山路にかゝつた。折も折、大粒の雨が一齊に落ちて来て、翠巒更に一層の鮮かさを加へ、うねり／＼登つてゆく山の左側には、遙か下に溪が白い泡を立て、るのである。對坐した一老人も同じく澤の鶴の塚を手から放たないでゐるが、いつか口をき、合ふやうになり、羽後の酒田の人とかで、いろ／＼その土地の話聞いた。絶頂の峠驛に着いた時、その次の大澤驛に故障が出来て二時間近くの停車となつた。が、私は場所が場所だけに一向不平を感じなかつた。雨の疎らに降つてゐる歩廊プラットホームをぶら／＼濡れながら歩いてゐると、車内の空氣と人々に濁り切つた頭が次第に澄んで来るのを覺えた。目に入る數軒の人家もその周圍の深い薄の原も、雑木の林も風も雨も、いづれもみな寂しい峠の宿場の風情を語つてゐる。今年の春、此處を越ゆる時はひどい吹雪であつた。まだ暮れもしないのに電燈をつけねばならぬ程で、その時も一寸立ち出で、みた此處の歩廊プラットホームも附近の人家も山も悉く眞白に閉されてゐたのであつた。やがて發車、大澤關根を過ぐると米澤の平野に出た。雨も晴れた。

新莊を過ぎて程なく汽車はまた高原らしい所に入つた。米澤より山形を経て新莊まで約三時間、其間は全くの平野で、遠く雲の蔭に山影を望む事が出来た。高原はやがて山となり、再び雨を見た。院

内驛より平野、こゝよりは秋田領に入るのださうである。大曲驛おほまきりに停車してゐた時の事である。丁度私の凭れてゐる窓の前で車掌を捉へて『この汽車に上野から乗つた人で若山といふ人がゐる筈であるが……』と訊いてゐる人がある。見知らぬ人ではあるが、思はずこちらからも聲をかけた。羽後日報社の廣瀬といふ人で、同じく明日の短歌會に出るのださうである。六時過ぎ漸く秋田に着いた。歩廊プラットホームには大勢の人が出てゐて呉れた。阿部君のほかはみな初對面で、川越帶屋中村の三君及び上杉翠峯深澤夏村の諸君であつた。強い雨の中を俾で或る旅館へ引き込まれた。高西旅館といふのである。早速湯殿で二十時間餘の車内の煤煙を洗ひ落して上つて來ると明るい部屋にはずつと膳が並んでゐた。話と盃と交々相飛んで、折からの強雨もなかく／＼にその興を助けて呉れた。餘程更けて食事が済むと、丁度雨も止んだ。少し散歩しようといふ事になり、従つて戶外に出た。雨後の冷氣が快く肌を刺して、仰けば天の河など見えさうな心地である。たゞの散歩と思つてゐると、程なく一行はとある大きな冠木門を潜つた。そして通された座敷からは、しと／＼に濡れ光つてゐる庭木の奥深く點せられた燈籠形の電燈が幾つも／＼見通されて、何だか夢の様な場面である。續いて我等の前には數個の綺羅びやかなる人たちが現れた。是なん露と共に土地名産の一に謳はる、所のものであるであらうと、思はず居すまるを正さざるを得なかつた。忽ち酒、忽ち絃、忽ち唄、それら花の様な人たちの間に立ち混つて、電燈の玉のやうになりながら跳び廻つてゐる中村君阿部君たちの姿が折々眼の前を走つたが、間

もなくそれも遠ざかつて自分は目出度くつづれてしまった。

翌日は不幸にも豪雨であつた。旅館から會場まで僅か一二町の所を行くに羽織も袴も忽ちに濡れ終つた。これでは來會者も如何あらうかと發企者たちの心を察してゐると、ぼつ／＼と集つて開會時間の十時には既に三十人に近く、やがて三十六人になつたさうである。會場は田中町の富貴見樓、廊下を繞つて悉く廣い菖蒲の池で、いまは青い實ばかりとはいへ棄て難い庭である。阿部君の開會の辭、次いで多年斯道の研究を積んで居らるゝといふ市の中學教師石田氏の「萬葉集に就いて」の講話があつた。その次に私に何か喋舌しゃべれといふ事になつた。元來私は斯ういふ場席で喋舌しゃべることの極めて拙劣なのを知つてゐるので、昨夜も特に阿部君にその事を約束しておいたのであつたが、愈々その場になると矢張りさうも行かぬ様な破目になり、短い談話をした。題を附ければ、「靈のある歌とない歌」とでもいふべき程のもの、案の如く云ふ事が後あとや前まへで不得要領極るものとなつた。改めて何か土地の新聞にでも書き改める積りで、程々に切り上げた。食事後、當日呼物の短冊交換が行はれ、朗吟や雜談で午後五時頃散會になつた。遠くは三四十里の所からなど出席した人もあつたとかでお互ひに初對面が多いらしくな／＼談話の進むのを見た。私には全部初めての人で唯だ僅かに秋田魁新聞の若松太平洞君のみを識つてゐた。數多の來會者の中に特に私の嬉しかつたのは縣下角館町から同じく三十里近くをやつて來た遠藤桂風君に逢ふを得た事であつた。同君とは手紙の上だけでは十年來の交友で私

がまだ學校にゐた頃からよく歌の批評などし合つたものである。私よりも數歳年長、よく和田山蘭君に似た人であつた。また能代港のしろ（こゝも三十里からあるのだ相だ）から來た人に越前北方君といふがあつた。此人は曾つて日露役の際樺太から朝鮮守備軍に従つてゐた事があり、その從軍中親しくした一人の小野八太郎といふがあつて、その小野といふのは日向國の私と同郷で而かも幼時極めて親しくしてゐた男なのでそれを通じてよく私の事を聞いてゐたのだ相である。その故に一度逢つて置き度く、忙しいのを棄て、出席したのだといふ。思はずも昔なつかしい話を聞いて私も非常に嬉しかつた。

會が果つると、有志十六七人によつて懇親會が開かるゝ事になつた。場所は志田屋とかいふ如何にも老舗らひせらしい大きな家である。前夜にもまさる美人連十名あまりが、四邊あたを取り巻いて飲め／＼といふ。豈飲まざる可けんや、大いに飲み且つ醉ふ。就中自分の隣に坐つてゐた遠藤桂風老が、突如として庄内名物おぼこ節を唄ひ出すに及んで、われ知らず立ち上つて手を拍つた、を最後として完全に我を忘れてしまつた。況してその夜は太平洞を初め、翠峯迷花など隨分豪の者が揃つてゐた様である。

確かに一度旅館に歸つたが、それから何處を如何どう來たのか、間もなく前と同じ様な光景の裡に自分を見出した。其處は自分の凭れてゐる欄干をも、ほとほと浸さんばかりにして河が流れてゐた。前日來の豪雨のため餘程増水したらしく、沿岸の柳といふ柳の枝を悉く洗ひ靡けて流れてゐた。前日曇つてはるたが翌六日は雨が上つてゐた。前と同じく人々に見送られて、午前十一時五十二分の汽

車で帶屋君と共に秋田を立つた。帶屋君は湯澤町の自宅に歸るのである。

横手驛で偶然昨日會場で別れたまゝ、の石田君が乗り合せた。一寸上京して來るといふのである。二時半、湯澤で帶屋君は下りて行つた。一緒に下車する様にと切りに勧められたが次回を期して別れた。院内を過ぎると山で、約束してゐもあつたかの様にまた雨が白々と降つて來た。険しい山で、而かもなかく樹が深い。その茂つた遠い山腹に靜かに雲の浮んでゐるのなど、疲れた眼には誠に親しみ深く眺められた。雨の降り込む窓を閉ぢもせず、石田君と萬葉の話をしながら峠を越した。峠を過ぎると長く續いた高原で、其處は一面の秋草である。雨は尙ほ止まず、斜めに降り注ぐなかに搖れそよいで咲いてゐる種々の花がいかにも可憐であつた。原を下つて平地に出ると、日の光がさして來た。四時二十六分、石田君と別れて新莊驛で乗換へた。最上川に沿うた酒田線によつて羽後の酒田港に向ふためである。

酒田行は實は私自身にも多少意外であつた。多年行き度いと思つてゐた處ではあつたが、愈々今日それを實行させたのは、今朝秋田の宿屋を立ちがけにデッサン社から贈られた汽車賃の豊富であつた事と、二三日來の雨で最上川の景色が嘸かしい、だらうと思はれた事とが、直接の原因となつたのであつた。古口驛あたりからその最上川が小さな汽車の窓に沿ふやうになつた。豫想通り水は岸に溢れて、その急な流れから直ぐ削つた様に木深い山が聳えてゐた。眞白な瀧も諸所に懸つてゐた。五月雨

を集めて速い最上川、今は五月雨ではないが、汪洋として而かもその流れの激しい所、いかにもこの古句の意に適つて見えた。兩岸の木の深いのが特に眼を惹いた。が、汽車の窓からでは駄目だ、一度是非舟で下るか岸に沿うて歩いてみたいものだと思はれた。狩川邊から峡谷は盡きて平原が開けた。萬頃ばんげんの青田の上、空いつばいに渦を卷いた雨の後の夕燒雲の末ほどに、炎々として太陽の所在が見える。とある長い橋を渡つた。折しもその夕陽は大河を縦に黄金の波を漲らしてゐたのである。その波の盡きる所、其處にわが酒田港があらねばならぬのだ。

酒田滞在二日、八日午前四時半河口を出る渡津丸に乗つて私は酒田を立つた。恐しい勢ひで海中に押し出した最上川の濁りは、大きく弧を描いて遠く北に去つてゐる。私どもの汽船はやがてその濁りに別れて西を指して進むのである。日よく晴れて、海は黒いほど碧い。甲板の物蔭に自分だけの席を作つて、小さく躑躅つづはなりながら私は飽く事なくこの碧い海に見入つた。ばたん／＼と舷側に打ちつける浪の音は、いかにもその日の風の冴えたのに適してゐる。天の一角には丁度いま別れて來た河口の濁りの様に、圓を作つてうろこ雲が白々と輝き散つてゐる。右手に近々と眺めらるゝ海岸一帯は多くは奇巖怪松の断崖が多く、間々長蛇の様な低い砂丘を見る事もある。要するに一直線で單調で、瀬戸や九州の海岸を見馴れてゐる眼には異様に感ぜられた。日漸く高く風の冴ゆると共に海は愈々碧澄んで

来た。私が宿屋で用意して来た折詰と白鹿はくじかの曇詰とむぎとを取り出す頃には、其處此處に例の船暈ふなよみの聲も聞えて来た。正午過ぎに薄鼠色に光りながら粟島が、やがて夕方近く落日の陰に輝きながら佐渡島が、右手の海上に見えて来た。午後六時半新潟著、小さな汽船は身體に似合はぬ烈しい汽笛を鳴らしながら信濃川の河口を溯つて行つた。

新潟一泊、一二度萬代橋を往復したのみで翌朝六時半發車、信濃に向つた。新潟から柏崎まで三時間ほどは真平らな青田の中で、柏崎から暫くの間昨日別れて来た碧い海に沿うた。鯨波青海川のあたり、實に綺麗な海岸で、海水浴らしい人も大勢見かけられた。斯んなにい、處と知つたら、一二日此處等で遊ぶ様に計畫して来たものをと汽車の窓につかまりながら、飽くまでも澄み透つて、さながら少女の髪か肌のやうな波や真砂を眺めて悔んだが既に及ばない。柿崎から黒井までの松林もまた好かつた。直江津高田を過ぎ、新井驛邊からこゝしい山路になつた。而も登るに従つて車窓の左に見事な溪谷を見下す様になつた。水は餘り豊かではないらしいが、溪が深々と切れてゐるのでいかにも山深く溪深く感ぜられた。雨を呼ぶらしい風が溪間に満ちて、白々とひるがへる葛の裏葉に否み難い秋の心が動いてゐる。

柏原驛あたりから坂は下りになつて、遙か遠く薄鼠色にうち煙つた空の下に大きな平野が見え出した。地圖に依るまでもなく、私は其處が信州長野の平であることを知つた。

南信紀行 (續北國紀行)

今朝新潟を出た信越線のその汽車をば長野で降りて、午後四時過同驛を立つ中央線に乗り換へるつもりでゐた。で、長野驛に著くと私は手提を提げてぶら／＼と大勢と一緒に改札口を出て、初めて長野市の一角を見た。私は南信といはず北信といはず信州をばかなりによく歩いてゐる癖に、その首府である長野市をば今日まで知らなかつた。従つて有名な善光寺さまをも知らなかつた。私の郷里ではお盆の十六日の朝、佛さまの供物を川へ持つて行つて流すのを常としてゐるが、その時ごとに母たちからお精霊様はこの御供物に乗つて信濃の善光寺へお歸りになるのだぞよとよく言ひ聞かせられてゐたので、子供心にも信州信濃の善光寺さまといふ印象はなか／＼に深かつた。其後東京に出る様になつてから歸省した折など、信州に行つたといへば必らず善光寺様へ詣つたかと尋ねられたものであつた。初めは正直にい、えと答へたがあまりに誰からも訊かれるので、とう／＼行つた／＼と嘘をついてゐたのであつた。

改札口を出ると直ぐ私は俾を呼んで、その善光寺様への往復を命じた。賑かながら極めて古びた狭

い街路は直ちに軽い登りになつた。木曾から遠く南信を貫いて續いて來た善光寺街道が即ち此處に辿りついでるので、昔ながらの舊態を存してゐるのだ相である。坂を殆んど登り盡さうとした時、先刻から催してゐた雷雨が終にやつて來た。しかも極めて急激に瀧落しのやうにやつて來たので、旋風に似た風も吹き立ち、俣など到底進めさうにない。ともすれば轉覆しさうである。車夫を止めて近くの氷屋にとび込んだが、なか／＼止みさうにないので、私は單身殆んどびしよ濡れになりながら山門を驅けぬけて大きな御堂の階段を登つて行つた。濛々たる香の煙が堂内をたて罩めて、立ち並んだ物々しい四邊（あたり）の佛具などさすがに敬虔の思ひをそゝる。禮拜を終へて振返ると、サテ恐しい雨である。高い軒から瀧の様に注ぎ落ちる雨滴の煙が堂内の煙と深さを競つて、ツイ隣家の屋根すらはつきりに見わけ難い。廻廊を一巡りしながら、丁度その側面の所からふと振仰ぐと、氣のつかなかつた山が急に背後から聳え立つてゐるのを見た。木深い山腹をば白々と雨が降り包んで、その峰越しに續けさまに紫電が閃いて來る。雨聲と雷音とこの異様な境地とは、私をしてともすれば一種の感興裡に導かうとするのであるが、汽車の時間もまた氣にかゝる。參詣か雨宿りかで堂内には幾十といふ人がゐた。私の側の一鬮の聲高に語り合ふのを聞いてゐると、この雨で長野近在には何十萬といふ金が落ちたと云ふ。聞けば四十日とか雨が無かつたのださうだ。なるほど汽車から見た田の多くはみな白く干割れて、桑や黍などの立枯になつてゐるのがよく目についたのであつた。私は俗にいふ雨男（あまをとこ）といふので、

私が旅に出さへすれば必ずのやうに雨が降る。現に今度も秋田に著いた夜から、其處でも三十幾日目とかの雨が降つた。長野に入ればこれである、などと心の中で苦笑してゐると、車夫が迎へに來た。烈しかつただけに晴れるも速く、停車場に著いた時は黄色い夕日が其處らに散つてゐた。やがて發車。人々のどよめくので氣がつくと、廣い／＼川中島の平野の空に大小二つの虹が重り合つて鮮かに浮き出てるたのである。なんだか久しぶりに珍しいものを見る様で、子供の様に嬉しかつたが、汽車が次第に姨捨の山に懸ると共にいつとなく消え去つた。山の高くなるに従つて今更ながら眺めらるるは此處の車中の景色である。いはゆる田毎の月を宿すといふ無數の青田に連つてやがて遠く長野平となり、其中心とも見るべき所に千曲川と犀川とが落ち合ひ、信濃川となつて汪洋と流れ行く彼方には、飯綱だか妙高だか或は黒姫か戸隠か、幾多の高山が雲表に聳え立つてゐるのである。私は此處を通る毎に肥後から大隅へ越す山上の大觀を思ひ出す。そしてその明と美とは遙かに此處に劣り、雄と大とは數段の上にあるのを思はざるを得ない。兎に角に汽車から見る此種の景色でこの二ヶ所に比すべきは日本では恐らく他にないと思ふ。姨捨驛を過ぎ冠木隧道を過ぐると、汽車はその大觀から離れて急に翠巒重疊の間に入る。この邊にも一降り來たらしく、山がみな濡れてゐる。虹がまた二つ、それら小さな山々の上に懸つてゐた。數年前泊つたことのある寂しい宿場麻績町には西日が薄くさしてゐた。六時十分西條驛著、黄昏の心細さのひし／＼と身に沁むのを覺えながらその山驛に降り立つと、直

ぐ眼前の改札口に笑み傾けてゐる小河原素山君を見た。泣く様な心持で私はその手を取つた。肩を並べて停車場を離れると、此處も寂しい宿場である。此處らで一休みして行かう、僕の家はまだ小一里からあると突然同君がいふ。土地産の青い林檎をむいて麥酒を飲みながら、兩人は多くまじく向ひ合つて坐つてゐるが、やがて三味を持つた女が入つて來た。その三味の音を聞きながら徒らに數本の瓶を倒して兩人共さ程に酔ひもしなかつた。まだ幾らか降つてゐるらしい夕闇の窓を通して仰がる、黒い山の姿が、ともしれば心を惹いてほどく、にその茶屋を立ち出でた。此處も今日は久しぶりの雨であつたが、同じことならもう少し降つて呉れたらよかつたと言ひながら、路々友はまだ全く濕り切らない田の土を指して見せたりした。白く見渡される乾いた河原にはをりく、螢が飛んでゐた。小さな星が空に見え出して、四邊をとり巻いた山のいたゞきの蔭は深い紺青の闇を湛へ、夜風の冷たいのがはつきりと身に解る。君、あんな所に灯が見えるぜといふと、随分高い山腹なんだが彼處にも村がある日向村といふのだといふ。日向村といへば二人ばかり其處にもわが創作社の社友がゐる筈だ。あんな所に住んでゐるのかなアと、遙かな灯影を仰ぎながらその人の歌の事など胸に浮んだりした。歩くのがいやな様になつて路傍にしがんだりすると、一面の蟲の聲が身を襲つて來る。まつたくの闇夜で山上の灯影も星も益々冴えて來た。

思ひがけない田の中の鐵道線路を越すと小さな宿場になつてその中程の所に友の家はあつた。彼と

は數年來の交りだがその家族とは初対面である。土地の小學校々長庵原君同じく教師でわが社友である伊藤君等來訪、深更まで酒であつた。翌朝朝食の後、兩人して近所の小山に登つた。秋になれば此處等に盛んに松茸が出るんだといふのを聞いたりすると、もう私の眼には鮮かな陰影を落した木の根がたに、その幻影がありくと見える様にも可懐しい。遠い故郷の山などが急に心をかすめて過ぐるのをも感じた。柴を折り敷いて兩人並んで寢轉びながら、參差として枝を交はした松の梢を仰ぎつ、ぼつ／＼と話を交す。煙草の煙さへ眞直ぐに立つ靜かな日で、土の匂ひがゆつたりと感ぜられる。昨夜見た灯は彼處だといふのを仰ぐと、成程遠い山の巖々に家らしいものが見えて居る。起き直つて、籠を見ると其處にも僅かの家が見えて、白々と一條の道が続いてゐる。それが善光寺街道なのださうである。昔はこの沿道の者は多く參詣人を相手に生活してゐるが今は多く百姓になつたといふ。友も農を家業としてゐるのである。午後は友の書棚から小泉八雲傳を引き出して讀み暮した。書棚にはいろいろ可懐しい書物が私などの十倍ほども詰つてゐる。夜、小學校の先生たちや寺の和尚など來訪、中にその日向村から降りて來た社友宮澤君もゐた。翌日も雑談と讀書と酒とで夕方近くまで其處で暮し、友と宮澤君とに送られてその坂北村を出で西條驛より乗車。一昨日其處で降りたと同じ時刻の汽車である。見返れば一昨日と同じ様にして改札口に立つてゐる友の姿が見えた。

七時十二分松本著、大名町の高山館といふのへ行つて、其處から二個所へ電話をかけた。一は蠶種

検査所なる中村柗花君へ、一は信濃民報社の市川杏果君へ、市川君先づ来り、續いて中村君来る。いづれもした、かに驚いてゐる。小河原君へは新潟から電報を打つておいたが、こちらへはまるで黙つてゐるからである。中村君は病氣だと聞いてゐるが案外に元氣である。程なく宿を出て或る旗亭に登つた。そして型の如く大小の藝者なるものなど呼ばれたが、殆んど三味など手に觸れしめず、三人だけ固まり合つて語り合つた。まつたく額と額をつき合せんばかりにしてゐる。とうとう終りには女どもが棄鉢になつて騒ぎ出した程であつた。久しく酒を斷つてゐたといふ中村君先づ大いに飲み、十日を越ゆる盛夏の旅行に勞れ果て、ほとほと生氣を失つたかに見えてゐた私も急に若返つて大いに飲み、若い市川君のつぶれたのをば棄て、置いて、更に二人だけ他の店へ移つて飲み始めた。さしも旺んであつた談話が盡きて、怪しげな唄や詩が嘯鳴られ出した頃は正に曉白んでゐるに相違ない。翌日はおあつらへむきの宿酔日和、細かな雨が降つてゐる。起きるとからまたちびちびと飲み始めて夕暮に及んだが今日は極めて順従しかつた。夜、社友西久美子さん初め四人の閨秀歌人來訪、酔に乗じて何か頻りに談じ立て、夜の更くるものも知らなかつた。翌朝九時半同市發、停車場まで中村市川兩君と共に行くと、其處には既に昨夜の令嬢たちが見えてゐた。

次の村井驛下車、俥を探して無く、子供を雇つて荷物を持たせ廣丘村に向つた。目的の家に著いて濃い生籬の門を入ると廣い庭には午前明るい日光が一杯にさして二三羽の鶏が遊んでゐるばかり殆

んど人氣がない。玄關で二三度聲をかけると廳で裏庭の方から百姓姿をした髻の濃い三十六七の軀幹長大な人が出て來た。義兄だナと思ひながら、私は若山ですといふと、おうと言つたぎり暫く顔を見詰めて居らるゝ。所へどうもよく似た聲だとは思つたけれど餘り意外だつたからといふ聞き馴れた聲が聞えたかと思ふと小走りに奥から眞赤になつた潮みどり子が飛んで來た。彼女は私の妻の妹である。妻と結婚して六年、私は未だにその生家を訪はなかつた。而して今日、しかも極めて突然に其處へ出かけて行つたのである。一家の驚きはもとよりの事で、實はふらりと出かけては行つたものゝ、其處の玄關に立つに及んで、流石に私自身異様の感にうたれざるを得なかつた。丁度養蠶期で疊のあけられた廣い座敷の隅に蘆を敷いて、極めて間の抜けた、而も極めて熱心な初對面の辭が交換せられた。折悪く舅と嫂とは揃つて病床について居られた。義兄にも姉にも義弟にも、甥にも、然し、どうも初對面の感がしなかつた。噂や寫眞で能く知つてゐるたからでもあらうが、六年の間には他を通じて自然とお互ひの心持が解り合つてゐるたからかも知れない。みどり子は妻が病氣の際、半年あまりも三浦の海岸に介抱に來てゐて呉れたので、この人だけが唯一の舊知であるのだ。

舊びた池や築山に向つて、人々とぼつくと話を交してゐると、私はいつのまにか今までに豫期しなかつた心の平安と慰藉とを感じざるを得なくなつて、此處がわが妻の生れた家である、この人がその母である、兄であると思ふと……イヤとり立て、さう思ふといふ程でなくとも、その間には既に

何とも言へぬ人間共通の親しみが湧いて来て、ちつとしてはるられない様にまで心の踴るのを感じるのであつた。

一寸の間もその會談の中にまじりたいとあせつてゐる感嘆女史(みどり子の異名)は殆んど三十分間おきに蠶室へ立たねばならぬのだ。或時私も其處へ隨いて入つてみた。殆んど初めて見るといつてもいゝ、位る私には珍しいこの黒色の小さな蟲はいま二眠とかから覺めた所なのだ相だ。女史の掌からこぼるゝ小さな青い葉の片が彼等の上に散るや否や、まるで夜降る雨の様な音を立て、さわさわと騒ぎ出す。それはくゝ何んとも云へないほど可愛いものですよ、これが、この小さなものが：：とそろそろ得意の感嘆が始まらうとする。見れば何式とかいふ最新の飼養法だとかで、四隣の障子は悉く密閉してあるのである。一心になつて桑をふつてゐる彼女の白い額にはこまかな汗が滲んでゐる。其處へ姑の發議で、丁度斯ういふ忙しい中で此儘此處ではあまりになんだから、がけの湯へでも案内したならばといふ事になり固辭したが容れられず、陽の漸く夕づく頃、義兄と共に家を出た。田の間を暫く行き、それから秋草と松林との續いてゐる軽い傾斜を一里半も登つて、密林中のその寂しい湯に著いた。温泉宿にも下座敷一杯に蠶が飼つてあつた。二階の一室に障子をあげ放つて物靜かな義兄と對酌してゐると、野分に似た山風が、林と家とを押し包んで、遠い夕燒空の下には白馬乗鞍其他日本アルプスの連山が頂きのみうす赤く染め出して聳えてゐるのが見える。

その夜は近頃になく熟睡した。そして翌朝、ふと眼がさめてみると凄じい風の音である。四邊の松林を吹き靡けてゐる風がまるで怒濤の様に聞えてゐる。私はてつきり暴風雨だと思つた。その風につれて烈しく降つてゐる雨の音が正しく聞えてゐる様に思つた。そして、恐々ながら床から出て、そうつと雨戸をあげて見てまた驚いた。透明な曙のいろは遙かの連山のうへに薄紫にたなびいて、雲ひとつ浮ばない大空には今し日の光がさしそめやうといふところである。附近の折り重つた松山の巖々にはまだ幾らか未明のかけが漂うて、たい白々と風がすすんでゐる。見てゐれば見てゐるほど秋である。秋の風である。

極めて獵の好きな義兄は、その時も空氣銃を携へてゐた。それを持つてその風の吹く松林の中で午前を過し、晝から歸路についた。その頃は風も風いで、今度こそ眞實空が雨氣づいて來た。其夜の夜行で歸るつもりだつたのだが、話が盡きず、舅も今日は起き出てその話に加はられたりして遅くまで語り更かして其處に泊つてしまつた。翌朝は微雨、みどり子に停車場まで送つて貰つて其處から汽車、不快な雨に降りこめられながら、隧道の多い甲州路を走つて夜九時歸宅した。十六日のことである。

秋田の會を濟ませたらば、歸りに飯坂あたりの温泉にでも一二泊して直ぐ歸る筈であつた旅が、さきからさきと飛んで完全に二週間も遊んでしまつた。夏の旅行で、多くはまた到る所酒せめにあひながらの事で、ことごとく疲れてしまつた。しかも東京のこの暑さは！

浴泉記

二月七日 雨後曇

午前四時半起床、お茶だけ飲んで家を出る。雨だと聞いてゐたのは、曇であつた。六時二十五分東京驛發、横濱で辨當。平塚あたりから薄い日がさして來た。僅かに切れた雲の間に箱根足柄の山が見え、みな眞白に雪を被つてゐる。國府津驛前の海が濁つた浪をあけてゐる。風が出たのだ。山北、御殿場、悉く積雪、富士は現に降つてゐるらしく黝暗な雲が一面に垂れ下つてゐる。十時何分沼津驛下車、直ちに俾にて狩野川の川口へ。ろくろ酒の温らぬうち汽船が出る。恐しく冷たい風で、江の浦内浦の眺望も富士の雪景もみな諦めて穴倉の様な船室に小さくなつてころがる。午後二時半、土肥著。この前來た時泊つた明治館といふへ行く。

海岸から四五丁奥まつた山際だ。土肥では大きな方で、湯も割に綺麗だ。この前は丁度正月の二日であつたといふ附近の金鑛を此頃新たに發掘に著手したとかするとかいふので其方の人達がつめかけて

ゐるのだ相だ。オヤ／＼と思ひながら突立つてゐると其處の内儀が、若し唯だ靜かなだけをよいにしで頂けるなら土藏の二階があいてゐるが如何でせうといふ。他を探すのもめんだうになつてゐた所なので、兎に角それを見せて貰ふ。土藏はずつと引き込んだ裏手に獨立して建てられて、二階といふのは十疊に四疊半の二室、疊もさつぱりしてゐて天井も立派だし且つそれほど低くない。窓が唯だ普通ですつかり四邊あたりと隔離した靜けさを持つてゐる。私は喜んだ、これは却つていゝ、不便な位は我慢する、第一隣室といふものが無いのが氣に入つたと私は其處に腰をすゑることに決心した。掃除をさせ、荷物を持つて來させ、湯からあがつて、サテ其處に置いてある椅子に凭ると眞赤な夕日が遙かの海上にいま落ちてゆく所であつた。海岸の松原が墨の様だ。心配してゐた程でなく夜はよく睡れた。しかも十二三時間あまり。

二月八日 晴

何といふ事なく、身體の疲れてゐるのに氣がつく。朝、鼻をかむと血が混つてゐる。のぼせてゐるのだと思ふ。湯は熱くなくぬるくなく、いゝ加減である。葉書を三四枚書いたまゝ、持つて來た『白痴』を讀んで暮す。夜またよく睡る。まったくこの室は靜かだ。少し氣味の悪い位。

二月九日 快晴

今朝また少し鼻血。あまりいゝ天氣なので海岸に出てみる。来る時汽船から見ておいた港の向う側の斷崖の方へ廻つて、危い〜と思ひながらたうとう下まで岩傳ひに這ひ降り、日あたりの岩の窪に坐つて一時間あまりを過す。眞蒼に湛へた岩と岩との間の狭い入江にはけふは浪といふ浪もない。たぽーんざぶーり、ざぶざぶといふけだるい音がすぐ脚下の岩の蔭に續いてゐて、よく見れば蒼い底には木の葉の様な小魚が列を作つて泳いでゐる。折々立ち上つて沖の方を見るといつぱいの光で、舟も帆も見えない。何處を通つてゐるのか石油發動船の音が遠くなり近くなりしてものがなく聞えてゐる。海越しの駿河路一帯の山には雪が輝いて、海岸沿ひに淡く霞がなびいてゐる。手帳の中に葉書が三枚入つてゐたのを見附けて友人へ書く。夢の世界の様な靜かな一時間であつた。

少し風邪氣味なので寧ろ抵抗療法になるかと思ひ幾度も入浴する。結果はいいやうである。散文集『海より山より』の原稿の一部を整理する。

二月十日 雨後曇

朝來微雨、昨日の續きの机に向ふ。私は二つの窓のうち東北に開いてゐる方の側に机を置いてゐる

のだが、直ぐ下は葱と大根の野菜畑でそのさきに二側^{ふたがは}だけの人家が並び、その向うは山となつて樟其他常磐樹の茂つた鎮守の森が少し見え、その他は蜜柑畑と杉と雑木の山とが全面に見えるやうになつてゐる。杉も雑木も斯うして微かな雨の煙つてゐるところはまるで春である。やがて晝かけて豪雨となる。郵便初めて来る。葉書二、雑誌一、雑誌は二月號の『創作』である。大變に遅刊したのを出来るまで待ちもせず、こちらへ出かけて来たのであつたが、印刷所で無斷で紙質を落したりなどしてゐるいかにも見すばらしい。いかに體裁に構はぬ雑誌だとは云ひながら、これではあんまりだなど、眺めらるゝ。

雨が漸く小降になつた頃、女中が惶しく馳け上つて来て來客だといふ。驚いてゐると眞赤な顔をして松井白花君が上つて來た。昨夜お葉書を拜見したら耐らなくなつてやつて來ましたと言ふ。何しろ意外なので手をとりながらも尙ほ不思議な氣がしてゐる。出て三四日にしかならないのだが東京の噂など早やなつかしい。夕方大いに馳走をとり寄せて遠來の友を犒ふ。晩酌は每晚二合づゝときめておいたのだが、斯ういふ相棒を得ては我慢が出來ない。土藏の二階、今夜大いに賑ふ。

二月十一日 曇

重づめをこさへて貰ひ、酒の壘をさけて二人して海岸に出かける。曇つてゐるのが難だが松井君も

勤めの身で今日の午後の船でまた歸らねばならぬので、晴れる事もあらうかと、覺束なく空を眺めながら出かける。一昨日行つた荒磯へ行つたのだが、その日と違ひ、風はひどく、目は照らす、寒くていけない。やがて大きな洞窟を見附け、附近から山のように燃料を集め、どん／＼と火を焚きながら二人それ／＼席を作る。洞の事で風はなし、次第に火が大きくなると少し過ぎる位暖くなつて来た。火の傍に並べておくと堰は自らに爛を作る。一昨日と違つた凄じい浪の音が洞の前後を圍んで物々しく打ち上げるのだが、飛沫一つ飛んでは来ず、僅かに此處から出て行く煙の間に眞白なその穂さきや松の青い枝が見えるだけだ。徐ろに盃を擧げ、重箱を開いた。斯ういふ事に經驗のない松井君は悉く嬉しくなつて、ともすれば躍り出さむとするのだが、洞もそれほど大きくない。アハ、アハ、とたい／＼喜びながら傾くる。斯うなれば雨が来ても雪が来てももう驚かない。洞中宴樂約三時間、流石に腰と尻とが痛くなつた。

一度宿に歸り更に汽船發著所に行く。規定より二時間ほども待つたれど船来らず、諦めてまた宿屋へ引き上げた。

夜、また長い酒。どうした調子か戀愛談出づ。僕曰く、

『君たちはたゞもう惚れて貰ひ度い一方だらうネ。』

『い、え、さうでもありませんが、まア、さうですネ。』

『僕なんかはどうも頻りと惚れたくて耐らないよ、どうかして惚れて見たいと藻掻くのだが……』
など。

二月十二日 半晴半曇

朝六時船来る。松井君はそれで立つた。もと通り獨りの寂しい部屋となつてまた机に向ふ。夜は何も見ないでなるだけ澤山睡る事にしてゐる。

二月十三日 曇

鑛山の連中が出て行つてしまふのが大抵朝の七時だ。それから湯槽が靜かになる。一人でゆつたりと手足を伸して浸られる、湯も澄んで来る。今朝もしみじみさう思ふ、斯うして湯に浸りながらもどうしたものか自分の心は始終そはそはしてゐる、斷えず何かを追つ立てられてゐる様だ。此處に来て丁度けふで七日だ。まだ一日だとして眞實に温泉に来て浸つてゐるといふ様な氣がしない。解き放して心や身體を遊ばせるといふ事がない。一生これだとすると、これからの事が随分と思ひやられる。あれやこれや考へて行くといつか眼さきが寒くなる。金でもあつたらなアと、またさもしい事を思ひ出す。急いで湯から出て机に向ふ。底寒い一日。

二月十四日 晴後微雨

いつの間にか湯槽での顔馴染が出来て来る。昨今この宿では鑛山の人たちを除いたらあとは可笑しい位の老人連ばかり揃つてゐる。不便で、暖い土地だからだらう。病氣と見えるのが一人、あと三四人はみな達者な爺さんたちだ。七日に初めてこの宿に來た時、船で知り合ひになつて一緒に連れ立つて來た一人の老人があつた。老人といつてもまだ六十歳位でその人自身の話す所によると殆んど年中斯うして諸國を廻つて歩いて有名な神社佛閣があれば其處へ參詣するのださうである。なるほど携へてゐる二冊の和綴の帳面には一杯に神社やお寺の印形が捺してある。この人とはほんの一時間位るしか(満員といふので、その夜は危く私と土藏に合宿をする所であつたのだ)顔を合せてはゐなかつたが、何かの話のついでにしみじくした調子になつて『どうも老人とじやうといふものは家にゐるものではないが、何かに養子といふものは面倒なものでしてなア、縁あつて親となり子となつたのですからわけ距てなどする積りでは無いのですけれど、矢張りなア、向うではつけつけ言つて貰ふ方がいゝのでせうがどうも左様ゆかぬものでして、なるだけこちらでは言葉に出さずにそぶりで何かを知らせやうとする、向うではそれが解つたやうな解らぬやうな風になつてその間に自然双方の心に距てが出来まして……』といふ様な事を言つて、『どうも私は子に運のない方として長男は中學でなくなり、次男

は丁度大學を出るといふ年に死にましてな、あとはあつて要もない女の子ばかり二人残つて居ります』などとも言つた。始終斯うして歩いてゐるせうだらう、顔の色は眞黒だが極く柔和な上品な人で天神髻をたてゝゐた。翌朝その部屋を訪ねて行かうとするともう先刻六時の船で立つてしまつた相だ。紙きれに處と名を書いて私にとて残してあつた。東京の川崎在の人ださうである。いま泊つていはゆる湯治をしてゐる老人連もよしあしに係らず、矢張り自宅にゐなくて、乃至はゐたくない人たちらしい。とにかく斯うした自由のきく人は先づ幸福な人たちと見ねばなるまい。その中で右の川崎の老人などは健氣けんきな方で、さうでないのがごろ／＼斯んな所で湯に浸つてゐるのであらう。中には一人二十歳前後のあやしい美人を携帶してゐる老人もある、此等はさしづめ不良の組であらう。中の一人に淺草橋とかに店を持つてゐるといふ中田さんといふのが一番お喋舌しゃべりで、いつか私をも話仲間に入れてしまつた。そして今日晝過にひよつこり土藏に上つて來て、『よくこれで窒息しませんナ』など、やつてゐるが、たうとう彼に引つ張り出されて山の方に散歩に出た。到るところ梅が眞盛りだ。眞白になつて流れてゐる溪間に誰の所有だか、まつたくの野梅だか、白々と咲き傾いてゐるのなどを見ると矢張りすがたい花だと思ふ。これらから見れば東京の公園あたりの梅はまるで紙屑だ。伊香保では斯うの鹽原ではどうの、會津東山では百圓札を何枚どうしたのといふ風の中田さんの話をきながら随分奥まで登つた。溪が小さくなつて岩から岩を傳ひ、小さな瀧のやうになつて流れてゐた。

談話はまつたく都會人に限る。かなり念の入つた斯うした話でも彼の話してゐるのを聞いてゐるとそれほど不快でない、そして、ツイよくくの所まで聞かせられてしまふ。例の金山事務所の仕事であらう、登る路すがら幾ところも新しい穴の掘りあけられてあるのを見た。山こそい、災難だと思ふ。午後、微雨。湯槽の中でそのみちのものらしい或る男の話すのを聞いてゐると、普通百貫目の鑽石から一匁の金が得られ、ばい、としてあるもののださうだ。百貫目々々と、その容積を空に描いて、サテ僕のペンさきの金は幾匁あるのだらうなど、考へた。

二月十五日 曇

朝五時前起床、湯から出て暫く附近を散歩した。雨氣だつてはるるが、非常に長閑な朝で、近來にない好い氣持になつて宿に歸つた。歌も久しぶりに三つほど出來た。今日こそ一つうんと仕事をしようといふ力んで歸つてきた矢先を無知な横著な女中どものためにすつかり痾癢を起させられ、終に一日滅茶々となる。直ぐ轉宿しようと思へたが室内に散らばつてゐる荷物を片づけるのがイヤさにそれも思ひとまる。

二月十六日 曇雨折々雪

朝、寒さが際立つて感ぜられたが海岸の松原に散歩に出る。さ程大きな松原ではないが、一帯が老木で木蔭の荒々しい石原には落葉が一杯に積つてゐる。前面の海は山の蔭になつてゐるのであくどいほど黝すみ渡り、山の上から沖にかけては雨か雪かを含んだ密雲がすうつと遠く崩れてゐる。漸く山を越えた朝日の光がこの邊にそゞころ、松原に音をたて、雲が降つて來た。午前は机。午後、二三度馴染になつた按摩の家へ出かけて肩を揉ます。若いくせに彼はなかなかよく語る。沼津に大錦組の角力が來るさうだ。歸りはひどい風で雪が烈しく顔を打つ。夜よく眠れず。

二月十七日 晴

六時起床、戸をあけてみると薄墨を流した空だ。オヤ／＼と思ひながら長湯をしてゐる間に次第に明るみ、日がさして來た。今朝は溪奥へ行く。するぶん寒い。附近の高い山(といつても大抵草山)には斑らに雲が積んでゐる。梅がまた眼につく。單に薪か炭にするのみだと思つてゐた雜木山に、椎茸山も混つてゐた事に氣がつく。自分の郷里でやるのと同じやりかたらしい。さうした雜木の最近伐り拂はれた後の明るい傾斜に樟が黒々と目立つて散在してゐる。それに蜜柑山と枇杷山と竹の林と赤みが、つた小さな杉山と、これらがみな附近の小さな山から山を占めてゐる。よく手の入れられた斯うした山や溪の間にはまた自ら別種の風景が出來てゐるのを思ふ。とある溪端に樟腦を焚く小屋があつ

て、青い微かな煙と共に芳烈なその匂ひが流れてゐた。これも郷里を思ひ出させる一つである。溪ばたの路をば鑛山通ひの荷駄馬が折々通つてゐる。

午後、全く晴る。郵便出しかたぐ海岸の方に行くと、例の按摩に會つた。遠眼はきかないが近くなら人の顔が解るらしい。『旦那、二階が空いてるさうですよ』といふ。昨日療治のついでに何處かの海岸に閑静な宿はないかと訊くともなしに訊いたのであつたが、心當りがあるから私が行つてきいて見ませうと言つてゐたのだ。そして彼に連れられてその宿を見に行く。宿屋の格は現在のより二段落つるが、家人が至つて親切だといふのである。二階に上ると二つ三つの屋根と密柑枇杷松の木立などを透して直ぐ前に海が見ゆる。日が廊下に一杯に當つてゐる。隣室に學生らしい客がゐる。とにかく現在のところがいやになつてゐた際とて、按摩の厚意を無にするも氣の毒で兎に角此處にしようといふ事になつた。どうせ何處へ行つてもさういゝ氣持にはなれはしまい、などと思ひながら川の土堤をぶらぶらと歩いて宿へ歸る。久しぶりに明るい日光が水にも石にも芝生にも照つてゐた。イヤイヤながら荷物を片づける。

夕方轉宿、吉村屋といふのだ。ひどい風で、濤聲またこれに伴ふ。晩酌一本追加、直ぐ床に入る。折々眼がさめると風と濤とは次第にひどくなつて來る様子だ。割に安眠。

二月十八日 晴 大風

五時半起床、湯に入る。先の宿のより餘程ぬるし、此處で湧くのでなく他から引いて來るため。濱に出て氣がついた。昨夜の風はあとかたもない。空もきれいに晴れて、浪ばかりが目ざましく寄せてゐる。背後に山を負つてゐるので此處にも海にもまだ日がささず、遙かの駿河路に、それも海岸よりずつと奥寄りの方の高山に先づほんのりと射すのが見えた。やがて次から次と移つて前面一帯の海岸を染め、終に海に及んだ。半島らしく見ゆるその尖端は御前崎か知らと思ふ。さうすればその燈臺守は私の知つてゐる人である筈である。代赭色をした冬枯の山から山が薄く染つてゐるのは靜かなものだ。奥まつた高い一帯には雪が斑らに輝いてゐる。細く延びた岬からずつと沖にかけてはいかにも昨夜の風の名残らしい影を留めた密雲が低く凝つてゐて、同じく日光に染められてゐる。そのものしい雲の姿は、今日もまた風かと眩かすにはゐられないほどだ。日漸く高く、山から岬、岬から洋上の雲に漂つてゐた茜色が次第に白茶けて來ると、海の色は急に變つた。鮮かな藍となつた。そして前面に泡だつてゐる浪がしらがきらきらと光り出した。藍は沖になるだけ深く、浪打際から二三丁が間の浪は悉く薄い濁りを帯びて立つてゐる。

やがて、案の如く風起る。随分ひどい。朝食後、數日ぶりのこの日光がうれしく、風を冒してまた散歩に出る。漁夫共が集つて船をずつと陸の方へ引き上げてゐる。折角ひろけて乾した大きな網の上

へは怒濤の飛沫が雨のやうに飛んでゐる。辨天島の魚見といふへゆく。此處は土肥の港(入江か)を作つてゐる崎の一つの斷崖の上で、其處から沖を見張つてゐては、ソレ鰯が來た鰹が來たと合圖をする所なのださうである。其處に登れば駿河灣一面から外洋まで随分と眼界がひらけて來る。頂上は雜木林でその下の斷崖には老松が枝を張つてゐる。その松の枝を透かして眞下の荒磯に打ち寄する怒濤がよく見える。それもしつかりと木につかまつてからでなくては恐くて覗かれぬが、ましてけふはこの風だ。冷たさに慄へながら自ら肌には汗の浸むのを覺ゆる。案の如く海は廣大な藍甕となり果て、そして一面が渦まいてゐる。濱からは見えなかつた對岸の高い山も見えて、それらがみな白雪、惜しいことに一つの草山に遮られて富士だけは見えない。ともすれば吹き飛ばされさうで、永くはさうしてゐられない。早速飛びのいて附近のだから坂になつてゐる草原に逃げて來た。其處はまた嘘のやうに風から離れてゐて、日がほく／＼と照つてゐる。静岡縣といふ木標が幾つも立て、あるのを見れば縣有林とでもなつてゐるらしく、大抵は櫟の木だ。海から吹き上ぐる風はみなこの傾斜の向側から中空へ突き抜けて、たゞ音ばかり凄じい。落葉した櫟の枝から枝には眼白鳥が頻りに移つてゐて、やがて二羽となり三羽となつた。坂のすつと下には白梅が二三本咲いてゐるのが見える、いかにもそれがこれらの枯木の枝を透かして見るとほんのりと浮び出てゐる様だ。あ、靜かだ!と思ふともう私の心は何やら騒ぎ立つて來た。どうしてもちつと坐つてゐる事が出來ぬ。騒がしい場所に在れば在るで、

斯うした靜かな場所に來れば來るで、何彼と常に私の心は波立つ事をやめぬ。呪はしきこの心よ!
宿に歸ると海に面した側の雨戸がみぢめられてあつた。湯に浸つてゐると頭のしんが微かに痛む。風に疲れたものらしい。床を延べて寢る。家がめりめりと絶えず音をたてゝゐる。寢ながらいろいろ一身の事を思ふ。

二月十九日 快晴

薄暗いうちにたゞ獨り湯槽に浸りながら久しい間耳を澄しても風の音がせぬ。曇つたのだらうと思ひ込んで、サテ湯から出て仰いで見ると晴れてゐた。まだ日の影は匂はないが、確かに靜かに晴れてゐる。濱に出てみると、浪もひたりと風いでゐる。やがて日がさして來た。何といふ麗らかなそのいろよ!

朝食後また濱に出てゐると、大勢の漁師が濱深く船を引き上げたあたりに群つて何か呼び合ひながら働いてゐる。荒れた後の海邊には、まつたく何とも云へぬ新鮮さが滴り溢れてゐるものである。其處へ一艘、すぐ續いてまた二艘、發動船が音高く入り込んで來た。一艘からは何やら商品らしい雜貨の荷上げが始り、他の二艘には早速炭の積み込みが始められた。次第に乾いてゆく濱の上には忽ち一杯に大小の網が乾し並べられた。新鮮と活氣と、そしてそれらを押し包んだ靜寂とが濱にも海にも今

はまつたく満ち渡つた。

うつとりとそれに見惚れてゐると、不圖側に来て匂やかに笑ふ女があつた。明治館の湯槽での馴染の一人、女優と名乗つてゐたハイカラさんである。昨夜急に電報が来て今朝の汽船で東京に歸るのだといふ。ところが今朝の六時に來べき沼津行一番の汽船が昨日の風のためか斯う八時過ぎてもまだ來ないので困つてゐるのだ。では暫く僕の宿で休んでゐたらいい、だらうと汽船宿にさう言つて連れ立つて歸る。何の用だと訊くとよく分らぬが今度自分の出る舞臺がきまつたらしい。多分淺草の××座だらうと思ふと言つてゐる。七歳の時から舞臺に出たのださうで、田舎巡りをして歩いた時の追懐談など面白く聞く。十時過ぎてまた濱に出てみる。まだ汽船の影もなし。砂の上に坐つて聞くとともになしに聞いてゐると同じく汽船を待ちあぐんでゐた四五人の人達がいつそこれは汽船を待つよりこの積荷の終るのを待つて發動船に便乗して行かう、此頃の汽船は馬鹿に石炭を儉約するので速力から云つても一時間はこちらの方が速い、たゞ少し寒いばかりだ、といふ様な話である。危ぶむ彼女に勧めて同じく左様する事にさせる。ところがまたその木炭を積むことゝ、一時間、一時間半、十二時近くなつてもまだ出さぬ。幸に風もたいしたことなく日は益々よく照つてゐた。二人して焚火などして遊ぶ。附近で目立つ斯うした若い女と並んで永い間坐つてゐるので注意がみなこちらに向いてゐる。中にも沼津か静岡あたりの店員と見える三人連の小僧どもは辛抱強く先刻から何彼と野次り續けてゐる。先

刻宿屋でもさう思つたのだが、丁度其處の部屋の具合も神田か牛込あたりの下宿屋そつくりだし、また斯うしてゐる所など、まるで十年前の書生時代に返つた様で苦笑おのづから禁じ難い。漸く出船、先づ小さな傳馬に乗つてそれから本船の炭俵の上に移る、危なつかしいその姿を眺めてゐると流石に氣の毒になつた。もう少し僕に元氣があると此儘沼津まで送つて行つてやるのだがなア。

宿に歸ると郵便が澤山來てゐる、野菊、柊花、山蘭、留守宅などから。小包も一つ、それは浦君から葉巻を送つて呉れたのだ。飛び立つてよろこぶ。手紙もみなしみじみしたもの、みであつた。斯うしてみると各自がみなそれ〴〵自己の道を靜かに踏みしめて歩いてゐるのが鮮かに見える様で、云ふ様なく可懐しい。妻からののはことに嬉しかつた。この前私から、持つて來た仕事が少しも出來ぬと愚痴を言つてやつたのに對して、それはわたしの方ではおいでになる前からさう思つてゐた、到底現在ではそれは無理なのだからそんな事は頭に置かないで唯だ普通の湯治だと思ひ専心に身體に注意をする様に、といふのである。これを讀んで急に私は活氣づいたのを感じた。感謝すべき今日の郵便よ！

ずつと夕方まで晴れ、且つ風いでゐた。數日來にない今日はよき日であつた。夜、珍しく遅くまで起きてゐた。

二月二十日 晴 風

元來此處の温泉は痔、胃、りつちす 癩麻質斯、貧血症其他にい、といふのだから私などには最もお誂へ向きなのだ。上にあげた諸病、一として心當りのないものはないのである。幾らかは利いて呉れるかなア、と廣い湯槽に獨り葉巻をくはへてガラス戸ごしに戶外の風と日光とを仰ぎながら浸つてゐる。氣のせるか腕から胸のあたり、少し太つた様だ。體温と幾らも違はない位の温度だが、たいへんよく温まる湯である。それに、入る人の少いせるか手入がい、ためか、前の宿のより餘程きれいだ。

けふもまた風が出た。汽船の來ぬのがさびしい。陸からも來るには來る様だが大抵の郵便はこの汽船便によるので、ぼうつといふ港口の汽笛を聞くと直ぐ郵便を聯想するのが毎日なのだ。陸から來たと見え、正午一便來る。神澤理一君から救世軍の「ときの聲」健康號といふのを送つて來た。全紙過半酒毒の記事である。おもふに私が温泉に行つたと聞いて必ずこれはいつもの飲み過ぎの結果だらうと合點して特に同君はこれを送つてくれたのだらう。初めから終りまで一行残らず精讀する。なるほど淺間しい話ばかりである。が、どうもまだ私には對岸の火としか思へない、自分の世界にはないことの様には思はれてならぬ。とにかく過去の或る時代が私のは悪かつたのだ。雨戸は終日締め切れ、風の音濤の聲が家を揺つてゐる。よく聽けば風の音のなかには松の聲がよほど混つてゐる、枯木の鳴るのも聽える。斯うして耳を澄ましてゐると却つて机邊はいつもより靜かなやうだ。一回も外出せず。口もきかず。風をき、ながらけふは晝酌。

二月二十一日 快晴

一日ごしに風ぐ様だ。けふはかなしいほど靜かな日。對岸の山がほの白く霞のうちにかやいて、絲のやうになつた岬のあたりは殆んど沖のひかりに消されてゐる。辨天崎の磯に行つてみる。うしろに物々しい絶壁を負つて、思つたより荒い磯だ。日あたりの小さな洞に石地藏の様に坐つて永い時を過ごす。累積した大きな岩から岩の下を潜つて鳴りどよんでゐる單調な浪の音がやがては重苦しい哀感をそ、つて來る。我とわが身を怖る、やうな氣持でひそかに其處から歩み出た。

午後、今度は辨天崎の向う側、斷崖の上に續いた草山に寢に行く。木の間ごしの眼の下の浪は兎も角、ずうつと續いて行つた斷崖のいよゝのはづれのあたりに白々と寄せてゐるのを見つめてゐると、心はまたしても深い寂寥のうちに沈んでゆく。私の居るツイ下から斷崖は小さく彎曲してゐて、その入江の中に二つ三つ露れてゐる岩の頭にも皆しらふくと小さな浪が立つてゐる。見て居れば遙かの沖からは大きな弧を描いて長いうねりが後から後からと寄せてゐるのだ。そしてその先が入江や遙かに續いた斷崖に達しては渦となり浪となつてゐる。明らかな日の光はそのうねりにも渦にも浪にも、また岩にも崖にも崖の上の樹木にもみなしつとりと照り入つてゐる。浪は動き岩も森も日光も、眼に入る全體が動いてゐる様にも感ぜられて來る。それと共に自分のこゝろも大きく寂しく浪うつてゐるの

である。斯うした時、私は常に大きな自然と人間のたましひとの間に解きがたい微かな一致を感じて、深い哀感に撲たる、が癖である。小さな鷹が一羽、何處から來たか久しい間私の居る上あたりを舞つてゐた。

歸つて湯に入ると手や足が頻りに痛む。どうかしてせめてその崖の端れの岩の露出してゐるあたりまでも行つてみたく、羽織をぬぎ裾を端折り、一步々々に極めて深い用心を拂ひながら——踏み外せば十丈か十五丈の崖を浪の中へ飛ぶわけだ——這ひ降りて行つた。岩のあたまには寒い風が立つてゐた。首だけ出して覗いてみると崖の下は極めて純粹な藍のいろにどよめいてゐた、そして雪白な浪のくだけと。その時に受けた手足の傷なのだ。

二月二十二日 曇 風

型のごとくけふ風、しかも曇つてゐる。私は元來風は好きである。斯うしてちつと耳を傾けてゐると、まつたく靜かな氣持になつてゆく。終日籠城、めづらしく歌を作る。今度はどうしたものか、永い間の疲勞が湯に入ると同時に出て來たものか、眞實意地も張りもなくぐつたりとしてしまつてゐた。春陽堂から出す筈(昨年九月に書き上げる筈だつたのである)の和歌作法書を今度こそは書きあげようと殆んどそれが全部の目的で出て來たのだが、そして毎日どうかしてそれに氣を向けようと幾度と

なく試みてるのだが、どうしても筆がとれず、五百枚そのためにのみ用意して持つて來た原稿用紙はまだ全部そのまゝに手もつけずに残してある。そのほかに新潮社から出す散文集の編輯も持つて來た用事の一つであつた。これは舊く書きすて、おいたものが多いのでそれらに幾らか朱を入れ、ばいいので、どうにか間に合せた。もう一つ、南光堂から出す歌集の編輯、これも大方出來てゐたのを清書すれば済むので完成した。あとは添削詠草の返附、三月號の選歌、これらであるが、到底これは満足にやれさうにない。それから自分でも不思議な位なのは歌の出來ないことであつた。今まで東京を離れて旅に出さへすれば、たとへ二三日のそれでも二十首、三十首、時としては百首位を作らずに済んだことは先づ殆んど無い。それが今度は二十日から斯うしてゐて、それも人に逢ふでなく、する筈ではあるが仕事をすてなして終に殆んどよう作らなかつた。あたりの自然などは、大きいところこそないが誠に私の氣に入つてゐる此處なのである。矢張り自分の氣の張つてゐない、生力の充實してゐないためである。さう思ふと、實際心細い。餘事を思はず、とにかくに身體を速くよくしようと思ふ。今日の様に、少し氣に入つた歌が一首でも出來て呉れると、急に生き返つた様にうれしい。今日は先づ成績のいゝ方であつた、毎日これが續いて呉れるといふと思ふ。といふうちに、もう歸らねばならぬ時になつてゐるのだ。

二月二十三日 曇 風

けふも風、さうひどくもないのだが船が来ない。夕方かけて全く風ぐ。明日は大丈夫と思ふ。

荷物をまとめかけておいて葉書をかいたり、歌を考へたりする。いよく別れだと思ふと、土地に名残が惜しまるゝ。そして、歸つてからの東京の事が恐しく眼にうかぶ。

何となくおちつかずに過す。

二月二十四日 晴

五時起床、星の見える湯槽ゆぶねから先づけふの風と晴とをよろこぶ。湯から上つて名残の散歩に出る。梅がまことにきれいだ。幾本も並んで咲いてゐる岡などには、中にうす青んで見ゆる花もある。とある寺の裏山には竹と梅と椿が同じ位るに混つて茂つてゐる。しつとりした墓地に入り込むと、繡眼めじろ兒が其處でも此處でも啼いてゐる。午前の船来らず、また散歩。今度はやゝ遠くまで行く。到るところ煦々くわくわとして春の光が満ちてゐる。歌、幾首か出来る。

午後二時半、ずつと沖から汽笛が聞える。荷物を持つて濱に出る。宿の者も揃つて送つて来る。舩に乗つて餘程漕ぎ出た時に、不意に私の名を呼ぶ人がある。中田老人だ。何度となく頭を下けてゐる。

幸にこの航路一番の大船で、船室は甲板にあり、船室の屋根は平面で自由に坐られるやうになつてゐる。屋根に産を敷き、ゆつたりと席を作る。海上極めて穏か、附近の潮は黒いまでに澄んでゐる。岸に沿うて進む。岸は多く岩壁と菅山、その何處にも物悲しさうな日光が漲つてゐる。戸田へたの崎を廻つたころ、私は携へて来た酒の壺をあけてゐた。そして何の氣もなくひよいと首を擧ぐると、ちやうど眞上に、そこを眞正面の高空に富士がくつきりと聳えてゐた。七合目あたりまでは雲で、それから上の雪白な頂きが空に浮んでゐるのである。私は實際跪いて合掌したい程に思つた。程なく沼津の千本松原が見えて来た。

旅 日 記

五月八日 微雨後晴

とろ／＼したかと思ふと、もう起きる時になつてゐた、午前の三時だ。昨夜、お別れだからと云つて四五人の人が訪ねて來、ツイ夜更しをしたのであつた。そして昨夜のうちに片附けて置かうと思つてゐた旅仕度、といふより留守中の手あてを少しもようしなかつた。起き上つてあれこれと片附ける。義妹が態々たいてくれた赤飯の膳に一本つけて貰つて緩くりといろいろ話し乍ら朝飯を済ます。生れたばかりの赤ん坊を抱いて坐つてゐる妻に別れを告げて、家を出る。二人の子供は睡入つてゐる。義妹と姪とは東京驛まで送つて來ることになつた。雨がばら／＼してゐる。私の旅立ちに雨の降らぬ事は殆んど無い。

東京驛には思ひがけず柴山武矩君が來てゐて呉れた。六時二十五分發車。昨夜の寢不足に今朝の酒が馬鹿に利いて、漸く汽車に乗り込んだ安心と共に、早速睡氣がやつて來た。旅に出るといふことは楽しいには相違ないが我々の様な生活をしてゐる者には自身の旅さきのこと、あとに残す家族の事とその準備がなか／＼一通りでない。後にはもう準備に疲れてしまつて、いつそ止めてしまはうかなどと癪癢も起つて來る。が、汽車に腰を下せばもう安心だ。兎に角に自分一人の旅の心地となる。やれ／＼と思ふと同時に、私はこくり／＼と始めてゐた。

横濱々々と呼ぶ聲に眼が覺めた。すると丁度私の窓の前に創作社々友の石黒春峰君の顔が見えた。驚いて聲をかくるとその背後に同じく廣瀬雄四郎君の顔も見えた。や、や、といふうちに長谷川草月、下島茂君も現はれ、この二人は車内に入つて來た。他の用事で石黒君に今日發の時間を言つてやつたので、斯うして來てゐてくれたのだ相である。そして下島君は鎌倉に用事もあるので大船まで、長谷川君はどうせ遊んでゐるから國府津までこれから見送らうといふ。まごつきながら感謝してゐると、發車した。

雨はいつの間にもやら霽れてゐた。思ひがけぬ友人の顔を見て急にときめいて來た私の瞳の前に、雨後の若葉が何とも言へぬ輝きを見せて四邊にそよぎ出した。同君たちの提けて來てくれた冷酒の壺もあけられて、落ち着かぬ、然し楽しい談話は忽ちこの一室を壓する様になつた。が、これも暫しの間で、惜しい／＼と言ひながら下島君は大船へ、また一時間ほどして長谷川君は國府津へ降りてしまつた。私も餘程國府津へ降り度かつたが、先途の時間が打合せてあるためにそれも出來ず、手を握つて別れた。

箱根にかゝると空はますます明るく、煙つた雲間から水の様な日光が射して来た。溪流、青葉、遠近の峰、そしてこの日の光、次第に私の旅心地は確かになつて来た。久しく忘れてゐた生々しい感じが、身體の其處此處からむづ痒い様に起つて来た。富士は光り煙つた深い雲に包まれて、僅かにその青やかな裾のみを見せてゐた。

沼津から海がをり／＼車窓に沿ふ様になつた。蒲原興津のあたり、照り白んだ濱には大勢の漁師共が働いてゐた。鏡の様な沖を漕いでゐるのも見えた。富士川も、大井川も、好かつた。重々しく輝いてゐる青葉の山の間から極めて靜かに流れ出して來てゐる姿が難有いもの、様にも見られた。天龍川もさうであつた。そしてそれを渡ると直ぐ濱松である。三時、同驛下車、其處には法月紫星君たちが出迎へてゐてくれた。

その夜、同市花屋で歌會が催された。同地斯界の長老加藤雪腸君を初め法月君其他二十人程、果てたのは一時過ぎであつた。濱松には六年前にも一度來た事があり、其時にも同じ會が開かれた。そして其時逢つた數人のうち大塚唯我、伊藤紅綠天の兩君がいつの間にか他界の人となつてゐた事を知り、少からず驚いた。

五月九日 晴

午前十時出立、今日の汽車は大分こんでゐた。發車間もなく舞坂となり、次いで辨天島となつた。日はよく晴れてゐた。

引汐と見え、島の附近は一帶に洲となつて遙かに今切の砂丘の邊りに眞白な浪のあがるのが見えて居る。濱名湖は美しい様な寂しい湖である。かねてから私は信州の諏訪湖を見ると何となく亡びゆく物の姿を見る様な、一種廢頽した氣分を覺ゆるのが常であつたが、今日の濱名湖にも亦それに似た感覺を起させられた。

湖畔を過ぐれば廣い／＼稚松の原を走る。小さな松の間にはふりまいた様に躑躅が咲いてゐる。程なく豊橋、其處を過ぐればまた海が見え出した。浮いて見ゆるのが多分渥美半島であらうと思ふ。この旅の歸りには其處に渡つて、伊良湖崎の端を見る事になつてゐるのである。まだ見ぬ前のいろ／＼な空想が頭に上る。名古屋を過ぎ木曾川を渡れば美濃の高原となる、關ヶ原あたりを走る頃、數年前の大地震の時私は小さな新聞記者として出かけて來てゐた事があつた、その時の事など、なつかしく心に浮ぶ。伊吹山には頂上近い山腹に雪の残つてゐるのが見えた。米原彦根のあたり、次第に曇つてやがてばら／＼降り出した。日も漸く暮に近く、青黒く濡れてゆく山野の景色もまた悪くなかつた。大津となり、山科となり、心次第にときめく。京都市はもう何分かの後に迫つた。

六時四十分京都驛着、そわ／＼と立ち上ると直ぐ眼の前に秋田瑞穂君が見えた。私が創作社を結ん

で以來、歌の上での京都と私との關係はかなり深い且つ長いものであつた。創作社支社がこの地に出來てからも随分になる。それでゐて私はまだ京都の誰をも知らなかつた。支社の人数数名ある中に顔を知つてゐるのはこの秋田君だけであつた。惶しく挨拶をすると、彼はその側の人々を紹介して呉れた。朝川光太郎君、雨森長三郎君、坂部廣吉君、藤井草宣君、常磐井現雄君、西内白穂君など、一人一人名を聞いてその顔を見てゆくうちに、私は臉の熱くなつて來るのを留めかねた。殆んど十年來の心の友達であるこの人々と、いま漸く親しく手を握るのである。私はたゞ空しく頭を下ぐるだけで、ろく／＼口がきけなかつた。

驛前から電車で祇園へ出た。其處の或るカフェーでお互に初めての杯を擧げた。私もその頃漸く自由にももの言ひ得らるゝだけの心の落ち着きを持つてゐた。明るい灯の下に輝いたこれらの人々の顔を改めて一人々々見廻した。そして心のうちで、私はいま確かに京都に來てゐるのだと思つて安心した。

程なく私の宿ときめてあつた吉田町神樂坂吉野館といふへ行く。其處に京大醫科生である秋田君は夙うから下宿してゐるのである。皆、遠いのに送つて來て呉れた。其處では烈しい歌の議論が出て、到頭其中某々兩君は取つ組み合ひを始め、二人とも額に大きな瘤を作つて了つた。京都の社友には銀行會社に勤めてゐる人たちと帝大同志社眞宗大學其他に出てゐる學生と半々になつてゐる。そして

後者はともすると過激派的色彩を帯ぶるらしかつた。今夜着京早々私はその一實例を見たわけである。驚きもし、可笑しくもあり、感心もした。それが濟んで更に快談、一時過ぎ散會した。

五月十日 雨

さすがに疲れて今朝は遅かつた。隣家に下宿してゐる朝川君に誘はれて風呂に行き、歸つて來るともう晝であつた。其處へ秋田君が歸つて來た。彼は今朝早く徴兵検査を受けに行つたのであつた。そして甲種合格であつたといふ。いゝ身體ではあるが、まさかと思つてゐた所へそれと聞き、お互ひに顔を見合せる。同君は今年卒業なので、卒業後の準備などあら方もう出來てゐるところへ斯うなつたので、兎に角に大きな一頓挫である。やがて學校の友達も集つて來て、入營後の始末など相談するため早速今日郷里へ歸つて來るがよからうといふ事になつた。同君の郷里は栃木縣で、家には阿母さんが獨りだけで待つて居らるゝのである。

秋田君がその準備をして居る間、私は來合せた社友藤井君、白木義詮君、柏樹玲果君たちに案内せられて黒谷の山内から大谷家の岡崎御坊、若王寺、永觀堂あたりを傘さしながら見て歩いた。到るところ寂び果てた御堂や庭園で、いづれも鬱蒼たる若葉に包まれ、ことに今日は細かな雨がそ、いでゐる。何とも言へぬ靜かな、さうして鮮かな眺めであつた。

夕方、三人に別れて宿に歸り、直ぐまた秋田君と連れ立つて出かけた。彼は今夜九時發の汽車に乗るので、それまでに大いに飲まうといふのである。四條の橋際の京都料理を自慢にしてゐるといふ或る料理屋に腰を据ゑ、灯に輝いて流れてゐる加茂川を見下しながらゆつくりと相酌む。私は元來酒を飲めばものを喰べない方なのだが、此日は大いに喰つた。甘くもあり又腹具合もよかつたかして自分乍ら可笑しい位、持つて來る程のものをみな喰べて行つた。程なく、打ち合せてあつたと見え西内雨森の兩君來り加はり、席は愈々賑かになつた。九時の汽車をば悠々と閑却し、十一時何分の辛うじて間に合ひ、大元氣で彼は歸つて行つた。

兩森君たちは雨の降る中を態々又私の宿まで送つて來て呉れた。其歸りは多分もう電車は無かつたらう。

五月十一日 雨後晴

午前午後にかけて、常磐井、藤井、藤元慈祐、筒城牛太郎、柏樹の諸君來訪、藤元君とも七八年に及ぶ知り合ひなのだが、逢ふのは初めてであつた。夕方、朝川、常磐井兩君と銀閣寺に行く。朝川君は京大法科を今年出るので同じく今日徴兵検査を受けたのださうだが、この人は丙種であつた。銀閣寺は想像以上によかつた。金閣寺ほど俗びてゐず、技巧をこらしたその庭園などにも自からなるさびが

出てるて、殆んど自然に近い靜寂を持つて居る。庭後の木深い山から流れ出てゐる笈の水音を聽いてゐると、ほんとに心が澄んで來る。其處を出て法然院といふを訪うた。此處は深い木立の中の寺だ。木魚の響が、薄暗い木立の中に起つてゐる。寺を出ると薄暗い夕空にこの平野を限る四周の嶽がその峯だけを明るく見せて聳えてゐた。

夜、検査の濟んだ心祝ひにとて常磐井君と共に朝川君に連れられ、祇園へ行く。四五軒のカフェーを廻つてゐるうちに電車がなくなつてしまつた。さらばとて今度はまた或る物古りて明るき家に席を作り、たうとう一夜を飲み明してしまつた。

五月十二日 晴

今日は創作社京都支社の人たちが私のために保津川下りをしようといふ日である。朝川君は試験前だからと宿へ歸り、常磐井君と二人だけ、祇園より直ちにかねて定められてあつた二條驛へ急ぐ。其處でまた多くの初對面の人に逢うた。木村流二郎、廣田權三、辻井彌太郎君など。綿引蒼梧君とは同君が高等師範在學中東京で逢つた事があるのださうだがすっかり見忘れてゐた。その他、藤井、西内、雨森君等同勢九人、九時何分發の汽車で丹波の龜岡に向うた。

嵯峨を過ぐると直ぐ汽車は川に沿うた。眞實の激流、一二日來の雨で水量が増したとやらで一層の

壯觀である。ことにこの激流を包む山はいま一帯が青葉若葉に輝いてゐるので、その奔湍が尙ほ際だつて見ゆる。やがてこの溪谷を舟で下らうといふのである。

十時半龜岡着、驛には坂部君が待つて居た。龜岡は同君の郷里なので舟其他の準備のため彼だけ昨日からこちらへ出かけてゐたのであつた。昨今、この保津川くだりが非常に多く、十日も前から約束して置かねば舟が手に入らぬのである相だ。ことに今日は日曜だし、いまの汽車一杯の人がみな川原に出て來た程なので、皆もそれを氣づかつてゐたのであつたが、幸に坂部君の骨折で午後の二時頃に出るのを無理に借りる事になつた。それまでの二三時間を何處で過さうかといふ事になつたが、なまじひ混み合つた茶屋などで晝飯をたべるより寧ろ此處の川原の方がよくはないかと、かねて用意してあつた辨當を廣々した川原の真中に運ばせ、大きな白鶴はくづるの塚も幾本か其處に竝んで、晴々しい賑やかな酒宴が開かれた。そして直ちに、一杯二杯の人も、一升組も、共にくゞ底を抜いての打ち寛いだ談笑裡に落ちて行つた。而してまだ酒のなかばも盡きぬ頃、舟が來たといふ。そこで直ぐにそのまゝの宴席を舟に移す。間もなく舟はこの賑かな一團を乗せながら、隼の様にこの奔流の上に走つた。

比叡山

山上の宿院に着いた時はもう黄昏近かつた。御堂の方へ參詣してからとも思つたが、何しろ私は疲れてゐた。「天台宗講中宿泊所」「一般參詣者宿泊所」といふ風の大きな木の札の懸つてゐるその冠木門を見ると、もう脚が動かかなかつた。

門を入るとツイ眼の前に白い花がこんもりと咲き枝垂れてゐた。見るともなく見れば、思ひもかけぬ幾本かの櫻の花である。五月の十八日だといふに、と思ふと、急に山の深いところに来てゐるのを感じた。飛石を傳つて、苔の青い庭を玄關まで行つたが、大きな建物には殆んど人の氣も無く、二三度訪うても返事は聞かれなかつた。途方に暮れてぼんやりと佇んでゐると、何やら鳥の啼くのが聞える。静かな、寂しいその聲は會つて何處かで聞いたことのある鳥である。しばらく耳を澄ましてゐるうちに筒鳥といふ鳥であることを思ひ出した。思ひがけぬ友だちにでも出會つた様に、急に私の胸はときめいて來た。そして四邊よたひを見廻すと何處もみな鬱蒼たる杉の林で、その夕闇のなか、らこの筒抜けた様な寂しい聲は次から次と相次いで聞えて來てゐるのである。

坂なりに建てられたこの宿院のすつと下の方に煙の上つてゐるのを見た。どうやら人の居る氣勢もする。私は玄關を離れてそちらへ急いだ。あけ放たれた入口の敷居を跨ぐと、中は廣大な土間で、老婆が一人、竈の前で眞赤に火を焚いてゐる。私はいきなり聲をかけてその老婆の側に寄りながら、五六日厄介になりたいと言ひ込んだ。驚いた老婆はさも胡亂臭さうに私を見詰めてゐたが、此頃こちらでは一泊以上の滞在はお断りすることになつてゐるからといふ素氣もない挨拶である。

私は撲たれた様に驚いた。そして一寸には二の句がつけなかつた。初めこの比叡山に登つて來たのは參詣のためでなく、見物でもなく、或る急ぎの仕事を背負つて來たのであつた。自分のやつてゐる歌の雑誌の編輯を今月は旅さきで済ませねばならぬ事になり、東京から送つて來たその原稿全部をば三四日前既に京都で受取つてゐたのである。そして急いで京都でそれを片付けるつもりであつたが、久しぶりに行つた其處では同志の往來が繁くて、なか／＼ゆつくりそんな事に向つてゐるひまが無かつた。印刷所に廻さねばならぬ日限は次第に迫つて來るし、困つた果てに思ひついたのはこの山の上であつた。それは可からう、其處には宿院といふのがあつて行けば誰でも泊めて呉れるし、幾日でも滞在は隨意だし、と幾度びか其處に行つた經驗のある或る友人も私のその計畫に賛成して呉れたので早速私は重い原稿を提げて登つて來たのであつた。京都から大津へ、大津から汽船で琵琶湖を横切つて坂本へ、坂本から案外に峻しい坂に驚きながらも久しぶりにさうした山の中に寢起きする事を樂し

みながら、漸く斯うして辿り着いて來たのである。

さうして斯ういふ思ひもかけぬ返事を聞いたので、私はまつたくぼんやりしてしまつた。そして尙ほ押し返へして二三度頼んでみた。老婆の態度はますます冷たくて、まご／＼すればそのまゝ追ひ出しも兼ねまじき風である。終に私も諦めた。では一晩だけ泊めて下さいと言ひ棄てながら下駄を脱いだ。長くはさうして立つてゐられぬ位、私の脚は痛んでゐた。

通された部屋はもう薄暗かつた。投げ出された様に其處に突き坐つてゐると、廣い屋内の何處からか微かに讀經の聲が聞ゆる。聞くともなく耳を傾けてゐるとまた例の鳥の啼くのが聞えて來た。山鳩の啼くよりは大きく、梟よりは更に寂び、初めもなく終りもないその聲に耳を澄ましてゐると、もう先程の疝癢も失望もいつか知ら消え失せて、胸はたゞ言ひ様のないさびしさものなつかしさで一杯になつて來る。私は立ち上つて窓をあけた。少しの庭を距て、眼の及ぶ限り一面の杉である。戸外はまだ明るかつた。ぼんやりと其處らを見廻してゐると、ふと大きな杉の間に遠く輝いてゐるものを見出した。琵琶湖だナ、と直ぐ思ひついた。

讀經は何時か終つたが、筒鳥は尙ほ頻りに啼く。それに混つて何だか名も知らぬ小鳥らしいの、啼くのも聞えて居る。窓に倚りかゝりながら、私はいよ／＼耐へ難いさびしさを覺えて來た。そして、端なく京都の友人の言つてゐた言葉を思ひ出して、そゝくさと部屋を出た。

案の如くその宿院から石段を一つ登れば一軒の茶店があつた。其處で私は二合入の酒壘を求めながら急いで部屋へ歸つて來た。出来るなら飯の時に飲み度いが、今通りすがりに見れば食堂といふ札の懸つてゐる大きな部屋があつた。飯は多分其處で大勢と一緒に喰べなくてはなるまいし、ことに寺院附屬のこの宿院で公然と酒を飲むのも悪からうと、壘のまゝ口をつけやうとしてゐるところへ、薄暗い窓のそとからひよつこり顔を出した者がある。十四五歳かと思はれる小柄の小僧である。

「酒買って来て上げやうか」

「酒……？ 飲んでもいいのかい」

「此處で飲めば解りアせんがナ」

「さうか、では買って来て呉れ、二合壘一本幾らだい」

「三十三錢」

それを聞きながらこの小僧奴一錢だけごまかすな、と思つた。たつた今三十二錢で買って來たばかりなのだ。

「さうか、それ三十三錢、それからこれをお前に上げるよ」

と、言ひながら白銅一つを投り出してやつた。

犬の様に闇のなかに飛んで行つたが、直ぐまた裏庭から歸つて來て窓ごしにその壘をさし出した。

「爛をして来てあげやうか」

「いや、これで結構だ」

彼はそのまま、窓に手をかけて立つてゐるが、

「酒好きさうな人やと思つてゐる」と、言ひながら行つてしまつた。

苦笑しいく私手早くその冷たいのを一口飲み下した。二口三口と續けて行くうちに、次第に人心地がついて來た。窓の前の庭も今は全く暗く、遠くの峰に幾らか明るみが残つてゐるが、麓の湖はもう見えない。筒鳥の聲もいまは斷えた。部屋はまだ闇のまゝである。なるやうになれ、と投げ出した心の前には却つてこの闇も親しい様に思ひなされてゐるが、やがて廊下に足音が聞えて薄赤い洋燈を持つて入つて來た。先刻の小僧である。思つたより更に小柄で、實に險しい顔をして居る。

翌朝は深い曇りであつた。窓もあけられぬ位霧がこめて、庭に出てみると雨だか木の雫だか頻りに冷たく顔に當る。

未練が出て今一度老婆に滞在のことを頼んでみたが生返事で一向埒があかず、幾らか包んでやれば必ず效能があつたのだと、あとで合點が行つたが最初氣がつかなかつた。ことに朝飯の知らせに來た例の小僧が、滞在は出來ぬが今日山を下るのなら早う來て飯を食ひなされ、と言つたのに業を煮やし、

早速引き上げることに決心して、早速其處を飛び出した。そして、一應山内の重なところだけでも見て来ようと獨りぶらぶらと山みちを歩き出した。まだ朝が早いので一山の本堂とも云ふべき根本中堂こんほんだうといふ大きな御堂の扉もあいて居らず、行き逢ふ人もなく、心細く細かな徑を歩いて居ると次第に烈しく杉の梢から雫が落ちて来る。種々の期待に裏切られる、事に此頃では私も馴れて来た。あれほど楽しんで来たこの山も、斯んな有様で早々引き上げねばならぬのかと思ふと實に馬鹿々々しくてならぬのだが、その下からまた直ぐ次の計畫を考へるだけの餘裕も出来てゐた。今日この山を降りて、何處か湖畔の静かなところを探し、其處で例の仕事しごとを片付けようと思ひついでゐたのである。

何とも言へぬ深い感じのする山である。その日は四方を霧が罩めてゐたせるか、特にその様に思はれた。木立の梢には折々風が立つらしく、急にばら／＼と大きい雫が散亂して、見上ぐれば眞白な雲か霧か颯々と走り續いてゐる。梢ばかりでなく、歩いてゐる身近にも茂つた青い木や草が頻りに揺れ靡いて、立ち止つて眺めて居れば何だか恐ろしい様な思ひも湧く。

根本中堂から十三丁とかある様に道標に記された浄土院を訪はうと私は歩いてゐた。浄土院は當山の開祖傳教大師の遺骨を納めた寺で、この大正十年が同大師の一千一百年忌に當るのだ相だ。一時は三千坊とか稱へて山内全部に寺院が建ち並んでゐた相だが、今では寺の數三十ほど、そのうち人の住んでゐるのは僅か十六七だらうといふことである。山の廣さ五里四方と云ひ、到る處杉檜が空を掩う

て茂つてゐる。ちやうど通りか、つた徑が峠みた様になつてゐる處に一軒の小さな茶店があつた。動きやまぬ霧はその古びた軒にも流れてゐて、覗いてみれば小屋の中で一人の老爺が頻りと火を焚いてゐる。その赤い色がいかにも可憐しく、ふらく／＼と私は立ち寄つた。思ひがけぬ時刻の客に老爺は驚いて小屋から出て来た。髪も頬鬚も殆んど白くなつた頑丈な大男で、一口二口話し合つてゐるうちにいかにも人のいゝ老爺である事を私は感じた。そして言ふともなく昨夜からの愚痴を言つて、何處か爺さんの知つてゐる寺で、五六日泊めて呉れる様などころはあるまいかと訊いてみた。暫く考へてゐたが、あります、一つ行つて聞いて見ませう、だが今起きたばかりで、それに御覽の通り私一人しかゐないのでこれから直ぐ出かけるといふわけに行かぬ、追つ附け娘たちが麓から登つて来るから、そしてたら早速行つて聞かせませう、まア旦那はそれまで其處らに御參詣をなさつてゐたらいい、だらうといふ思ひもかけぬ深切な話である。私は喜んだ。それが出来たらどんなに仕合せだか解らない、是非一つ骨折つて呉れる様にと頼み込んで、サテ改めて小屋の中を見廻すと駄菓子に夏蜜柑煙草などが一通り店さきに並べてあつて、奥には土間の側に二疊か三疊位の疊が敷いてあるばかりだ。お爺さんはいつも一人きり此處に居るのかと訊くと、夜は年中一人だが、晝になると女房と娘とが麓から登つて来るのだといひながら、ほんの隠居仕事に斯んな事をしてゐるが、馴れてしまへば結局この方が氣樂きらくでいゝと笑つてゐる。

小屋の背後は直ぐ深い大きな溪で、いつの間にか此處らに薄らいだ霧は、その溪一杯に密雲となつて眞白に流れ込んでゐる。空にも幾らか青いところが見えて來た。では一廻り廻つて來るから、何卒お頼みすると言ひ置いて私は茶店を出た。雀一羽降りてゐぬ、靜かな浄土院の庭には泉水に水が吹き上げて、その側に石楠木しやくなんが美しく咲いてゐた。其處を出て釋迦堂、五輪塔と五町三町おきに何か由緒のあるらしい寺から寺をぶら／＼と訪ね廻つて茶店に歸つて來たが、中學生らしい大勢の客のみで、まだその娘たちは來てゐなかつた。それから私は更にこの比叡の絶頂である四明嶽に登つて行つた。その昔平將門が此處に登つて京都を下瞰しながら例の大野望を懐いたと稱せらるゝ處で、まことに四空蒼茫、丹波路から江州その他へ延びて行つた山脈が限りもなく曇つた空の下に浪を打つて續いて居る。風が寒くて、とても高い處には立つて居られない。少し頂上から降りて、風にねぢけたばら／＼の松原に久しい間私は寝ころんでゐた。一羽の鶯が其處らに巢でもあると見えて、遠くへは暫しも行かず、松の葉かけに断えず囀り續けてゐた。

其處を降りて再び茶店に歸つて行くと私の顔を見た爺さんは、いま娘が來たので早速寺へ問合せにやつた、多分大丈夫と思ふが、兎に角暫く待つてゐて呉れといふ。幸ひ二三本酒壘の並んでゐるのを見たので、それを取つて冷ひやのま、ちび／＼飲んでゐると、二十歳位はたちの色の小黑い、愛くるしい顔をした娘が下の溪から上つて來た。それと二三語何か話し合ふと老爺は直ぐ齒の無い顔に一杯に笑みを

含んで私の方に振向いた。私もそれを見て思はず知らず笑ひ出した。

話は都合よく運んだのであつた。が、何しろその寺はこの山の中でも一番荒れた寺で、住職もあるにはあるのだが平常は其處にゐず、麓の寺とかけもちで何か事のある時のほかはこちらへは登つて來ない、たゞ一人の寺男の爺さんがゐるばかりで、お宿をすると云つてもその寺男の喰べるものを一緒に喰べて貰はなくはならぬがそれで我慢が出来るか、とまた心配相に爺さんは私に問ひかけた。却つてその方が私も望むところだ、何しろ望みが叶つて嬉しい、お爺さんも一杯やらないか、と冷酒の茶碗をさすと、いかにも嬉しさうに寄つて來て受取つて押し頂く。お爺さんも好きらしいネ、と笑へば、これが楽しみでこそこんな山の中にもをられるのだといふ。幸ひ客も無かつたので二人してちびちびと飲み始めた。その途中にふつと氣のついた様に、若しこれから旦那がその寺で御酒をお上りになる様だつたら一杯でい、から寺男の爺に振舞つて呉れ、これはまた私以上の好きで、もとはこの麓で立派な身代だつたのだがみなそれを飲んでしまひ、今では女房も子供も何一つない身となつてその山寺に這入つてゐる程の男だから、としみ／＼した調子で爺さんが言ひ出した。宜しいとも、私も毎日これが無くては過せない男だが、それでは丁度い、相棒が出來て結構だなど、話し合つてゐるところへ、溪の方から頭を丸く剃つた、眼や口のあたりに何處か抜けた處のある、大きな老爺がのそ／＼と登つて來た。ア、來た／＼と云ひながら茶店の老爺は立ち上つて待ち受けながら、今度はまた世話

になるな、といふと、何も出来ぬが客人が困つてなさる相だから、と言ひく、側にやつて来た。私も立ち上つて禮をいふと、向うはたゞ黙つて眼をぱちくさせながら頭を下けてゐる。それを見ると娘はさもく可笑しいといふ様に、顔を掩うて笑ひ出した。茶店の爺さんも笑ひながら、旦那、この爺さんはまことに耳が遠いのでそんな聲ではなかく通じないといふ。自分の聲は人並外れて高調子なのだが、これで聞えないとすれば全然聾同然だ、この爺さんとその荒寺に五六日を過すことか、と私も今更ながら改めて眼の前にぼんやり立つてゐる大きな、皺だらけの人を見守らざるを得なかつた。やがてその爺さんに案内せられて私は溪の方へ降りて行つた。今までの處より杉はいよく古く、徑は段々細くなつた。そして、なかく遠い。随分遠いのだなといふと、なアに今の茶店から七町しか無いといふ。近所に他にお寺でもあるのかと訊くと、釋迦堂が一番近いが其處には人がゐないのだから先づ一軒だちの様なものだといふ。

なるほど四方を深い木立に距てられた一軒だちの寺であつた。外見は如何にも壯大な堂宇だが、中に入つて見るとその荒れてゐるのが著しく眼に付く。この部屋を兎に角掃除しておいたから、と言はれて或る部屋に入つて行くと疊はじめくくと足に觸れて、真中の圍爐裡には火が山の様に熾つて居た。ぼんやりと坐つてゐると、何やらはらくくと烈しく聞えて来た。縁側に出てみると、いつの間にかまた真白に霧が罩めて大粒の雨が降り出してゐた。

山 寺

夕闇の部屋の中へ流れ込むのさへはつきりと見えてゐた霧はいつとなく消えて行つて、たうとう雨は本降りとなつた。あまりの音のすさまじさに縁側に出て見ると、庭さきから直ぐ立ち並んだ深い杉の木立の中へさんくくと降り注ぐ雨脚は一帶にたゞ見渡されて、木立から木立の梢にかけて濛々と水煙が立ち靡いてゐる。

其處へ寺男の爺さんが洋燈に火を點けて持つて来た。ひどい降りだ、斯んな日は火でも澤山おこさないと座敷が濕けていけないと言ひながら圍爐裡に炭を山の様についでゐる。流石に山の上で斯うせねばまた寒くもあるのだ。そして早速雨戸を締めてしまつた。がらんとした廣い室内が急にひつそりした様であつたが、それも暫しで、瀧の様な雨聲は前より一層あざやかにこの部屋を包んでしまつた。來る早々斯んな雨に會つて、私は深い興味と氣味悪さとに攻められながら改めてこの朽ちかけた様な山寺の一室をしみくくと見廻さゝるを得なかつた。

爺さんはやがて膳を運んで来た。見れば私の分だけである。先刻の峠茶屋の爺さんの言葉もあるの

で私は強ひて彼自身の分をも此處に運ばせ、徳利や杯をも取り寄せ、先刻茶屋から持つて來た四合壺二本を身近く引寄せて二人して飲み始めた。

爺さんの喜び様は眞實まこと見てゐるのがいぢらしい位で、私のさす一杯一杯を拜む様にして飲んでゐる。斯ういふ上酒は何年振とかだ、勿體ないといひながら、いつの間にか酔つて來たと見え、固くしてゐた膝をも崩し、段々圍爐裡の側へもにぢり出して來た。爺さん、名を伊藤孝太郎といひ、この比叡山の麓の坂本の生れで、家は土地でもかなりの百姓をしてゐたが、彼自身はそれを嫌つて京都に出て西陣織の職工をやつてゐた。性來の酒好きで、いつもそのために失敗しくじり續けてゐたが、それを苦に病み通した女房が死に、やがて一人の娘がまた直ぐそのあとを追うてからは、彼は完全な飲んだくれになつてしまつた。郷里の家邸から地面をも瞬しゅんく間に飲んでしまひ、終には三十五年とか勤めてゐた西陣の主人の家をも失敗しくじつて、旅から旅と流れ渡る様になり、身體の自由が利かなくなつて北海道からこの郷里に歸つて來たのが、今から六年前の事であるのださうだ。歸つたところで家も無し、ためになる様な身よりも無しで、たうとう斯んな山寺の寺男に入り込んだといふのである。その概略おらましをば晝間峠の茶屋で其處の爺さんから聞いて來たのであつたが、いま眼の前にその本人を見守りながらその事を思ひ出してゐるといかにいぢらしい思ひがして、私は自分で飲むのは忘れて彼に杯を強ひた。

難有いといひ續けながら、やがてはどうせ私も既すでう長い事は無いし、いつか一度思ふ存分飲んで見度いと思つてゐたが、矢つ張り阿彌陀様のお蔭かして今日旦那に逢つて斯んな難有いことは無い、毎朝私は御燈明を上げながら、決して長生きをしやうとは思はない、いつ死んでもいいが、唯だどうかぼつくりと死なして下されとそればかり祈つてゐたのであるが、この分ではもう今夜死んでも憾みは無い、など、言ひながら眼には涙を浮べて居る。五尺七八寸もあらうかと思はれる大男で、眼の大きい、口もとのよく締らない様な、見るからに好人物で、遠いといふより全くの金聲かねのこゑであるほど耳が遠い。それが不思議に、酒を飲み始めてからは案外によく聞え出して、後では平常通りの聲で話が通ずる様になつた。そして今度は向うで言ふ呂律ろりつが怪しくなつて、私の耳に聞き取りにくく、なつて來た。今夜死んでもいい、など、いふのを聞いてから、急に斯う飲ませてい、か知らと私も氣になり出したのであつたが、いつの間にか二本の壺を空にしてしまつた。私だけは軽く茶漬を掻き込んだが、爺さんはたうとう飯をよう食はず、膳も何も其儘にしておいて何か鼻唄をうたひながら自分の部屋に寢に行つた。私も獨りで部屋の隅に床を延べて横になつたが妙に眼が冴えて眠られず、まじくとしてゐるとまた耳につくのは雨の音である。まだ盛んに降つてゐる。のみならず、妙な音が部屋の中でする様なので細めた灯をかきあけてみると果して隅の一本の柱がべつとりと濡れて、そのあたりにぼとぼと雨が漏つてゐるのである。枕許まで來ねばよいがと、氣を揉みながらいつか其儘に眠つてしま

つた。

眼が覺めて見ると雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨は、と思ふと何の音もせぬ。もう爺さんも起きた頃だと勝手元の方に耳を澄ませても何の音もせぬ。まさか何事もあつたのではあるまいと流石に胸をときめかせながら寝たまゝ、煙草に火をつけてゐると、朗かに啼く鳥の聲が耳に入つて來た。

何といふその鳥の多さだらう。あれかこれかと心あたりの鳥の名を思ひ出してゐても、とても數へ切れぬほどの種々の音色が枕の上に落ちて來る。私は耐へ難くなつて飛び起きた。そして雨戸を引きあげた。

照るともなく、曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上ぐる杉の木立は次から次と唯だ靜かに押し並んで、見渡す限り微かな風もない。それからそれと眼を移して見てゐると、私は杉の木立と木立との間に遙かに光るものを見出した。麓の琵琶湖である。何處から何處までとその周圍も解らないが、兎に角朧々とその水面の一部が輝いてゐるのである。

餘りに靜かな眺めなので私はわれを忘れてぼんやりと其處らを見廻してゐたが、また一つのもを見出した。丁度溪間の様になつて眼前から直ぐ落ち込んで行つてゐる窪地一帯には僅かの間杉木立が途斷えて細長い雜木林となつてゐるが、その藪の中をのそりくと半身を屈めながら何か探してゐる

人がゐるのである。頭を丸々と剃つた大男の、紛ふ方なき寺男の爺さんである。それを見ると妙に私は嬉しくなつて大聲に呼びかけたが、案の定、彼は振向かうともしなかつた。

後、庭に降りて笥の前で顔を洗つて居ると爺さんは青々とした野生の獨活どくわくを提げて歸つて來た。斯んなものも出てゐると言ひながら二三本の筍をも取出して見せた。

この××院といふのは比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺のうち、最も奥に在つて、また最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持ちで、何か事のある時のほか滅多には登つて來ず、年中殆んどこの寺男の爺さんが一人で留守居をして居るのである。四方唯だ杉の林があるのみで、しかも溪間の行きどまりになつた所に在るために根本中堂だの淨土院だの釋迦堂だの、または四明嶽、元黒谷などへ往來する參詣人たちも殆んど立ち寄り寄る事なく、まる一週間滞在してゐる間、私はこの金鼈の爺さんのほか、人間の顔といふものを餘り見る事なくして過してしまつた。

多いのは唯だ鳥の聲である。この大正十年が當山開祖傳教大師の一千一百年忌に當るといふ舊い山、そして五里四方に亘ると稱へらるゝ廣い森林、その到る所が殆んど鳥の聲で満ちてゐる。

朝、最も早く啼くのが郭公かくこうである、くわつくわうくと啼く、鋭くして澄み、而もその間に何とも言ひ難い寂を持つたこの聲が山から溪の冷たい肌を刺す様にして響き渡るのは大抵午前の四時前後で

ある。この鳥の啼く時、山はまつたく鳴りを沈めてゐる。くわつと鋭く高く、さうして直ちにくわつと引く、その聲がほゞ二つか三つ或る場所で續けさまに起つたかと思ふと、もうその次は異つた或る頂上か溪の深みに移つて居る。彼女は暫くも同じ所に留まつてゐない。而して殆んどその姿を人に見せた事がない。杜鵑ほととぎすも朝が激しい。これは必ず其處等での最も高い梢でなくては啼かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると取り亂して啼き立つる事がある。その時は例の本尊ほんぞんかけたかの律も破れて、全く急迫した亂調となつて来る。日のよく照る朝など、聽いてゐて息苦しくなるのを感ずる。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢に飛び渡る時の、鋭い姿が誠にいゝ。それから高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大きさは燕ほどでその尾の一尺位る長いのがゐる、細々と、實に細々と息を切らずに啼いてゐるのがある。これは下枝しげから下枝を渡つて歩いて、時には四五羽その長い愛らしい尾をつらねてゐるのを見る。

日が開けて、木深い溪が日の光に煙つた様に見ゆる時、何處より起つて来るのだから、大きな筒から限りもなく抜け出して来る様な聲で啼き立つる鳥が居る。初めもなく、終りも無い、聽いて居れば次第に魂を吸ひ取られて行く様に、寄邊ない聲の鳥である。或時は極めて間遠に或時は釣瓶打ちに烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて何卒して一目見たいものと幾度も私は木の雫に濡れながら林深く分け入つたが、終に見る事が出来なかつた。筒鳥といふのがこれである。

筒鳥の聲は極めて圖抜けた、間の抜けたものであるが、それをやゝ小さく、且つ人間くさくしたものに呼子鳥といふのが居る。初め筒鳥の子鳥が啼いてゐるのかと思つたが、よく聞けば全く異つてゐる。山鳩にも似、また梟にも近いが、そのいづれとも違つた、矢張り呼子鳥としての言ひ難い寂びを帯びた聲である。

數へれば際きりがない。晴れた朝など、これらの鳥が殆んど一齊に其處此處の溪から峰にかけて啼き立つる。茫然と佇んで耳を澄ます私は、私の身體全體の痛み出す様な感覺到襲はるゝ事が再々あつた。

或日の夕方、もう暗くなりかけた頃、ぼんやり疲れて散歩から歸つて來ると、思ひもかけぬ本堂の縁の下から這ひ出して來る男がゐた。喫驚して見ると、寺男の爺さんである。何をするのだと訊くとにや／＼笑つてゐて答へなかつたが、やがてどうも狐や狸の悪戯いたづらがひどいので毎晩斯うして御飯を上げて置くのだといふ。どんな悪戯だと訊くと、晝間でも時々本堂の方で寺の割れる様な音をさせたり、夜になると軒先に大入道になつて立つてゐたり、便所の入口をわからなくしたり、暗くなつて歸つて來る眼の前に急に大きな瀧を出來したりする、が、あゝしてお供へをする様になつてからそんな事はなくなつたと言ふ。では僕たちはお狐さんと一つ鍋の飯を喰つてゐるわけだね、と言つて笑つたが、その晩から私は小便だけは部屋の前の縁先から飛ばす事にした。

毎晩爺さんとの對酌が日毎に楽しくなつた。山の茶屋から壘詰を取つてゐては高くつくからと言ひながら爺さんは毎日一里半餘りの坂路を上下して麓の宿の酒屋から買つて來る事にした。爺さんの留守の間、私は持つて來た仕事(旅さきでやる事になつた自分の雑誌の編輯)をしながら、淋しくなれば溪間に出て蕨を摘んだり、虎杖を取つたり(これは一夜漬の漬物に恰好である)、獨活を掘つたりしてその歸りを待つのである。

此處に一つ惨しい事が出來た。この四五年の間、爺さんは酒らしい酒を飲まず、稀に飲めばとて一合四五錢のものをコップで飲む位で、斯うした酒に爛をつけて、飲むといふ事は断えて無かつたのである。所が私が來て以來毎晩斯うして土地での上酒に罐詰もの、肉類に箸をつけてゆくうちに彼は久しく忘れてゐた世の中の味を思ひ出したものらしい。元來この寺は廢寺同然の寺で、唯だ毎朝お燈明を上ぐるか折々庭の掃除をする位のもので仕事と云つては何もない。その代りたゞ喰べてゆくといふだけで、報酬といふものも殆んど無かつた。それでまた諦めてゐたのであるが、彼は急にそれで慍らなくなつた。或る夜、得々として私に言ひ出した。今日酒屋から歸りに△△院といふに寄つて、前から話のあつた事ではあるしどうかこちらへ私を使つて呉れぬかと頼んだ所、お前さへよければいつ來てもいい、働き一つで五圓でも六圓でも金はやるからと言はれた、明日早速里に降りてこちらの

お住持には断りを言うてあちらのお寺へ移る事にする、さうすれば私もまたこれから時々は斯うしたお酒も飲めるからと、いかにも嬉しげなのである。何となく困つた事を仕出かした様にも思つたが、強ひて止めるわけにもゆかず、それでいつから移るのだと訊くと、旦那がこゝを立たれる日に直ぐ移るといふ。こちらの住持が困りはせぬかと言へば、少しは困るだらうが致し方が無い、大體こちらの

お住持が餘りに吝嗇だから斯ういふ事にもなるのだといふ。いよく私の寺を立つ日が來た。その前の晩、お別れだからと云ふので、私は寺の爺さんのほか、最初私をこの寺に周旋して呉れた峠茶屋の爺さんをも呼んで、いつもよりや、念入りの酒宴を開いた。茶屋の爺さんは寺の爺さんより五歳上の七十一歳だ相だが、まだ極めて達者で、數年來、山中の一軒

家にとゞ獨り寢起きして晝間だけ女房や娘を麓から通はせてゐるのである。寺の爺さんは私の出した幾らでもない金を持つて朝から麓へ降りて、實に克明に種々な食物を買つて來た。酒も多く取り寄せ、私もその夜は大いに酔ふつもりで、サテ三人して圍爐裡を圍んでゆつくりと飲み始めた。が、矢張り爺さん達の方が先に酔つて、私は空しく二人の酔ひぶりを見て居る様な事になつた。そして、口も利けなくなつた、兩個の爺さんがよれつもつれつして酔つてゐるのを見て、楽しいとも悲しいとも知れぬ感じが身に湧いて、私はたび／＼涙を飲み込んだ。やがて一人は全く酔ひつづれ、一人は剛情にも是非茶屋まで歸るといふのだが脚が利かぬので私はそれを肩にして送つて

行つた。さうして愈々別れる時、もうこれで旦那とも一生のお別れだらうが、と言はれてたうとう私も泣いてしまつた。

翌日、早朝から轉居ひっこしをする筈の孝太爺は私に別れかねてせめて麓までと八瀬村まで送つて來た。其處で尙ほ別れかね、たうとう京都まで送つて來た。京都での別れは一層つらかつた。

旅の或る日

伊豆の大仁おほひとから來て三島町驛と三島驛とでも同じ様な失敗をやつた事がある。今度もその日大和の初瀬から立つて高田で乗換へ、和歌山線の終點まで行くつもりで何の氣もなく「和歌山」行きの切符を買つて私は持つてゐた。そして、和歌山、和歌山と呼ぶ聲に猶豫なく立ち上つた。小さいものであるが左右の手に手提や包や洋傘かうもりを持つて車室を出るなり改札口へ出て行つたが、不圖振返つて見ると車内大部分の人は皆落着き拂つて尙ほ腰を掛けてゐる。可笑しいなと思ひながら列に押されて切符を渡して改札口を出た。そして、直ぐ傍の人に訊いた。

「此處は終點ではないのですか」

「い、え、終點はこの次の和歌山市驛です」

失敗しぱいつた、と思つた。と同時に私は出札口を探ねて驅けつけた。丁度車掌の笛の鳴つた時、辛うじて私は乗降臺の上に在つた。そして車室に入つて見ると偶然にもツイ一二分前自分の出て行つたそれであつた。不思議な顔をして私の顔を仰ぐもあり、合點の行つた様に微笑んでゐる人もある。苦笑し

ながら坐りもやらずに其儘入口に立つてゐた。其處から和歌山市驛までの汽車賃は三錢か五錢であつた。

汗の乾く間もないうちに驛に着いた。今度は車内の人悉く立ち上るのを尻目にしながら、わざと落ち着いて改札口を出て来たが、その時尚ほ私は胸の騒いでゐるのを感じてゐた。それを静めるため、先づ待合室に入つて腰を下した。便所にも行つた。

サテ、これから如何したものか。

その頃既う私の路銀は殆んど盡きかけてゐた。高野山にも登る筈であつたのだが、それすら見合せざるを得なかつた。登つて一泊して降りて来る位の餘裕はあつたが東京を立つ時から其處には滞在の心算であつたので、それを裏切るのが辛かつた。いづれまたゆつくりと出直す時もあるだらうと強ひて諦めながら、幾分その慰めの形で、これは豫定外の初瀬に昨日は折れて長谷観音に參つて来たのであつた。初め三四日滞在の筈であつた京都に十九日間もぶら／＼してゐた時から既に懐中は怪しくなつてゐた。京都を出て大阪三日、奈良二日と廻つて来る間、かなり淋しい思ひが續いてゐたのである。

サテ如何するか。最初の豫定では此處から五六里離れてゐるN——郡のH——村に或る友人を訪ねて行く事になつてゐた。が、今ではそれも考へものだと思はれて來てゐるのである。友人とは云つて

も自分のやつてゐる歌の結社の社友の一人で、まだ逢つた事もない人である。その友人は頻りに私を待つてゐるらしく、道案内なども詳しく書いてよこしてあつた。和歌山まで汽車で、其處の驛前から黒江行の電車で終點まで、其處から俾で日方まで、日方町からまた電車で野上まで、其處から歩いて斯うと、丁寧に注意してあつた。その通りにまた私は携帯した地圖に印をつけておいたのである。

見れば成程停車場の前から出發してゐる電車線がある。中に黒江行と札を掲げたものも折々動いてゐる。私は荷物を提げて兎に角この電車の待合所まで行つてみた。そして前に友人から言つて来た道筋を確かめるとまさしく左様であるといふ。續いて私は熊野を廻つて志摩の鳥羽へ行く汽船が和歌山から出る相だが、それに乗るには如何すればい、かと訊いた。それは新和歌浦といふ所から乗船するので、それには新和歌浦行といふあの電車に乗ればい、と指す。その船は毎日かそして何時出帆かと重ねて訊くと、毎日夜の十一時半だといふ。

丁度その時午後の三時半であつた。今から行つて十一時半まで待つても智慧のない話である、では矢張りH——村まで行かう、行つて逢つて直ぐ引返すにしても船には確かに間に合ふ、さうしようとは漸く決心した。そして急いで切符を買つて黒江行といふのに乗り込んだ。その時應對した電車の係は誠に深切であつた。その深切が私をして友人訪問の心を固めるために餘程力のあつた事を後で思つた。

電車は初め市内を走つた。舊城の壕に沿ふあたり、私は端なく鮮かな記憶を心のうちに思ひ起す事が出来た。和歌山附近には曾て十年前前、まだ早稻田の學校にゐた頃土地出身で同級の親しい友人と共に一週間ほど滞在してゐた事があつた。その友人も今は他國に出て、しかもその後お互ひに逢ふ折も絶えてゐる事など、しみじみ思ひ起された。その時は眞夏であつたが、いまこの午後の晴れ切つた日光が石垣や腐れた様な濠の水に射してゐるのを眺めてゐると如何にもあり／＼と當時の事が心に蘇つて来て、それがまた何とも言へぬ寂しさと變つて来る。斯うして通りかゝるまでぼんやりと忘れてゐた事ではあり、旅の身の心細さが手傳つて特にさうであつたかも知れない。一二度登つた天守閣も白々として日光の裡に浮いてゐた。

程なく長い松原となり、和歌の浦にかゝる。名所の悲哀もかなり多いものだが、此處などもその著しいものであらう。何處をどうと取り立て、あれほどの名に負ふ形勝を見る事など出来はせぬ。平凡を通り越していさゝか馬鹿々々しいのを思ふ位である。丁度千潮で、片男波を右に紀三井寺を正面に見て走る頃、電車は溝の様な干潟の臭氣に包まれた。見渡す限り黒々と干てゐるのである。

其處を過ぐると今度は蜜柑の花の匂ひが襲つて来た。島や山といふほどではないのだが、其處此處に茂つてゐるその木から流れて来るのだらう、疲れた心を刺す烈しい匂ひが颯々とした風と共に後から後からと車窓に入つて来る。私は實に久しぶりにこの匂ひを嗅いだのであつた。腰を浮かして見廻すと

今が丁度眞盛りらしく、こんもりとしたその木が白々として花に包まれてゐるのが見える。

電車から降りて俥に乗つた。そして通り懸つた町は、町といふよりも宿場といふが適當らしい日方の町は他處に見る事の少い程古びた、特色のある町であつた。街路が極めて狭く、且つ曲りがちで、軒と軒とは殆んど觸れ合ふばかりに相向ひ、みな蒼然たる古色を帯びて居る。そして商賣は盛んらしく、店頭を見ても行き合ふ生魚や果物などの呼賣りを見ても、何となく活氣が見える。斯うした、見馴れぬ場所を通りかゝると、旅に出てゐるといふ心が如何にも判然と浮いて来るものである。そして事ごとくに胸はときめく。

それからの電車を待つ三十分間は随分また淋しかつた。小さな、露出しの待合室に夕日を受けて腰かけてゐると、また種々の事が氣になる。これから出かけて行つて若し友人が留守だつたら如何だらうとも思はれ出した。私が彼を訪問する筈であつた日はもう十日も前に過ぎてゐる、といふ様な事からこれからさきの行途のこと、留守中の自宅のことなど、それからそれと長い旅に疲れ果て、妙に神経質になつてゐる私は、暫くもぢつとしてゐられない様な焦燥を感じて電車を待つた。やがて向うから来るのに乗り込む。其處から電車は引返すのだ。少し曇りかけて、風が次第に加はつた。四邊にそれと解る蜜柑山からは前より一層強いその花の香が絶えず車窓を包んでゐる。麥は全く黄熟して所々ではもう刈つてゐる。桑を摘んでゐるのも見える。

電車はやがて川に沿うた。村の名に呼ばる、N——川だな、と思つた。三四十分にして終點着、待合所を出て俵を呼んでこれへ行けと言ふと、其處ならもう乗るが程はない、ツイ其處に見えてるといふ。荷物を提げて歩み出すと、道は直ぐ澄んだ川の縁に出た。見れば川に沿うて稍小高くなつた所に五六十軒家の寄つてゐる所が見える。彼處だな、と思ひながら兩手の荷物を提げ代へた。

熊野奈智山

眼の覺めたま、ぼんやりと船室の天井を眺めてゐると、船は大分揺れてゐる。徐ろに傾いては、また徐ろに立ち直る。耳を澄ましても濤も風も聞えない。すぐ隣に寝てゐる母子おやこづれの女客が、疲れはてた聲でまた折々吐いてゐるだけだ。半身を起して見廻すと、室内の人は悉くひつそりと横になつて誰一人煙草を吸つてゐる者もない。

船室を出て甲板に登つてみると、こまかい雨が降つてゐた。沖一帯はほの白い光を包んだ雲に閉ざれて、左手にはツイ眼近に切りそいだ様な斷崖が迫り、浪が白々と上つてゐる。午前の八時か九時、しつとりとした大氣のなかに身に浸む様な鮮さが漂うて自づから眼も心も冴えて來る。小雨に濡れて一層青やかになつた斷崖の上の木立の續きに眼をとめてゐると、そのはづれの岩の上に燈臺らしい白塗の建物のあるのに氣がついた。

「ハ、ア、此處が潮岬だな」

と、先刻さきから見てゐた地圖の面がはつきりと頭に浮んで來た。尙ほ見てゐると燈臺の背後は青々し

た廣い平原となつて澤山の牛が遊んで居る。牧場らしい。

小雨に濡れながら欄干に捉つてゐると、船は正しくいまこの突き出た岬の端を廻つてゐるのだ。舵機を動かすらしい鎖がツイ足の爪先を断えずギイ／＼、ゴロ／＼と動いて、眼前の断崖や岩の形が次第に變つてゆく。そして程なくまた地圖で知つてゐた大島の端が右手に見えて來た。

「此處が日本の南の端でナ」

氣がつかなくつたが私の側に一人の老人が來て立つてゐた。そして不意に斯う、誰にともなく（と云つて附近には私一人しかゐるなかつた）言ひかけた。

「左様なりますかネ、此處が」

「左様だネ、此處が名高い熊野の潮岬で、昔から聞えた難所だよ」

日本の南の端、臺灣や南洋などの事の無かつた昔ならばなるほど此處がさうであつたかも知れぬと、そんな事を考へてゐると老人は更に種々と話し出した。丁度此處には沖の大潮（黒潮のことだと思つた）の流がかかつてゐるので、通りか、つて他國者の鯉船などがよく押し流された話や、鯉の大漁の話、先年土耳其軍艦の沈んだのも此處だといふことなど。

かなりの時間をかけてこの大きな岬の端を通り過ぎると、汽船の搖は次第に直つて來た。そして程なく串本港に寄り、次いで古座港に寄つて勝浦に向つた。

船にしていまは夜明けつ小雨降りけぶれる崎

の御熊野の見ゆ

日の岬潮岬は過ぎぬれどなほはるけしや志摩

の波切は

雨雲の四方に垂りつ、かき光りとろめる海に

わが船は居る

勝浦の港に入る時は雨はなほ降つてゐた。初め不思議に思つた位ゐる汽船は速力をゆるめて形の面白い無数の島、若しくは大小の岩の間をすれすれに縫ひながら港へ入り込んで行つた。その島や岩、またはその間に湛へた紺碧の潮の深いのに見惚れながら、此處で降りる用意をするのも忘れて甲板に突つ立つてゐると、ふと私は或事を思ひ出した。そして心あての方角を其處此處と見廻してゐると、果してそれらしいものが眼に入つた。深く閉した雲の下に山腹が點々と表れてその殆んど真中あたりに、まことに白々として見えて居る。奈智の瀧である。勝浦の港に入る時には氣をつけよ、側で見るより寧ろい、かも知れぬからと、會て他から注意せられて來たその奈智の大瀧である。なるほどよく見える。そして思つたよりも山の低いところにその瀧は懸つてゐるが、何といふことなく難有いものを見る。

る様な氣持で、私は雨に濡れながら久しくそれに見入つてゐた。

入つて見れば此處の港は意外な廣さを持つて居る。双方から蜿蜒して中の水を抱く様に突き出た崎の先には、例の島や岩が樹木の茂りを見せながら次々と並んで、まるで山中の湖水の様な形になつて居る。そして深さもまた深いらしく、次第に奥深く入り込んだ汽船はたうとう棧橋に横づけになつてしまつた。熊野一の港だと聞いたがなるほど道理だと思ひながら、洋傘をさし、手提をさけてぼんやりと汽船から降りた。降りたには降りたが、其からさきの豫定がまだ判然と頭のなかに出來てゐなかつた。そして子供らしい胸騒ぎを覺えながら、兎も角もぶら／＼と海岸沿ひに歩き出した。雨は急に強く、洋傘がしきりに漏る。街はまた意外に大きくも賑かでもないらしく、少し歩いてゐるうちに間もなく其處等中魚の臭のする漁師町に入り込んだ。鯉の大漁と見え、到るところ眼の活きた青紫の鮮かなのが轉がしてある。或所ではせつせと車に積み、或所では大きな釜に入れて燂でゝゐた。

幾ら歩いてゐても際が無いので、幸ひ眼に入つた海の上にかけて出しになつてゐる茶店に寄つて、そこにも店さきに投つてある鯉を切つて貰ひ、一杯飲み始めた。濡れた手提から地圖を引き出して茶店の主人を相手に奈智や新宮への里程などを訊いてゐるうちに、私は不圖この勝浦の附近に温泉の記號のつけてあるのを見出した。主人に訊くと、彼は窓をあけてこの圓い入江のあちこちを指さしながら、彼處に見えるのが何、こちらに見えるのが何、いま一つ向うの崎を越すと何といふのがあるといふ。

斯う鼻のさきに幾つとなく温泉のあることを聞いて何といふ事なく私は嬉しくなつた。そして立つて窓際に主人と並びながら其處此處と眼を移して、丁度そこから正面に見える彼處は何といふのだと訊くと、赤島だといふ。ひた／＼に海に沿うた木立の深げな中に靜かに家が見えて居る。行くなら船で渡るのが、呼んで来てやらうかといふので早速頼んで其處に行くことにきめた。

小さな船で五六分間も漕がれてゐると、直ぐに着いた。森閑とした家の中から女中が出て来て荷物を受取る。何軒もあるのかと思つてゐたらこの家たゞ一軒しか無いのであつた。海に面した二階の一室に通されて、やれ／＼と腰を下すと、四邊に客も無いらしくまつたく森としてゐる。湯はぬるいがまた極めて靜かで、湯槽の縁に頭を載せてゐると、かすかに浪の寄る音が聞えて来る。湯から出て庭さきの浪打際に立つてゐると、小さな魚が無數にそこらに泳いでゐる。磯魚の常で何とも云へぬ鮮麗な色彩をしたのなども混つてゐる。藻がかすかに揺れて、それと共にその魚の體も揺れてゐる様だ。雨は先刻から霽つてゐたが、對岸の山から山へかけて、白雲も次第に上に靡いて、此處からもまた例の大きな瀧が望まれた。

風ぎ果てた港には發動船の走る音が斷間なく起つて居る。みな鯉船で、この二三日とりわけでも出入が繁いのださうだ。夕方、特に注文して大きりにした鯉を澤山に取り寄せた。そして女中をも遠ざけて唯一人、いかにも遠くの旅さきの温泉場に来て居る靜かな心になつて、夜遅くまでちび／＼と盃

を嘗めてゐた。

したたかにわれに喰せよ名にし負ふ熊野が浦
はいま鯉時

熊野なる鯉の頃に行きあひしかたりぐさぞも

然かと喰せこそ

いまは早やとぼしき錢のことも思はず一心に

喰へこれの鯉を

むさぼりて腹な破りそ大ぎりのこれの鯉をう

ましくと

あなかしこ胡瓜もみにも入れてあるこれの鯉

を残さうべしや

六月三日、久しぶりにぐつすりと一夜を睡つて眼を覺すとまた雨の音である。戸をあけてみると港内一帯しらぶくと煙り合つて、手近の山すら判然とは見わかない。たゞ發動機の音のみ冴えてゐる。朝の膳にもまた酒を取り寄せて今日は一日この雨を聞きながらゆつくりと休むことにした。東京の

宅を立つたのが先月の八日、二週間ほどの豫定で出て来た旅が既うかれこれ一月に及ぼうとしてゐるのである。京都界限から大阪奈良初瀬と廻つて紀州に入り込んだ時はかなり身心ともに疲れてゐた。それに今までは到る所晝となく夜となく、歌に關係した多勢の人、それも多くは初對面の人たちに會つてばかり歩いて来たので心の靜まるひまとは無かつた。それが昨夜、和歌の浦からこの熊野廻りの汽船に乗り込んで漸く初めて一人きりの旅の身になつた様な心安さを感じて、われ知らずほつかりとしてゐた所である。初めの豫定では勝浦あたりに泊る心はなく、汽船から直ぐ奈智に登つて、瀨八丁に廻つて新宮に出て、とのみ思つてゐた。が、斯うして思ひがけぬ靜かな離れ島の様な温泉などに來てみるとなか／＼豫定通りに身體を動かすのが大儀になつてゐた。それにこの雨ではあるし、寧ろ嬉しい氣持で一日を遊んでしまふことに決心したのである。

午前も眠り、午後も眠り、葉書一本書くのが辛くてゐるうちに夜となつた。雨は終日降り續いて、夜は一層ひどくなつた。客は他に三四人あつたらしいが、靜けさに變りはない。

翌日も雨であつた。また滞在ときめる。旅費の方が餘程怪しくなつてゐるが、此處に遊んだ代りに瀨八丁の方を止してしまふことにした。午後は晴れた。釣竿を借りて庭さきから釣る。一向に釣れないが、二時間ほども倦きなかつた。澄んだ海の底を見詰めてゐると實に種々な魚が動いてゐるのだ。

六月五日、また降つてゐた。

でも、今日こそは立たうと思つてゐた。薄八丁を止すついでに奈智の瀧も此處から見ただけに留めて置かうかとも思つたが、幾らか心残りがあるので思ひ切つて出かける。船頭の爺さんに頼んで汽船から見て来た港口の島々の間の深く湛へたあたりを漕いで廻る。見れば見るほど、景色のすぐれた港だと思はれた。そして對岸の港町に上つて停車場へ行つた。雨が烈しいので、袴も羽織も手提も一切まとめて其處に預けて、勝浦新宮間に懸つてゐる輕便鐵道に乗り込んだ。間もなく二つ目の驛、奈智口といふので下車。

雨はまるで土砂降に降つてゐた。幾ら覺悟はしてゐてもこれでは餘りにひどいので少し小降になるまで待つてから出かけようと停車場前の宿屋に入つた。そして少し早いが晝食を注文してゐると、突然一人の男が奥から馳け出して来て私の前に突つ立つた。その眼は妙に輝いて、聲まで逸んでゐる。貴下は東京の人だらう、と言ひながら頭の頂上から爪先まで見上げ見下してゐる。何氣なく左様だと答へると、何日にあちらを立つたと訊く。ありのまゝに答へると、さもこそと云はむばかりに獨り合點して更に何處から何處を廻つてゐたかと愈々勢込んで来た。そのうちに奥からも勝手からもぞろぞろと家族らしいもの女中らしいものが出て来た。その上、先刻から店さきに休んでゐた同じく奈智行らしい一行の人たちも立つてこちらを覗き込んで来た。私は何とも知れぬ氣味悪さを感じながら無作

法に自分の前に突つ立つてまじく顔を覗き込んでゐる瘦せた、脊の高い、眼の険しい四十男を改めて見返さざるを得なかつた。そして簡単に京都大阪奈良と答へてゐると、急に途中を遮つて、高野山に登つたらうと言ふ。まことに息を逸ませてる。私はもう素直に返事するのが不快になつた。で、左様だ、と言つた。實は其處には登る筈ではあつたが登らずに來たのであつた。それを聞くとその男は愈々安心したといふ風に、脊を延ばして初めて氣味の悪い微笑を漏らしながら、左様でせう、確かに左様だらうと思つた。サ、何卒お二階にお上り下さい、實は東京からあなたを探ねていらした方があるのです、と言ふ。今度は私の方で驚いた。そして思はず立ち上つた。

「え、誰だ、何といふんです、……僕は若山と云ふのだが」

「へ、え、誰方ですか、もう直ぐこれへ歸つておいでになりますで、……實はあなたを探して一先づ瀧の方へおいでになりましたので、もう直ぐこれへお歸りで御座いますから、まア、どうぞお二階へ」といふ。

この正月の事であつた、私は伊豆の東海岸を旅行して二日の夜に或る温泉場へ泊つた。すると、同じその夜、その土地の、同じ宿屋の、しかも私と襖一重距てた室へ私の友人の一人が泊り合せて、さうして二人ともそれを知らずに、翌日それ／＼分れ去つた事があつたのだ。この番頭らしい怪しき男の今までの話を聞いてゐて、端なく思ひ出したのはその事である。そして私がこの頃この熊野を通つ

て、奈智へ登るといふ事は東京あたりの親しい者の間には前から知れてゐた事實である。誰か氣まぐれに後から追つて来て、今日それが此處を通つたかも知れぬといふ事は強ちに否定すべき譯に行かなかつた。まして此場の異常に緊張した光景は確かにそれを思はするに充分であつた。

「え、誰です、何といふ男が來ました」

あれかこれかと私は逸速くさうした事をしさうな友人を二三心に浮べながら、もう眼の前にそれらの一人の笑ひ崩る、顔を見る様な心躍りを感じて問ひ詰めた。

今度は相手の方がすつかり落ち着いてしまつた。環を作つて好奇の眼を輝かせてゐる女中や家族や客人たちをさも得意けに見廻して、兎に角此處では何だから二階にあがれ、と繰返しながら、一段聲を落して、

「東京では皆さんがえらく御心配で、ことに御袋様などはたとへ何千圓何萬圓か、つてもあなたを探し出す様にといふわけだ相で……」

と言ひ出した。

此處まで聞いて私は再びまた呆氣にとられた。何とも言へぬ苦笑を覺えながら、

「さうか、それでは違ふよ、僕は東京者には東京者だが、そんな者ぢやない、人違ひだ」

と馬鹿々々しいやら、また何かひどくがっかりした様な氣持にもなつて再び其處へ腰掛けやうとす

ると、なか／＼承知しない。

「いえもうそれは種々な御事情もおありで御座いませうが、……實は高野山から貴下のお出しになつた葉書で、てつきりこちらへおいでになる事も解つてゐましたので、ちやんともうその人相書まで手前の方には解つてゐますので……」

「ナニ、人相書、それなら直ぐその男かどうかといふ事は解りさうなものぢやないか」

「それがそつくり貴下と符合致しますので、もうお召物の柄まで同じなのですから、……、兎に角お二階で暫くお待ち下さいまし、瀧の方へおいでになつた方々にも固く御約束をしておいた事ですから此處でお留め申さないと手前の手落になります様なわけで……」

私はもうその男に返事をするのを見合せた。そして其處へ來て立つてゐる女中らしいのに、

「オイ、如何した飯は、酒は」

と言ふと、彼等は惶て、顔を見合せた。先刻からの騒ぎでまだ何の用意にもか、つてゐないのだ。

「え、どうぞ御酒もおあがりになりながら、ゆつくり二階でお待ち下さいませう様に……」

と、その男は終に私の手を取つた。

先刻からむづ／＼し切つてゐた私の肝臓玉はたうとう破裂した。

「馬鹿するな、違ふ」